
メタルランページ

兄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタルランページ

【Nコード】

N3566U

【作者名】

兄二

【あらすじ】

警視庁所属、特殊機甲課勤務の、F-07 MetalGhosts、通称セブン。

彼は、警視庁の戦闘アンドロイドである。

そんな彼が、課長の赤井橙や、新人の立花リツカと共に、軽いノリで事件に奔走する。

そこそ外道なアンドロイドが無双する、そんなメカアクション。

メカデザイン 本編より先に見た方がいいかもしれません。

F-07 MetalGhost

主人公

> i 2 6 3 4 3 — 3 1 2 5 <

リペイント版

> i 2 6 3 4 4 — 3 1 2 5 <

メカデザイン。メカ物は文章で伝え切れない部分が多いので。

ただし、どうにもこうにも絵は本職じゃない上、半ば素人なので四苦八苦。

多分増えないです。よっぽどのことがない限り。

いや、しかし、二百文字制限のおかげで、これしか書くことないのに、後少し文字数を稼がないとならないそうです。

なにぶん、小説家になるうは初めてなもので、どうにも手際が悪いです。

少しずつなれていけばいいのですが。

利用規約 / メタルビギニング

春といえば、いささか開放的になるのも仕方ない。
それが栄転直前ならなおさらに。

立花リツカ。端的に言えば、彼女は浮かれていた。

百五十の身長で、ただでさえ幼い風貌の彼女を、それはさらに幼く見えさせる。

立花リツカ。職業は警察官。階級は巡查。最高の下っ端だ。

初めっから警部補になれる、所謂キャリア組とは違って、最下層からのスタート。

彼女としては、それでも構わないと思っていた。

「ふふー。ふふふ。新しい職場かあ」

立花リツカ。百五十センチの少々低い身長と、肩までの黒髪と、

幼い顔つきの、熱血警官。

そう、熱血警官なのだ。

そんな、出世とはまったく無縁の地方警官の彼女であったが、なぜか、栄転。

今度の勤務先は、警視庁特殊機甲課。

そんな課を、彼女はまったく聞いたことのない名前だが、最近に至って新設された課なのだろう、と判断した。

まあ、それよりも重要だったのは、警視庁直属であることか。

東京都警察を統括する警視庁直属。一地方の交番勤務お巡りさんからしてみれば、随分な進歩だ。

そんなこんな、はるばる東京にやってきたリツカである。

東京でならば、夢見ていた華々しい活躍も、夢ではない、と期待に胸を膨らませながら。

まあ、ただし、仕事は明日からだ。

先方にとつても急な人事だったらしく、手続きが済んでいないらしい。

確かに、ただの地方の巡査を唐突に呼び出すなど普通ではないから、当然ではあるが。

ただ、それゆえ彼女は暇なのである。

田舎者でその上熱血タイプで、お洒落、と言つものにとんと縁がないリツカは、その荷物すら少なかった。

結果、寮の部屋の整理は付いて数十分で終わりを告げ、彼女は外を散策することとなったのだ。

「あ、コンビニだー」

能天気な、リツカはコンビニを指差した。

そして、光に惹かれる虫のように彼女は昼のコンビニに侵入して行ったのである。

そして、彼女は見た。

それは鉄クロガネの体。

黒系統で纏められた、ミリタリー色の強い、まるでロボットのような何か。

まるで、彼女の憧れる、変身ヒーローのような力強く雄々しい人

型の何者かが。

「ああ、それと肉まんとかピザまん一つずつとかから揚げとフライドポテト」

……コンビニで買い物を行っていた。
そんな場面を、彼女は見た。

「えっ……、ええ？ ロボット……？ ええ？」

「かしこまりました。肉まんとかピザまん、から揚げとフライドポテト一つずつですね？」

「おう」

「え、ええ……？」

店員が、普通に受け答えしている。
それがリツカの混乱を加速させた。

(お母さん……、東京は不思議な所です……)

怪しい。この上なく怪しい。

コスパだろうか。

「えと、ちょっといいですか？」

こんこん、とリツカはその機械のような男の肩を叩く。

「んだよ」

ぎろり、と男の瞳がリツカへと向けられた。
やはり、まるでヒーローのような顔だ。

ただ、変わっていることに、右半分だけバイザーで覆われており、なぜか直角定規のような左目が露出している。

機械のような左目なのに、なぜか、表情があるようで、愛嬌があった。

「えと、話は交番で……、あ、今交番勤務じゃないんだった。とにかくっ、お外でお話聞かせてください！」

「は？ どういうことだオイ。俺が何したってんだ」

「ええと。とりあえずお話だけでも……、すぐに済むですっ」

「済むですってなんだオマエ」

「済みます」

「平気な顔で言い直しやがった」

とにかく、とリツカは機械の男の腕を掴んだ。

「来てくださいっ」

「いや、待て」

「早くっ」

「待てっの」

機械の体はびくともしない。まるで鉄が詰まっているかのように、微動だにしなかった。

なんて強情な、とリツカが振り向いた瞬間、男がある一点を指差していることに気が付いた。

「先に、アレをどうにかするべきだろうがよ」

メタリックなその指先。

その指の先には。

ナイフを持ったマスクの男が立っていた。

「金を出せ」

要求は簡潔。

こちらに気を払うこともなく、隣のレジの店員にナイフを向けている。

「う、強盗……！？」

「まったく、強盗の隣で買い物とか、我ながら空恐ろしいというべきか、それとも俺の隣で強盗する強盗の胆力を褒めるべきか」

メタルな男の隣、リツカが思わずごくりと唾を飲み込んだ。

(お母さん……、東京は怖いところです……！)

故郷では、コンビニ強盗に出会うことすらなかった。

しかし、まさか、初日にして東京ではコンビニ強盗に出会うことになるうとは。

今一度、リツカは生唾を飲み込んだ。

先ほどとは違う意味で。
なぜなら。

立花リツカは、警察官である。

こういった彼らに、相対するために、いるのだ。
一步、先へ。

「あの、貴方！」

そして、強盗がリックの方を見た。

「何だ。君は」

迷いなく、強盗はリックにナイフを向ける。
思わず、膝が震えた。

(怖い……！)

平和に生きる日本人ならナイフを向けられる経験など、貴重すぎる。

ただし、リックはそれでも警察官だった。

「ほっ、本官は……！！」

本官は立花リックの巡査である、と震える唇で紡ぐと、全力の気力をもってして、彼女はそれをなそうとした。しかし。
それを途中で遮るモノがあった。

「本官は」

ずい、とリックの前に黒い塊が現れる。

「警視庁特殊機甲課、セブン警部補だが。現行犯でテメエは死ね」
「ええええええ！？」

何が、と思ったときには何もかも終わっていた。

「行くぜ、俺の必殺技、目からビイイイムッ!!」

拳。拳が強盗に突き刺さる。

「ねえ、ビームはゴッ!？」

奇声を上げながら、強盗が吹っ飛んでいく。

「ビーム？ 夢見てんじゃねえぞタコスケ。SFじゃねえんだからよ。夢見がちボーイかオマエ」

本人のほうか、よっぽどSFに見えるのだが。
とかくリツカは、その光景を見て、呟いていた。

「……刑事？ ……宇宙刑事的な？」

しかし、それにしても聞き捨てならない言葉があった。
特殊機甲課。

果たして、リツカが配属される部署の名前は何だっただろうか。
特殊機甲課だ。

そう、この機械のような男が。

右手にホットスナックの袋を持ち。

左手にエロ本を堂々と引っさげた男が。

リツカの上司だったり、する。

利用規約 / メタルビギニング (後書き)

初めてって訳でもありませんが、まだまだ未熟な身です。
お暇があれば、どうかお付き合いください。

尚、一応警視庁所属とか言っつて、警察ものの様相を呈していますが、
空気からしてさほどでもないです、間違いなく。
また、私の未熟ゆえ、もしくはストーリーの都合上、現実の警察と
はかなり異なつた組織となっておりますが、パラルルの日本の一組
織、ということでご容赦ください。

Section 1 メタル上司

「えと」

「なんだ」

警視庁、特殊機甲課。そのオフィス。

椅子が、やけに狭そうに見えるその体躯は、黒かった。

そして、対岸に座るリツカは、非常に居心地が悪そうであったという。

「……なんで、そんなメカニカルのですか？」

首をかしげて、リツカはそれを指差した。

「いきなりそれか。まあ、いいけどな」

先日の強盗事件から一晩明けて。

聞いていた通りの部署に着いたら案の定。この通りである。

「話せば長くなるが。こご……、アレだな。寝て起きたら、によきによきとだな」

「によきによきと!?!」

「こごなっってたんだ……」

「短い!」

「まあ、嘘だけどな。いや、そこそこ事実だが」

「ええ!?!」

覗く、左目のようなカメラが、まるで半眼のようになってリツカ

を捉える。

「とりあえず、脱いたらどうでしょうか。ソレ」

暑くないのかと、リツカは提案してみるが、

「断る」

それはあっさりと却下された。

「えっと、どうしてです？」

「見たら早いんじゃないのか？」

瞬間、セブンと名乗った黒い男から、男の声ではない声が響く。

『メンテナンスハッチ、オープン』

男の、鉄を一枚通したような声とはまた違う、完全な機械的な音声。

そして、その声が響いた瞬間、彼の背中の一部が開いた。

「見てみるよ」

指差されて、リツカは男の後ろへと回る。

そこには、人間の背中があるのだろう、と思っていたのだが、そこにあつたのは。

みちい、と詰まっている機械群。

「え？ 体は？」

「ねえよ」

驚くりっかに、男は言った。

「当機はF-07 MetalGhost。戦闘用機動人形だが、理解できたか田舎モン」

「えええええええ？」

ここに至って、いつそなるほど、と言ってしまうたい心境だ。だから、特殊機甲課か、と。

「な、中に人が入ってるんですよね？」

「ねえよ。何ならフルメンテ拜んでみるか？俺の赤裸々な細切れが見えるぞ」

「……本当に？」

「大マジだよ、馬鹿野郎」

がくん、と背中中のハッチが閉まる。

「さつきも言ったが、当機は戦闘用機械人形F-07 MetalGhost。通称はセブン。階級は警部補だ。わかったか？」

そしてセブンは、椅子を回してリツカと向き合った。

「ようこそ、特殊機甲課へ。立花リツカ巡查。我々の業務は実に幅広い。道行くお婆さんの手助けから、突然変異でミュータントになつちまつたお婆さんの後始末まで、だ」

「お、お婆さんとししか関わってない……！」

「他にも、ゴミ拾いとか、社会のゴミ拾いとか、な」

「……えっと、結局。我々の役目は……」

おずおずと聞いたリツカに、セブンはあっさりと言い放った。

「厄介ごと全般だ。おめでとう。死亡率七十パーセントのこんな僻地にやってきちまった自分の不幸を恨め。きっと超能力者の相手とかする羽目になるぜ」

そんな話は聞いていない。

愕然とした思いがリツカを突き抜ける。

警察における厄介ごととは何か。見方によれば色々あるだろう。

しかし、このレベルにおいての厄介ごとといえば。

(お母さん。私、死ぬかも……)

命に関わる仕事だ。

「泣くべきですか……?」

すでに涙目なリツカ。

「ま、安心しろよ」

しかし、目の前にいる機械の上司は言った。

その瞳が生暖かくて、リツカは目の前の上司への評価を改めた。

少しばかり、見た目と口調で勘違いしたが、もしかするととても優しい上司なんじゃないだろうか。

この後に続く台詞は。彼のメタリックな見た目からして絶対にこ
うだ。

『一人立ちできるまであ、守ってやんよ』

「オマエに期待されてる仕事って、パシリと雑用だから」

ああ、やっぱこいつ、とんでもない上司だ。

「え」

「まずはコンビニでお茶買ってきてくれ」

まず最初。

警視庁に所属しての初仕事だ。

……コンビニにお茶買いに行くのが。

「さっきまでコンビニにいたでしょおおー!?!」

リツカの悲痛な叫びが響き渡った。

「買い忘れたよ」

「自分で買ってきてくださいよおおー!?!」

「うるせ。目からビーム出すぞオラ。じゅっに行くぞ」

「出ないんじゃないですかあ!」

「いや、マジで出るから」

瞬間、リツカの頬を何かが掠めて、後ろの壁を焦がした。

「え……、え?」

セブンの左目から、肉眼でもわかるほどの光の筋が現れたのだけは、リツカにもわかる。

「ま、どっちかと言われっとレーザーだがな。正直人間相手にや使えん割に、射程距離も短い、使えねえ一品よ」

「突っ込み待ってるんですか？　ねえ、待ってるんですかっ！？」
「とりあえず、買って来いよ。お茶。お茶でも飲んで落ち着けて」
「というかお茶飲めるんですかアナタ！！」
「飲めねえのに誰が買うかタコスケ」
「第一ですね！！」

そんな話まったく聞いてない。とセブンに叫ぼうとしたその時。
二人の会話に割り込む者がいた。
分厚いファイルをセブンの頭に振り下ろして。

「痛ってえええええ！！」

こつん、とかそんな生易しい音ではなく。
ごがんつ、とかそんなへこみそうな音がした。
人間なら、頭蓋骨陥没ものだ。
しかして、振り下ろしたのは一体誰だろうか。
リックは、セブンの向こうを見上げる。

(わ……、綺麗な人)

まるで、先ほど異常な勢いでファイルを振り下ろしたような人には見えない。とはリックは言わないことにした。

お利口さんである。

そんな人物は、半眼で、椅子に座るセブンを見下ろしていた。

「早々に新人いびりか？」

冷たく、伶俐な美人。それが第一印象だろうか。
腰元まである長い銀髪に、釣り目がちな冷たい赤い瞳。
身長も高い。百七十くらいはあるだろう。そんな女が、呆れたよ

うに溜息を吐いていた。

「教育だよ。俺が教育係つつう話だつたらうが」

「部下を教育して欲しいと言ったのだが。パシリじゃない」

「つたく、要するに部下っぽくパシリをしつけりゃいいんだな？」

絶対に分かっていない。

届くことはない恨みを込めてリツカはセブンを見るが、不意に、セブンの向こうの女性の視線がリツカに向いたことに気がついて、彼女は立ち上がった。

「本官は立花リツカ巡査でありますっ」

「そうか。私は赤井^{あかい} 橙^{おれんじ}。警部だ」

「はいっ、よろしくお願いします」

「俺と随分態度が違うじゃねえかよ、あ？」

「人徳の差だな」

少し、冗談めかして橙は言った。

その通り、とリツカは心中で頷いてみせる。

「さて、私はまた行ってくる。変なことを教えないように、セブン」

「とつと行つて来いよオレンジ。それとも、ヘルプ要るか？」

「いや、大したことじゃない」

そう言つて颯爽と去っていく橙。

それを二人で見送つて、二人だけが再び残される。

「……ええと」

「んだよ」

「痛覚、あるんですね」

「ああ。味覚も嗅覚も痛覚もな。切ろうと思えば切れるが、いつもは人間と変わんねえよ」

「ハイテクなんですねえ……」

「付いてこれてねえな、テメエ」

無論、付いていけない。

リツカはさほど機械に詳しくもないのだ。だから、もっと俗っぽい視点で物を言う。

「要るんですか？ 味覚とか」

「っは、要るんだとよ。博士が言うにはな」

吐き捨てるようにセブンが言う。

「そうなんですか」

結局よくわからないリツカは、適当な答えを返した。

そうして、黙り込む二人。

リツカはこんなメタリックな上司に対する話題など持ち合わせていない。

そして、メタルな上司もまた、面倒臭そうにリツカを見つめるだけだ。

そんな中、不意にセブンが立ち上がった。

「どうしたんですか？ 先輩」

不思議そうにリツカが見つめる。

セブンは呟いた。

「仕事だ」

Section 1 メタル上司（後書き）

新投稿なので、ストック消費して更新。

とりあえず、次一本までハイペースで上げて、それ以降は普通で。

次は、明日早めか、今日の夜に。

ちなみに、主人公は、セブんです。はい。

ヒロインに位置しそうなのは、実は橙です。はい。

とりあえず、セブンの見せ場であるはずの戦闘まで駆け足で行きま
す。些か急ぎすぎな気もしますが、間延びさせても仕方ないので。

Section 2 / メタルラーニング

銀行である、ビル内。

「聞いてないです。私、聞いてないですこんなの」

現場。そう呼ばれる場所にリツカはいた。

「危ないです。絶対危ないです」

立てこもる犯人たちのいるビルの一室。

その部屋の前に、リツカとセブンは立っている。

「仕方ねえだろ。人手が足りねえんだよ。だが、安心しろ。テメエの役目は犯人の説得だけだ」

光学迷彩、とやらでここまでであっさりと来てしまったが、リツカとしては恐々とせざるをえない。

仕事だ、付いて来いの一言で、のこのこやってきてしまった己の考えなしを呪う。

「そ、そんなの先輩がやってくださいよ」

「俺がやるのは無理があんだろーがよ。このナリで説得したら即銃弾の雨あられか、良くてなんだコイツ状態だろうがよ」

「じゃあ、説得せずに先輩がぱーつとやっちゃうとか」

「そうしたいところは山々だけだよ。色々と上がうるせえんだよ。余裕があるなら一応それくらいのポーズは見せろってよ」

確かに、一理ある。

少し、リツカは納得してしまった。

「あ、安全なんですね？」

「説得が無理だったら俺が中入ってやる。オマエは下がってればいい」

「わかりました……、本当に安全なんですね？」

「くでえぞ。行け。いつの間にか懐まで入られているってことを押しやせ。後ろには立ってやる」

「分かりました……、じゃあ」

そうして、リツカは行った。そもそも説得なんて突入前段階にやるもんじゃないのか、なんて常識を置き去りにして。

「騙された！！ 辞めたい！ この職場辞めたい！！」

途切れることなく響く銃声。

セブんとリツカが走る背後に強盗達。

「ハッハア！ 地獄へようこそ！！」

「安全つて言いましたよね！！」

「まさかドア開けた時点ですでに銃が構え済みだとは思わなかったぜ、流石のこの俺も。サーモグラフィでも使っとくべきだったな！」

「しっかりしてくださいよ！！」

いつの間にか気が付かれていたのか人質も放り出して、強盗達は撃つて来た。

話し声に気付かれたのだと思われる。

「というか一強盗犯がなんでっ！ こんな重装備なんですか！！ 戦争でもしたいんですかっ！」

銃は、アサルトライフルまである。

ひっきりなしの銃声がうるさくて仕方ない。

「まあ！ よく考えりや、俺んとこに話が来た時点で、手に負えない奴がいるってことなただけだな！！」

「辞めたい！！」

「気張つて走らねえと人生辞めちまうけどな！！」

「帰ったら辞表提出します！」

「分かった、握りつぶす！」

「辞めたい！！」

階段を駆け上がり、ひたすら走る。

何とか、怪我もなく、二人は屋上に辿り着いた。

蹴破るように扉を開いたセブンの後ろに続いて、リツカは青空の下に転がり出る。

「先輩、八方塞がりですよ!？」

「分かってるつつの! 何のためにここに来たと思ってるんだ……、
っそい!！」

セブンは、それからすぐに後ろに向き直ると、階段を上ってきた強盗犯に拳を放った。

幾人かの悲鳴が響き渡る。多分、殴られた強盗犯に巻き込まれて階段から落ちていった男たちの声だろう。

しかし、焼け石に水か。

セブンが扉から離れると同時に、なだれ込むように屋上に現れる強盗たち。

手にはやはり黒光りする、銃。

「せ、せんぱい……」

セブンの背に隠れ、リツカはおびえた声を上げた。

しかし、返ってきたのは焦るでも恐れるでもない声音だった。

「情けねえ声出してんじゃねえ。せつかくテメエのために屋上まで出てきたんだ」

「へ?」

「室内だと! 跳弾して危ねえから全力で戦えねえじゃねえかよ!」

その言葉を皮切りに、セブンが動く。

姿勢を低く、突貫。

思わず全員の視線がセブンを向いて、反射で銃弾が放たれる。

セブンは避けようもしない。

しかし、穿つはずの弾丸は、セブンの装甲に弾かれ在らぬ方向に消えていく。

「相手のヤバさに気付いたか？　だがもうおせえ！！」

リツカには、まるで機械の顔がにやりと笑みを浮かべたように見えた。

下から突き上げるような掌低。一人の顎が砕けんばかりに打ち抜かれ昏倒。

そして、そこを飛びのき、別の一人の下へ。そのままの低い姿勢で足払い。

足が浮き、崩れた体勢に、腹部へ向けて決るような拳。

また一人昏倒。

今度は、その昏倒した一人を掴んで、もう一人の下へ投げる。

ぶつかり、踏鞴を踏む男に踏み込み、

「死ね！」

蹴り。放たれた前蹴りは、放り投げられた男ごと、強盗を吹き飛ばす。

「突如死ねとか公職とは思えないっ！！」

次々と、強盗の言い分など無視してセブンは男たちを昏倒させていった。

「全身の毛穴から内臓が染み出して死ね！」

そして、早々と上ってきた男の最後の一人を殴り倒し。

「エグい！！！」

悲鳴を背に受け、毅然と屋上に佇む。
そんなセブンを、リツカは呆然と見つめていた。

(すごい……。やっぱり、まるでヒーローみたいな……)

性格は些か参った問題だが、しかし、凛々しく立つその姿はまさに、彼女が憧れるヒーローそのもの。

思わず見とれた。

が、しかし。

そんな瞬間だった。

「む……！？ 動く生体反応？ マズい！ 新人、避ける！！」

ぱつと、セブスがリツカを見る。

次の瞬間、リツカにも異変は分かった。

足首だ。足首を、掴まれている。

倒れ付していた強盗が、リツカの足を掴んでいるのだ。

そして、それはあっさりと、引き摺られ。

(ああ、なるほど。私屋上の端っこに立ってますもんね。そりゃ、
転んだら)

彼女が、そう納得した瞬間。

彼女はビルの屋上から真っ逆さまだった。

あまりに唐突過ぎて、思考は逆に呑気だった。

(……え？ これ、あれですよ？ 完全にもうあれですよ、これ、死にますよね？ 死にましたよね？ これ)

「あんっ……、にやろうっ！」

落ちていく新人。

無論、見守っている暇はない。

彼女を落とした男もいるが、構ってられない。

「逃がさねえぞ、お茶汲み係い！」

迷いなく、セブンはビルの向こう、床のない世界へと飛び込んだ。
重力に逆らうことはなく、下へ。

重量の差から、セブンの方がリッカより落ちる速度は速い。
だが、それでも足りない。

『Boost』

そうセブンが判断した瞬間、機械的な女の声が響き、セブンの背、
腰などの各所に取り付けられたブースターが火を吹いた。

青白い炎が吐き出され、機体は加速。

「新人っ、手え伸ばせ!!」

ブースターを吹かし続けながら、セブンは手を伸ばす。リツカも、ゆっくりとした速度ながら、確かに手を伸ばし。その手は確かに届いた。

セブンはそのままリツカの体を引き上げ、抱きとめる。

「せ、せんぱい……」

そして、反転。

「え？」

「行くぜ、オラァ!!」

一際大きく、ブースターが火を噴いた。落ちていた機体は、一転、空へと駆け上る。

「オラオラオラオラ！ 行くぜ顔も知らない馬鹿野郎め!!」

加速。

「いやああああ！ 降ろしてくださいっ!!」

落ちるときには悲鳴一つ上げなかったリツカも、耐えられなかった。

加速。

加速。

加速。

壁を踏みしめ、壁を走り、セブンは加速していく。

れたレーザーによってジユワッと逝った。

「却下」

「そんなぁ……」

「書くなら遺書にして置けよ」

「それがいやだから辞めたいんですよぉ！」

「第一、んなのはオレンジに渡せよ。あれが課長なんだからよ」

セブンの突っ込みに、リツカは言いにくそうに頭を掻いた。

「なんか、やりにくじゃないですか。赤井課長は」

「俺ならやりやすいのかよ、あん？」

「貴方が一番私の命に関わりそうなんですよ！！」

すると、セブンはハンバーガーを食べながら、器用に言うのだ。

「まだ死んでねえじゃねエか。だったら、大丈夫だろ」

そう言って、彼はハンバーガーを丸々飲み込む。

「……辞めたい」

Section 2 メタルライニング（後書き）

後三本で、ひと段落です。

Section 3 メタルワーキング

あれから半月。

「新人、お茶入れてきてくれ」
「やです、もう……」

いまだにリツカは特殊機甲課にいる。

「なんだテメエ。パワハラすんぞコラ」

「う、訴えますよ!？」

「残念だが、俺に法律は適用されねエ」

「え」

「一応回りからはそこそこの扱いだが、法的扱いは備品だ」

「そうなんですか」

「だからパワハラしても問題ねえ」

「やめてくださいよ!」

仕事にも慣れた。

無論、メインの仕事はお茶汲みとパシリだが。

「冗談だ。色気もへったくれもねえからな。テメエは。やるならオ
レンジにやる」

「なっ……! それはそれで癪です……」

もう一度、現場にも出た。主に雑用係だが。

「……はあ。こんなことで良いんでしょうか」
「なにがだよ」

思わずもれ出た溜息に、セブンが反応を返す。

「私の仕事、こんなんでいいんでしょうか……。来る日も来る日もパシリばかり」

「いいんだよ。この課あ、人手不足だからな。雑用が欲しかったんだ」

「そういえば、私赤井さんしか見てないんですけど」

「他にいねえからな」

「え」

「後あ、俺の整備班の面々だけだ。整備班はそこそこいるぞ。ただし、工作上オマエとはまったく会わねえだろうがな。後はせいぜい非常勤が数人」

想定外の埒外のことを言われて、思わずリツカは停止した。

総員が三桁を超える捜査一課もあるというのに、この、特殊機甲課は実働員は実に三名。

それは課長のオレンジも忙しく動き回るわけだ。

「どういうことですかそれっ!!」

「そもそもこの課の設立からしてな。あれだからよ」

「なんででしょう」

「この課は、俺の運用のために設立されてるからな」

「……はい?」

どうも、話についていけなくなりそうで、リツカは小首を傾げた。セブンはその鉄の人差し指を立てて、説明する。

「俺が完成し、いざ使おうなんて言った時にだが。どこその既存の課に入れても大して効果は上がらねえんだよ」

「はあ」

「集中砲火の中を突っ切る装甲と、一撃で敵を戦闘不能にする馬力なんてのは、単騎で暴れて初めて効果を発揮するってこった」

確かに、リツカのような、と言わずとも、一般人と組めば自由に動けなくなり、大してスペックは出せなくなるのだろう。

リツカは、今までの仕事で考えるに、納得に至った。

「求められてるのは、スペックに合わせた、それだけの戦果だ。ただし、俺を一人にすると、他の課との連携に摩擦を生む」

「なんとなく分かりますけど。課と個人じゃうまく噛み合いませんよね」

「そういうこった。だから特殊機甲課だ。俺を効果的に運用するための整備班。そして、摩擦を防ぎ、円滑な連携をするための、指揮を行うオレンジ。これで構成されてるわけだ。うちは」

「私は？」

「最低限の人員しかいねえから、雑用がたんねえんだよ。ま、それ以外も足りてねえんだけどな」

「……やっぱり辞めたいです。この課」

そう、呟いたその瞬間、オフィスの扉が開く。

現れたのは、赤井橙だ。

彼女は、自分の机から棒のようなものを回収して、また外へと向かった。

「また行って来る。ここを頼む」

「ああ」

そう言って去っていく上司を見送って、リツカは呟いた。

「……あの、赤井課長はなんで御被い棒なんて持ってったんですか……?」

四角の連なつたような紙が先端に取り付けられた棒を、橙は握つて外に出たのだ。

不審すぎる。

「ああ、大幣つて奴だな。まあ」

セブンは言う。

「アイツの実家、神社だからなあ……」

「説明になつてませんよね！ それ！ 説明になつてませんよね！？」

「神社で巫女だから、御被いの一つもするってもんだ」

「……警察が!？」

「おう」

「幽霊なんていないでしょ？」

「意外と映るぞ。俺のセンサーにも」

……。

「辞めたい」

そう、妙な職場にも、その仕事にも慣れたものだ。
セブンのパトロールと称した買い食いにつき合うのも。

「んだよ、じろじろと」

とにかく、彼は物を食べる。

オフィスでももっぱら煎餅を齧っているし、今だって肉まんを頬張っている。

胃なんてないだろうに、良く食べる口だ。果たして、上下方向にスライドした後の口に放り込まれた食物たちはどうなっているのか。ただ、そんな上司だが。

「……食うか？」

悪い人間……、もとい、悪いメカではないのではないかと、リツ力は思い始めてきている。

確かに、些か口が悪いし、性格も悪いが、慣れた。

「食べませんよ。人の食べかけを欲しがるほど食い意地張ってないんですー」

「お？ それは嫌味か。受けて立つぜ、パワハラで」
「そのネタ引つ張らないでくださいよ」

ついでに、勤勉じゃない、どころか不真面目だし、食い意地が張っている。
が、しかし。

「む、おう、そこの婆さんよ」

別に優しくないわけでもないのだ。

「明らかに積載量オーバーだ。型遅れは無理せず静かに隠居してろ
ってんだ馬鹿野郎め」

まあ、思い切りびしっと指差しながら大荷物のお婆さんに近寄って
いくのは如何かと思うものの。

「まあ、これは七さん、すまないねえ」

しかも、お婆さんも荷物も小脇に抱える姿勢はどうかと思うが。

「重くないかい？」

「おお？ 喧嘩売ってんのか婆さんよ。婆さんくらいの軽さなら東
京湾まですつ飛ばしてやらあ」

「ふふ、頼りになるねえ、七さんは」

「婆さんは頼りになんねえんだから誰か呼べつての」

「それが携帯の使い方がよく分からなくってねえ……」

「こないだ教えてやったろうがよ。ったく、しかたねえな」

「ありがとうねえ、そうだ、煎餅あげるよ。七さんの好きなやつ」

「マジか！」

意外と彼は周辺住民に溶け込んでいる。

確かに、コンビニ店員も手馴れた空気に対応していた。

しかも、意外と慕われているのだ。

子供にジャングルジムのように扱われたり。女子高生にファウン
デーション塗られたり。サラリーマンの中年と一緒に屋台でラーメ
ンを食べたたり。

少々ばかり、妙な慕われ方だが、しかし、そんな姿を見てみると、
リツカの心がなんとなく和むのだ。

まるで、それは彼女の憧れるヒーローのようで。

「それじゃあ、先輩。そのお婆さんを送って行きましょうか」

「おう、新人荷物半分持て。婆さんは任せろ」

「まるで拉致現場みたいですね……」

彼女は、幼少期、同年代の少女で流行った魔法少女よりも何より
も、ヒーローが好きだった。

もっぱらすることは飯事よりもヒーローごっこ。

仕事で中々帰ってこない警察官の父と、ヒーローを重ねてもいた
のだろう。

それ故、彼女へのヒーローへの憧れは、ヒーローのように格好良
くなれないと知っていたながら未だに消えていない。

ただ、今現在、その眼前に、ヒーローのような非常識な存在がい
るのだ。

どんな相手にも屈しない機械の男が。

だから、未だに特殊機甲課をやめていない。彼女本人ですら分か
っていない理由であるが。

「おい、仕事だ。新人」
「私も行くんですか？」

オフィスで、唐突に立ち上がるセブン。
「どうやら、何らかの電波を受信したらしい。」

「オレンジはもう現場で会議中だ。お前がオペレーションしろ」
「わ、私が？」

オペレーション。

つまり、セブンの動向を見守って、指示を出す役目だ。
見取り図を読んで方向を指示したり、変化する状況についての報告を行う。

「ああ、そうだ」
「え」
「行くぞ」
「わ、私、できるかどうか……」
「やれ」

にべもなく、取り付く島もない。
セブンは毅然とした態度で言い切った。

「今回は、店前で大暴れしてる奴がいるってだけだ。たいしたオペレーションにはならねェ」

「はあ……」

「じゃあ、行くぞ」

瞬間、気が付いたときには既にリツカは抱きかかえられていた。

「え？ ……え？」

「この方が速い」

「……二階……」

呟くが、もうすべて手遅れだ。

リツカの悲鳴が響き渡り、セブンはすぐさま道路を走り始めたのだった。

「着いたぞ」

「もうやだ、辞めます。絶対やめます、スピード違反、ダメ、ゼッタイ」

「俺に法定速度は関係ねえ」

アスファルトを引つかきながら、セブンは現場に停止した。

「……そこに警官共が集まってるな。そこ行け。オペレーションは任す」

「……はい」

のろのろと、現場の警官達の作るバリケードへと、リツカは向かっていく。

「その、特殊機甲課、到着しました」

「おお、来たんですか！」

警官の一人が振り返り、リツカを見る。

リツカは、緊張で硬くなりながら、言葉を返した。

「オペレーターを務める立花リツカです」

「はい、では、こちらへ」

そうして、案内されたのは一つのテントだ。

遠巻きにも、長机と椅子が見える。

「こちらでお願いします。では自分はこれで」

「はい」

駆け足で現場へと戻る警官を横目で見て、リツカは椅子に座った。そして、持っていたノートパソコンを起動。

無駄にハイスペックなそれは、些か速く起動を終了し、リツカの操作を待っている。

(まずは、先輩の状態を……)

マウスを操作し、セブンの機体状況を確認。
各種パラメーターはオールグリーンを返している。

「先輩。配置に着きました」

『了解。指示は?』

つけたインカムから返ってくる声に対し、リツカは左を見た。
長机の隣に座っているのが、最高責任者であろう。

「状況はどうなってますか?」

リツカの質問に、隣に座っていた、白髪交じりの壮年の男は言った。

「見ての通りだ。不思議なくらいの重装備。バリケードで持ちこたえちゃいるが、このザマだ。すまんが、好きにやってくれ」

「だ、そうです先輩」

『了解。つまり俺が暴れりゃいいんだろ?』

「ええと……、程ほどに」

壮年の警官が、微笑ましそうに笑っていた。

「……痛覚センサー70%カット。機体チェック……、オールグリーン。各部正常。出力をミリタリーに」

吹き付ける風を感じながら、セブンは前を見つめる。

警官達の人垣の奥からは、断続的な銃声が聞こえている。

セブンは、それを見据えながら、手近な壁を裏拳で殴りつけた。

「行くか」

痛みは、ほとんど感じない。

めり込んだ拳を抜いて、セブンは駆け出した。

すぐに迫る警官達の背中。

しかし、ぶつかるとはありえない。

飛翔。

飛び上がったセブンはあっさりと人垣を越え

戦場へ。

「我々の要求は、捕まった同志の解放である！」

『先輩……、こないだ捕まえたのって強盗じゃなくてテロ組織だったんですか……？』

セブンの脳内に、直接リツカの声は響く。

「知らん。似たようなもんじゃねえの？」

『違いますよ！ 絶対！！』

そんな言葉に、セブンは笑った。

無論、笑うような口などはない。しかし、獰猛に笑っているかのような空気を纏っている。

「似たようなもんだろっが」

『どこがですか？』

「新人！ 俺達の仕事を言ってみろ！」

『えっと、道行くお婆さんの手助けから、突然変異でミュータントと化したお婆さんの後始末までです！』

「悪い奴をとっ捕まえることだよ！！」

大きく音を立てて、セブンはアスファルトに足をつけた。

警官も、十名を越えるテロリストも。

一同全て、セブンを見た。

「ぶっちゃけ。俺達のやるこたあ、変わんねえんだよ」

まるで止まったような時の中。

セブンだけが、動いている。

「超スーパーブーストウルトラ必殺……」

驚きの、思考の間隙を縫うように、セブンは走る。

敵は数人が固まっていた。

その中の一人へ、容赦なくセブンは拳を放つ！

「弱パンチ!!」
「ぐえっ」

脾腹突き刺さった拳に、苦悶の声を吐いて、男が一人倒れ付す。
どさり、と音が響いてやっと、時は動き出した。

「新人！ 人数情報をとつとと寄越せ！」
『ええと、敵人員十二名！ 内一名気絶!! 相手はアサルトライフルで武装！ 手榴弾の使用の危険性あります!』
「了解！ 鎮圧する!!」

横っ飛びに動いて、別の男の足を払う。
体勢を崩して、今度は腹に向かって膝蹴り。
と、そこで、セブンの背に銃弾が浴びせかけられる。

「っ、仲間がいるのにお盛んなこって!!」

セブンは、すぐさま反転。
そして走る。

「つてえな、てか痒い!!」

セブンは、無数の銃弾を弾きながら、敵へと迫っていった。
特殊な状況下でなければ、セブンは痛覚センサーを切ったりはしない。

常に機体状況をチェックしてられる余裕があるわけではないため、
痛みというのはどれほどの打撃を受けたのか知るのに重要な情報源だ。

故に、痛覚センサーは鈍いながらも動き続け、セブんに弾が当た

っているという事実を伝え続ける。

「さて、ここで注目！ 活目して目えカツ開け！！」

そんな中、俄かにセブンの左目が輝いた。
目を焼くほどの光量が放たれる。

「スタングレネード！ っておおうつ！ モニター切り忘れた！！
俺のカメラも焼けた！」

『何やってるんですか先輩！』

「いや、だが問題ねえ、メインカメラが逝ったくらいで！」

唐突な視界の消滅にあわてる男たちの下へ、セブンは踏み込む。
そして、蹴り。

「がっ！？」

『もしかして、見えてます……？ 先輩』

「見えるっ！ 俺の第六感が覚醒したっ」

『嘘ですよね』

「嘘だ。メインカメラ位で騒ぐ俺じゃねえ」

セブンに積まれている、サーモグラフィを始めとするセンサー類
は多岐に渡る。

そのため、メインカメラがなくなったとしてもセブンに痛手はな
い。

「顔の見分けが付きにくくて、味方もぶん殴りがちだけだな」

『怖っ！ 私の近くでやらないでくださいね？』

「テメエが全力で遠くに逃げればいいだろ」

『逃げる私と強盗を間違えないでくださいよ？』

「じゃあ目印として秒間二十のステップでタップダンスしながら帰れ。そしたら聴覚センサー含めて間違えねえ。ステップの数が少なかつたら敵の偽装と見なす」

『高難易度ですっ！』

などと、会話するうちにも、立っている男たちは減っていく。

セブンの装甲を抜く装備は彼らには無く、そして、視界のない状況で下手に撃つては同士討ちを免れない。

圧倒的優位な環境下で、セブンは彼らを下していく。

そうして、最後の数名に差し掛かり、そのまま戦闘は終結する。かに思われた。

「待て、待て待て待て待て！！ 新人！！」

『はい！ なんですか！？』

「お前ちゃんとモニタ見てたか！？」

『え？』

「きつちり見てたのか！？」

『何のことですか？』

「あそこにいる、あの女！ 発見できなかったのか！？」

遠くで、リツカが息を呑んだ気がした。

恐る恐ると言った空気で、女が、店から出てきたのだ。

今まで中で震えていたが、セブンの戦闘によって銃声が聞こえなくなったから出てきたものと思われる。

果たして、平和惚けがなせる業か。銃声が聞こえなくなっただけで終わったと勘違いして、女は外に出てきてしまったのだ。

『そんな、レーダーにも、各種センサー類にも反応なんて……！？』

「映りにくい所に居たんだろ！」

『保護してください！ 至急！！』

「やってる！　だが遠い！　圧倒的に奴らの方が近え！！」

ブーストをかけて、全力で走るセブン。
しかし。

「動くなよ！　動いたら、この女は殺す」

事態は悪い方向に転がった。

人質。男が指先を少し動かしただけで、あっさりと、捕まえられた女は死ぬことだろう。

「そんな……！　わ、私のせいだ」

呆然と、リツカは呟いた。

目まぐるしく動かざるを得ない戦闘中に常にそう言ったことに気を配れ、と言うのはあまりにも酷。

だから、セブンに責任を求めることは出来ない。
むしろ、安全圏に座って、事態を見渡せるリツカこそが確認して
おくべきことだった。

「どっししたら……」

モニタに映るセブンは動かないでいる。
動けないでいるのか。

ログを見れば、微弱な反応はあった。それを見逃したのは、リツ
カの過失。

「ど、どうしよう……、先輩……」

思わず口を突いて出た悲鳴のような言葉に返ってきたのは音声で
はなかった。

『落ち着け新人。新人使つといて扱い配りきれなかった俺の責任だ』
パソコンの画面上に現れる文字が文章を作り出す。
そして、その後現れた言葉は、実に簡潔な一言だった。

『どっしにかする』

「せんぱい……」

まるで。

(まるで、ほんとに正義の味方みたいなの……)

まるでそれは彼女の憧れそのものであり。

そのものだったからこそ。

『……この女がどうなってもいいのか？』

『好きにしろよ』

「えええええ……？」

一歩前が出る。

ただそれだけの行為。

それだけで、リツカは思い切りげんなりとした。

「先輩！？」

『お前はソイツを殺れねえ』

セブンは、言う。

『いいか、人質を殺してみる。テメエは一撃で豚箱行きだ。そのテメエが抱えてる女は命綱じゃねえ。藁ですらねえんだよ』

『だったら、この女を道連れにしてやる、といたらどうだ？』

セブンは、また一歩前に進む。

「あ、ちょ、先輩！？ 良いんですかこれ先輩！？」

リツカの叫びに、応えは返っては来なかった。

『なるほど、じゃあ、こうだ。いいかテメエ。人質を殺してみる、その瞬間お前を殺す』

その掌を男へと向けて、セブンはゆっくりと前に進む。

セブンの掌には、円状の穴がある。それがなんであるか、考えるに難くない。銃口だ。

『できるわけがない、警察だろ、アンタ。正義の味方だ。色々と面倒なんじゃないのか？』

『できる。何で俺がある程度の人権を与えられてる割に備品扱いなのか教えてやるうか？』

また一步、セブンは前へ踏み出した。

『許可を出さなくても相手を射殺できるためだよ！ 備品にあらゆるルールは通用しねエ。テメエが勝手に俺に当たって死んだってことだ！ 世間体も問題ないな！』

ジャキリ、とセブンの腕で何かが鳴る。

『いいか、動くなよ？ 動くと撃つぜ。テメエの命がどうなってもいいのか？』

『……………』

「せんばあい！！ それ警察の言うことじゃないですう！！」

リツカの呟きに、セブンはまたしても答えなかった。

『選べ。人質放すかくたばるか』

「こんなの、ヒーローじゃないですう……………！！」

いじけたリツカの声が響いたが、やっぱり答えはなかった。

「……先輩！！ 馬鹿！ 馬鹿先輩！！」

銃声も失せて消え。

事後処理の残る現場で、セブンとリツカは向き合っている。

「ああん？ うっせえぞ新人」

「馬鹿ですか！！ あれ、もし一歩間違えたら人質が死んでたかもしれないんですけど！！」

リツカの詰問に、セブンは一言。

「死んでねえ」

「きいい！ その返答はむかつきます！！」

「じゃあ、根拠でも言えればいいのか？ 相手は自棄になって殺すようなタイプには見えなかった。冷静であると、少なくとも俺は判断した。だからあの問答で何とかなると判断した」

「もし間違えて撃つような事態になったらどうする気だったんですか？」

「そんなときは犯人をこう、パンツとだな。少なくともだな、逃がす訳にやいかんだろ。その後どうなるか知れたもんじゃねえ。大勢巻き込んで自爆とかゴメンだぜ」

「……もういいです」

リツカは、肩を落とした。

確かにセブンの言い分も分かるのだ。人質優先で、後々大きな殺戮に繋がってしまったとしたら、どうしようもない。

答えの出ない命題ではある。大きな殺戮、それは起きるかどうかも分からないことであり、どちらが正しいかなど、誰にもわかりはしないのだ。

それでも、もっと考えて欲しいと思ってしまうのは、リツカのヒーローへの憧れによる補正、なのだろうか。

「やっぱり、機械だからなんですか？」

「なにがだよ」

「機械だから、考えも冷たく計算っぽくなるのかなって。先輩は道徳の勉強したほうがいいですよっ」

拗ねたように、リツカは吐き捨てる。

「ああ？ 俺が機械に見えるってか？」

「はい、この上なく」

「……まあな」

一応の所、今回の件は成功したと言っただけだろう。

死者ゼロ名、一人残らず逮捕。発砲もなし。大殊勲だ。ただし、リツカは心に決めた。

(絶対やめてやります、この職場……!!)

命が幾つあっても足りないことに、今気が付いた。

(だって、先輩、私が人質にとられても容赦なく撃ちそうなんですもん……!!)

Section 4 メタルハート

(うつ。やめたい)

最近リツカの考えることは概ねそれだ。

問題は、未だにやめれていないことである。

辞表を書くのは問題ない。もう、実家に戻って農家をせんという覚悟だ。

しかし、なにが辛いつて、

「先輩に渡したら頭潰されそう……」

そして、橙はあまりオフィスにいない上、非常に話しかけ難いのだ。

普通の中の普通、一般人としては、あの伶俐な美人と話すだけで三回死ねるのだ。

「そうだ、辞表おいて全力で逃げれば……、つて熱う!!」

と、考え事をする脳に、俄かに警報が発される。

手が熱い。まさに淹れているお茶が溢れ、手に降り注いでいるではないか。

思わず、あらゆる全てから、リツカは手を離した。

結果、台の上に乗っている、手を添えていただけの湯飲みは無事だったが、急須の自身は。

「またあつつい!！」

容赦なくぶちまけられた。

あまりの熱さに思わずうろたえるリック。
手を焼く熱さに、思わずどうすればいいのかも分からなくなって、
ひたすら慌てる。

「えっと、拭かなきゃ。雑巾、雑巾……」

そんな彼女に、声を掛ける者があった。

「まずは手え冷やせ馬鹿」

男の声だ。

そして、リックの職場でまともに聞ける男の声など、セブン以外にいない。

彼は、蛇口を捻り、水を出すと、リックの腕を取って、水の中に手を入れさせる。

「……」

そして、セブンは無言。

(せ、先輩? なにか言ってくれないと気まずいです先輩!)

あの一件以来、リックとセブンは、微妙に気まずい空気だ。
リックが避けているのが主に原因なのだ。

「外、行って来る」

「はい?」

思わず、リツカは聞き返した。そして、それを聞こえなかったものだと思っただろうセブンが、もう一度同じ言葉を返す。

「外行つて来る」

「え、はい」

「お前は後でそれ拭いとけ」

「は、はい」

そう言つて、ふらりとセブンは外へと消えた。

と、そこでリツカはやつと冷静になり、セブンを目で追う。

「……先輩？」

当然、既にセブンは見えない。

だが、それでもリツカはセブンを目で追った。

「よく……、わかんないなあ……」

呟いた言葉はどこにも届かず、空気へと溶けて消えた。彼女の指を滑り続ける水の流れだけが音を立て続ける。そして。

不意に、その音を断ち切るような凜とした声が響いた。

「立花」

凜とした、どこか低い、女性の声だ。

このオフィスに女性は、リツカ以外に橙しかいない。

「ひゃいっ……」

不意打ちに、ぴんとリツカは背筋を伸ばす。

「ああ、いや。そのままでもいい。流石に火傷を負っている人間に無茶はさせないさ」

橙は、至極真面目な顔でそう言った。

「あ、はい……、じゃあ、私に何かありましたか？」

果たして、お茶をこぼしたことを注意されるのだろうか、と、疑うリツカに、橙は言葉を紡ぐ。

「君は、セブンと何かあったのか？」

「……はい？」

意味が分からなくて、リツカは思わず聞き返した。

「よそよそしい、気がしてな。部下の精神状態の把握も上司の務めだ」

対する橙は、涼しげな顔。

確かに、リツカはセブンを避けている。

何故であろうか。

(……私の憧れと違うから?)

リツカの抱くヒーロー像と、限りなくヒーローに近い現実の物であるセブンがかけ離れすぎているから気に入らないのだろうか、とリツカは思う。

しかし、何か違う気がした。
弱きを助け、悪を倒すヒーロー。それがリツカの憧れだ。
それはまさに、品行方正で紳士的なあり方である。
しかし、セブンはどうか。端的に言い表せばチンピラだ。
拳句、人質を取った犯人を脅迫するような男でもある。
では、何が違うのかと聞かれれば。

「……私、先輩のことがよく、分かりません」

彼は、たまに優しいのだ。

だから、分からない。

リツカの見るヒーローからかけ離れているように見えて、市民に慕われ、時折優しさを見せるセブン。

だから、よく分からない。そして、それ故に避けてしまうのだ。
未知のものに恐怖するように。

「……なるほど、セブンが、か」

橙が、真剣な面持ちで頷いた。

「先輩は、たまに優しいです。でも、基本チンピラです」

「そうだな。チンピラだ。だが、たまに優しい」

「この間の記録は、見ましたか？ 赤井課長」

「ああ、セブンの脅迫か」

「なんだか、よく分からないんです」

そう、よくわからないのはセブンが時折優しいからだ。

その姿は、とても矛盾しているように、リツカには思えた。

「よくわからない、か……」

橙は、どこか遠い目をして、呟く。

「私が、間違ってるんでしょか。少数を見捨てても、多大なリスクを防ぐほうが正しいんでしょうか」

憧れとの、食い違い。リツカの憧れにもっとも近いはずのセブンは、リツカの憧れとはどこかずれていた。

しかし、ずれ切ってもいない。かなり近いのだ。だからリツカは己の理想の方がおかしいのではないかと不安になる。

「さて、な」

答えなかった橙に、リツカはぽつりぽつりと呟いた。

「先輩の言い分も、わかるんです。だけど、それなら、もっと無慈悲な機械なはずなのに」

「時折優しくして、か？」

途中からの言葉は、橙が引き継いだ。

そう、だからリツカは彼を避けているのだ。

リツカにとって、彼は中途半端に理想的で、中途半端に彼は最低だ。

彼がヒーローだったら良かったのに。もしくは、彼がただの機械だったら良かったのに。

「まあ、そうだな……。矛盾、一貫しない、不条理、か。当然だろうな」

だが。

いや、だからこそ。
次の瞬間橙が言った言葉は。

「彼の魂は、人間だから」

激しく、衝撃的だった。

「え？」

「F-07 MetalGhostにインストールされたのは、とある警官の精神だ」

あっさり、まるで夕食の献立でも口にするように、橙は口にする。

リツカの開いた口は塞がらなかった。

「……え、なんで」

ここで、リツカは大きな勘違いに気がつくこととなる。ずっと、セブンは機械だと思っていた。セブンはAIで動く、人間のような機械だと思っていた。

何故。その質問に橙は至極真面目な顔で答えた。

「必要だったからだ。あの機体を動かすするには、健全なヒトの精神が必要だった」

「それって、人道に……」

「表向きは、人道行為ということになるんだろう。インストールされたのは、とある事件で殉職した警官の魂だ。乱暴に区分すれば、医療行為と言っていていいかもしれない」

F-07は、人間だった。

「おかしいとは思わなかったか？ 食事、睡眠、痛覚、その他諸々。ただの人形に付けるのは無駄が多すぎる。それらすべては、人の心、セブンの発狂を防ぐためにあるのだから」

ヒーローでも、機械でもなかったのである。

「立花。お前の役目もそこにある。ここに配属された理由だ」

リツカは、橙の方を向くことができなかった。ただ、冷やされ続ける手元だけを見つめる。

「立花、お前はあいつに、普通というものを忘れさせないためにお前はいる」

「ふつっ……」

「そう、普通。現状セブンの精神は健全に保たれているが、仕事柄、価値観がぶれて行く。必要なのは狂うことなき健全な精神。私も……、まあ、セブンと同じ側の、前線の人間だからな。一緒にぶれて行くことしかできない」

リツカが配属された理由。

なるほど、とようやく理解した。

そして、気付く。

（私……、先輩に機械だとか、冷たいだとか……）
言ってしまった。

「私……、先輩に酷いこと」

人相手に、機械みたいだ、などと。
しかも、本当に機械にされてしまった人間に向けて。

「む……。すまない、話の途中だが、仕事が出来てしまったようだ。
私は行って来る」

橙が、俄かに動き出す。

ノートパソコンを持ち、外へ。

そして、扉を開けて、出て行く前に声が響く。

「まあ……。、気負う必要はない。自然体でぶつかって行けばいいさ」

扉が閉まる音と共に、声は消えた。

また、水の流れる音だけが場を支配する。

次にその音を断ち切ったのは。

「私も、行かなきゃ……！」

今度はリツカだった。

「先輩に、謝ろう」

今でも、意見は食い違う。しかし。

機械とか、冷たいとかの罵倒は、謂われなき罵倒。

それは、リツカの理想とは、程遠い。

それだけは、謝らなくちゃいけない。

「オレンジ、状況は？」

『また前回と同じ組織が市街地で暴れている。確認された人数は全員で五十人。拠点は前方のビル。我々の任務は、周囲の鎮圧は警官隊に任せ、ビル内の鎮圧を行うことだ』

「そんなにデケエ組織だったのかよ」

ビルの前。

セブンは鈍い風を受けながら立っていた。

『赤主天衆教。名前くらいは聞いたことがあるだろう？』

「マジかよ」

赤主天衆教。数年前に世間を騒がせた新興宗教の名前だ。それは、セブンの記憶にも残っている。

カルト宗教ともいえる類で、麻薬密売にまで手を出し、教祖が逮捕されて、その名は世間に聞こえなくなった。

『彼らの要求はいつも教祖の解放だ。ただし、前回、前々回の件で大幅に逮捕者が増えたおかげで、消耗戦を避け、一気に大博打に出たらしいな』

「そう簡単に出してやるわけやねえのにな。しかし、宗教組織のそ

れにしちゃ、装備が豪華なんじゃねえの？」

『バックに中国系の組織が付いていることはわかっている。そこから流されたものだろう』

「じゃあ、血気盛んな素人じゃなさそうなの？」

『雇った傭兵かなにかじゃないか？ 信者数は大幅に減り、教祖を助け出したい者と、ただ暴れたい者の区別も付かないらしい』

「ただし、引っ込みも付かないか？」

『そうだ』

呆れたように、セブンは肩を竦め、ビルを睨み付ける。

「自衛隊の出動とかは？」

『要請は行っているらしい。上がもう少し早く動いていれば今頃来ていたはずだが……』

「相変わらずか。付近の住民は？」

『タレコミのおかげで、スムーズに避難は済んでいる。軽傷者数名と、撃たれて重傷が二名』

「奇跡的つつつても問題ねえか。しかし、それじゃ、一人でこいつをどうにかしろってか？」

『お前にしかできまい』

「へいへい」

今要請が出ていると、いうことは、支援は望めないと断られてもいるということだ。

セブンは単騎でビル内の制圧を行わなければならない。

ため息でも吐く様に、セブンは下を向く。

大変な作業だが、しかし望むところでもある。そうあるべきだ。

F・O7とは、そうあるべきだ。

『いつ死人が出るかわからん状況だ。我々が拠点を押さえれば、死

人も減らせるはずだ』

「はっ！ アイアイサーってか？」

吐き捨てるように、セブンは口にして、ビルの中に飛び込んだ。
鉛細工のように、ガラスが割れ、セブンは着地。

「誰だ！！」

ビル内エントランスに潜んでいた数十人が、ソファー、柱、机、
壁から姿を現し、一斉に銃を向ける。

「ついでに」

セブンは、それらを気にすることもなく、橙に聞いた。

「射殺許可は？」

『とっくに知っている』

セブンを探して、リツカは走る。
走る、が途中で重要なことに気が付いた。

「先輩がどこに行くか位聞いておけば良かったよね!!」

気が付いたときにはもう遅い。遅すぎである。

しかし、だからといってすぐごとオフィスに戻るのはいかかな
ものか、と、リツカは踵を返すことができずにいた。

「もう少し探そつと」

走るのをやめ、歩く。

どうせ、たいした仕事もないのだ。

特殊機甲課のお茶汲み係とは、他でもない立花リツカである。

「お茶汲む相手がいないと、仕事にならないもん」

書類整理なんて二の次だ。多分、それでいい。

そう考えて、歩むリツカは、街が騒がしいことに気が付いた。

「ん?」

そして、唐突に鳴る破裂音。

それは、最近聞いたような破裂音だった。

気のせいだったかもしれない。敏感になっているだけかもしれない。
い。

「これって……」

だがそれは、まるで銃声のように聞こえた。

「どうして……!?!」

リツカはまた走る。

銃声の聞こえた方向へ。

すると、そこには見知った人間の姿が見えた。

「赤井課長!!」

「ん……? 立花か。こんな所まで、どうしたんだ?」

道を封鎖する警官隊と、仮設テント。

そして、テント下の長机の所にいるのは、間違いなく、赤井澄だ。

「こ、これは一体……」

全力疾走で上がった息を整えるように、膝に手を付いて、リツカは聞いた。

「テロだ。現在鎮圧に向かっている」

「えっと……、大丈夫なんですか?」

「優勢だ。タレコミのおかげで、こちらは早く動けたからな。大したこともなく収束するだろう」

その言葉に、リツカは胸を撫で下ろした。

「そうですね……、じゃあ、先輩も?」

「ああ。拠点内で暴れている」

「無事、なんですか?」

「装甲に傷が入る位だろうな。どうせだったら、後で磨いてやれ」

「は、はい」

本当に、大した問題ではないらしく、緩んでいるわけではないが、本当に切迫した、余裕のない空気ではなく、リツカも安心して、背筋を伸ばした。

そして、後は朗報を待つだけか、と思われたその瞬間。

「む……？」

橙が顔色を変えた。

「どうしたんですか？ 課長」

「いや、リーダーに何かが映っている……」

「え？」

「ここだ」

リツカの目には何も見えなかったが、橙が指差したポイントを見て、違和感に気が付いた。

一瞬だけ。数秒に一瞬だけ、緑の点がマップ上に光るのだ。通常であれば緑の点が浮き続けるのに。

「ここは何だ、地下……？」

前と同じような状況だ、とリツカは気が付いた。

リーダーにはどうにも映りにくい場所というものがある。

「ここまで映りにくいのは、壁の材質か……？」

橙が、ノートパソコンを真剣に睨み付ける。

そこから、何かを読み取るうとしているようでもあった。

「この移動ペース……、無軌道な動き。子供か!？」

「そんなことまでわかるんですか!？」

「移動速度が一定している割に遅い。そして、あちらこちらへとふらふらとした動きは子供のそれだ。子供、もしくは老人か……」

「わ、私！ 行つてきます!！」

それは、前回の失敗への贖罪だったのかもしれない。
ただ、

「さて、立花！」

気が付いたときには、リツカは走り出していた。

警官隊もまた、中へ入ろうとする一般人を止めること、外へ向かおうとするテロリストを止めることは考えていたが。
身内を止めることまでは、考えが及んでいなかった。

「場所はすぐそこ……！ 近くに他の反応もなかった……！！ なら、早ければ早いほどいい……!!！」

すぐさま、リツカはセブンのいるビルとは別のビル、何の変哲もないデパートに駆け込んだ。

駆け込んで、エレベーターよりも、エスカレーターよりも、近くで早い階段を選ぶ。

「誰か、誰かいるの!？ 私はおまわりさんですっ！ 安心して出てきてください!！」

階段から降りる段階で、既にリツカは叫んでいた。

そして、目的の人物は意外にもあっさりと発見される。

「おかあさん……、ど」お！？」

五歳くらいの少年が、デパートの食品売り場を不安げに歩いていた。

「良かった……！！」

「おかあさん、どこー！？」

すぐさま、リツカは少年に駆け寄り、彼を抱きしめる。

「ぼく、大丈夫だよ。すぐお母さんにも会えるからっ。おまわりさんと一緒に来て、ね！」

「……おまわりさん？」

「そ。私、おまわりさんだから」

「……うん」

子供に微笑んで見せ、リツカは立ち上がると、少年と手をつなぎ、歩き出した。

「赤井課長、少年を無事保護しました」

『まったく、無茶をする……。まあ、無事ならとりあえずはいい』

「ところで、避難時に母親とはぐれてしまったみたいなんですけど。ボク、お名前は？」

「みやけ、しんたろー」

「みやけ、しんたろう君だそうです」

一階へと上り、急いでいて無線なども持っていなかったため、携帯で連絡する。

『ああ、母親から問い合わせが来ている。どうやら、現在避難している人間を確認している最中だったようだ』

「そうなんですか。じゃあ、戻りますね」

『いや、待て……！！　まだ出るなッ』

「え……？」

制止の声が聞こえたときには、リツカは既に自動ドアの前に立っていた。

思わず、目が合った。

そう、これはリツカの状態確認を怠った結果だ、と言ってもいいだろう。

しかも、リツカはこのデパートの地下、もしくはデパートそのものの内部がレーダーに映りにくいことを知っていた。

つまるところ、橙が内部の状態を完全に把握できるわけじゃないことを知っていた。

にもかかわらず、リツカは状態確認を怠って、指示を待つことなく外へ出てしまった。

目が合ったのは。

「え」

冷たい砲身だ。

「動くな、手エ上げる!!」

ビルを駆け上り、次のオフィスへ着くなりセブンは叫ぶ。
すぐ目の前にいた男に掌を突きつけて。
そして、思わず手を上げた男に向かって。

「動くなつつつたるオ!!」

「理不尽だっ!!」

セブンが拳を放つ。

そして、男が地を転がった瞬間、その後ろ。
デスクに潜んでいた人員が銃を握って立ち上がる。
そして、容赦ない銃撃。

しかし、ひるむことなく、セブンは掌を相手に向け。
掌が、俄かに光る。

銃撃の、マズルフラッシュだ。

「今んとこ外してやってるんだから感謝しろよ!!」

セブンの掌には、銃口がついている。

前腕部に取り付けられたカートリッジによって多彩な弾を発射で
きる構造だ。

今回装備されているのは、通常弾。発射速度は、機関銃。
弾丸が、雨のように降り注ぐ。

そして、相手が怯んだ瞬間に、セブンは近場にあった机を片っ端から蹴り飛ばす。

「おっ……、らア!!」

どよめく敵に突貫。

ただ、腕を振り回すように殴る。

自分で蹴飛ばした机も弾き飛ばしたりしながら、テロリストたちを片付けていく。

「赤主天衆教、ばんざああ」

「うるせえ!!」

叫ぼうとした男を蹴り飛ばし、再びセブンは上の階を目指す。

駆け上がった先は、下が展望できるような窓のついた、広い一室にぼつんと机が置いてあるだけ。

最上階。何らかの企業のビルだったのだろうそこは、社長室と思われる。

そこには、三人の男が待ち構えていた。

「M134、ミニガン。お前のために用意してもらったモンだよ。機械人間」

「そいつぁ……、買われたもんだな、俺も」

ミニガン。ミニ、などと名前が付いているが、その響きとは裏腹に、銃口を六つ持ち、それを回転させ、秒間百発もの速度で撃ちだす兵器。

ガトリングガン、と言えはわかりやすいだろうか。

「秒間百発。撃たれりゃ痛みも感じないらしいぜ!!」

そして、その引き金は引かれた。
容赦なく放たれる弾丸。

ベルト状に繋がる弾丸が、銃に吸い込まれては放たれる。
それらの弾丸が、セブンを打った。

ぶれた銃口が、セブンの背後の壁も、前方の床も穿ち、埃を巻き上げて、その姿を隠す。

そして、如何ほどの間、銃撃が続いただろうか。
カラカラと、弾は出されず、銃身だけが回る音が響く。

「まったく、高く付いた買いモンだったぜ……」

そうやって男の一人が銃から手を離れた。
巻き上げるものがなくなって、煙が晴れていく。

「さて、やったか？」

だが。

だが。

「痛エじゃねえか……!!」

そこには変わらず機械の男が立っていた。

「……おいおい。死亡フラグだったか？ これ」

「おう。回収して行けよ。立てたフラグはよ」

ぶおんっ、と唸りを上げたのは、セブンの拳である。

鉄の塊が、何故そこにいるのか。
リツカには理解できなかった。

「な、な……、なんで戦車なんかここにあるんですかあ……？」
「逃げる、立花っ！」

鐘を鳴らすような、凜とした声で、リツカははっとなった。
即座に少年の手を引き、走り出す。
室内に逃げずに、外に走り出してしまったのは幸か、不幸か。

「急げ！ 部隊を再編してアレを食い止める！！ 防衛網を突破されたら大惨事になるぞ！！ く……、確かに赤主は巨大な宗教だったが……、そこまで稼ぎが良かったのか？ 後ろの組織にとっては！！！」

必死で、リツカは走る。耳元で叫ぶ、橙の声も良く聞こえなかった。

『自衛隊の到着は！？ とにかく急かせ！！ 立花！ 救援がくるまで耐える！！』

ただし、自分の名前が呼ばれたことと、自分のしなければならぬことだけは、よくわかった。

だから、はい、と答えようとしたのだが。

「は
」

リツカの横を何かが駆け抜けた。果たして何が駆け抜けたのか、よくわからなかったが、予想はできた。

砲弾だ。

幸いだったのは、相手が訓練された兵隊じゃなかったことだろう。マニュアルを見ても、実射で訓練までは行えないから、突如実戦でで動的に当てるのは容易なことではない。

不幸だったのは、彼女の前方の壁に着弾した弾が、爆発したことだろう。

悲鳴すら、出ない。

そもそも、大したダメージではないはずなのだ。

前方の壁からリツカまでの距離は結構なもので、爆風がリツカを吹き飛ばしたただけだ。

奇跡的に、破片がリツカの体を貫くこともなかった。

それでも、強かに背中を打ち付けた。

咄嗟に腕に抱いた少年は無事なようであったが、リツカはすぐには動けない。

戦車が、リツカの目前まで迫ってきた。

どうやら、戦車はリツカを敵として完全に定めたらしい。

敗戦ムードの中の自棄と言ってもいいのではないだろうか。

目に付いたものから、手当たり次第に殺そうというのだ。

携帯も、リツカは落としてしまった。

聞けば冷静になれそうな、凜とした課長の声も、今は聞こえない。もしかすると、そのままひき殺していくのか、と思えば、戦車はリツカの目前で止まる。

「……はは」

また、砲身と目が、合う。

「ここで死ぬんですね、私」

うつぶせになるよう転がって、そして、無事だった少年を立たせると、背中を押す。

彼は、なきながら駆けていった。

戦車の中の人間は、それくらいの冷静さはあるのか、少年を狙うような事は、なかった。

「変な職場に送られて、先輩は良くわからないし、仕事は微妙だし……」

ため息でも吐くように、リツカは呟いた。

「命は幾つあっても足りないし」

上手く動かない体で、リツカは腰元に手を動かす。

「やめてやりますよ、あんな職場。生きて帰れたら。生きて帰れたらあの鉄面皮に辞表見せびらかしてやるんです」

じりじりと、芋虫のような速度で動いていた体は、そこでやっと

大きく動いた。動いてくれた。

「まだ、遺書は書いてないんですよッ!!!」

片膝立ち。銃を構える。ニューナンプ。実践でまともに撃つたことなどほとんどない、頼りない相棒だ。

(ああ、でも。また、撃つ事なく終わりそうだなあ……)

戦車は無慈悲である。

砲撃音が響いた、気がした。

気がしただけかもしれない。まだ放たれていないかもしれない。幻覚かもしれない。

もしかすると、死を目前に、鋭敏化したリツカ感覚が本当に放たれるのをスローモーションでみていたのかもしれない。

しかしなににせよ。砲弾がゆっくりと迫ってきているように、リツカには思えた。

少なくとも、濃密な死の気配というものを、リツカは確かに感じていた。

世は無情。

正義の味方などいない。

「あ……」

迫る砲弾と、リツカの間。

「……せん、ばい」

「……変身。F・F参上」

いるのはただの鉄塊だ。

「なんてな。格好いいか？ 俺」

その鉄のマスクが笑っているように見えた。

Section 4 メタルハート（後書き）

展開が走りすぎな気もしますが、主人公の見せ場のために必死です。

それと、お気に入り登録してくれた方。評価点入れてくれた方、ありがとうございます。

未だ感想数ゼロ、お気に入り登録件数二、と情けない状態ですが、しかし、こうして数字で表されるのがこんなにうれしいとは思いませんでした。

とりあえず、第一話としての「私の上司はメカニカル」は次回でクライマックスで、一区切り。引き続き、お楽しみください。

Complite メタルヒート

「ま……、人生そんなに上手いかなエがな。所詮俺は機械仕掛けの人形だし、テメエは土まみれ」
「先輩……」

砲弾を掴んで、止めているのは見まごう事なき、セブン。戦車が、それを見て大きく後ろへと下がっていく。

「勝てるんですか……？」
「どう思うよ？ 正義の味方じゃねえからな。絶対勝てる決まりもねエ」

リツカは、苦しそうに笑っていた。

「勝てるって言うてくださいよ……、可愛い後輩の前なんですから」
「じゃあ、アレだな」

セブンは、一歩前へ出る。
瞬間、砲撃音が響いた。
そして、それとほぼ同時に、セブンが腕を払う。
セブンの真横が、爆発した。

「負ける気しねエ」

『Boost』

機械音声。

飛翔。

青い炎を上げて、セブンが砲弾のように駆け抜ける。
断続的な爆発音が響く。

セブンの元で爆発が起こる。

だが、止まらない。

小揺るぎもしなかった。

十秒にも満たない攻防。

セブンが勝った。

距離はもう、一メートルもない。

その時、戦車の中の間人も、砲弾では止められないと気が付いたのか、それとも、パニックになったのか、戦車が突撃を始める。

セブンと戦車が、激突し、がっちりと組み合う。

そこで、やっとセブンの突撃は停止した。

動かなくなる、鉄塊が二つ。

そこで、砲撃が連発される。

爆音と、金属を殴りつける音が鳴り響く。

「お……、お、お」

小さく、唸るような声が聞こえた。

「先輩………?」

そして、リックの声に応えるように。

その唸りは咆哮に変わる。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ!—!」

無事。

それどころか。

少しずつ、セブンが押し始めていた。

じりじりと、履帯が。戦車そのものが、浮き上がっていく。

「おおおおおおおおおおらああああああああー!!」

戦車を押し込むように、再びセブンは飛んだ。

車体が全て浮いてしまった後は、もう雪崩のように。

抵抗できなくなった巨体が異常な勢いで押し込まれる。

ガリガリと、戦車がアスファルトを、壁を削り、セブンと共に飛ばされていく。

そして、その距離、五十メートルにも達しようか、というその瞬間。

「星でも見て来なああッ!!」

唐突に、戦車が空を飛んだ。

まるで、コミカルなぐらいに、垂直に上へ舞った。

下にはただ、拳を天を突かんとばかりに突き出した、機械の人がいた。

「……ありゃあ、何処に落ちるんだろうな」

「……先輩？」

空は、憎らしいほどに青かった。

「まったく。素人が戦場に飛び出してんじゃねえよ。馬鹿野郎が。現場で死ぬ前に俺がぶっ殺すぞタコスケ」

「ごめんなさい、先輩」

「驚いたろうが。ビル片付けたと思ったら、オレンジにいきなり下に急げとか言われるしよ」

「ごめんなさい」

素直に、リツカは頭を下げた。

セブンとリツカが立つ大地には、誰もいない。

避難が済んだ現場なのだから当然だ。

セブンが戦車を片付けている間に、残党も一通り片付いたらしい。

少年もまた、保護されたと言う。

一件落着、と言ったところだ。

「ま、反省してんなら良いけどよ」

「ごめんなさい……、先輩」

そうして、もう一度リツカは頭を下げた。

「あ？ もういいっての」

「いえ、その。機械とか、言っちゃった事……」

それが、本来の目的でもあった。

すると、隣を歩くセブンが、不意にリツカの方を見た。

「オレンジに聞いたのか？」

「あつと、はい」

「……ま、気にすんなよ」

そこにいるのは、ヒーローでも、機械でもない。
人がそこに立っているだけだ。

「あ、でも人質がいるのに無茶するのは良くないと思いますっ！」

びしっと、リツカはセブンを指差した。

「ああ？」

「私は駄目だと思いますっ！」

別に、どちらが正しいとか、そんなものはどうしようもないの
だ。
人が二人そこに立っているだけなのだから。

「駄目だと思っんですっ」

ただ、思う意見をぶつけてみる。

「そうかよ」

それでいいのだろう。

「多分、それが私の仕事なんですよね？」

「ああ？ なんだよ」

「あと、先輩、私には立花リツカって名前があるんですからね？」

「るせえよ、新人」

翌日。

「マジかよ」

「……マジなんです」

椅子に座るセブンが、まるで苦笑いのように見える。

「立花 立花でタチバナリツカかよ……。……いい名前だな」

「先輩に気を使われた！！ もう生きてけない！！」

セブンの手にある紙には、リツカの顔写真と、個人データが少々。

「よし、わかった、名前で呼んでやるよ」

「え、嫌な予感するんですけど」

「ダブル立花」

「だから見せたくなくなっただんですよー!」

「タチバナツインドライブ」

「やめてくださいっ」

「格好良いだろうが」

やめてください、とリックがもう一度叫ぼうとしたとき、背後から分厚いファイルが、セブンの頭に振り下ろされる。

「つてえ!」

「新人で遊ぶな、セブン」

「あ、課長」

「さて、仕事だ、セブン、立花」

ファイルを、デスクに置くなり橙は言った。

「今度はどんな仕事ですか?」

そして、当然の疑問をリックが口にし。

真顔で、橙は答えた。

「突然変異でミュータント化した老婆の後始末だ」

「 好んで読むべき書物」

Complite メタルヒート（後書き）

と、ここで一話終了です。一応ここまでが一話の区切りってことで。

気分が乗ったら二話書きます。

というか、構想のため、少し間をおいて書くこととさせていただけます。

一週間から二週間ほどでどうにかしたいと思います。
付き合っていたら、また。

次回は超能力者辺りとやりあいたいかな。

利用規約 / スティール日常

「いいか、パシリってやつあだな。こつ、気遣いだ。言われてなくともお茶を買ってくるもんだ」

「……先輩」

「それも、気分って奴を察して、時にはコーヒーや炭酸飲料を選ぶか、全部買ってきて選んでもらうかだ」

警視庁所属、特殊機甲課のオフィスは、広い割りに今日も人がいない。

今もまた、セブンとリツカの声だけが響く。

「ついでに、鮮度ってやつはいつも何にでも重要だ。これが違うだけで印象もぜんぜんちげえ」

全身これ全て機械の男、セブンは椅子に座り、まるで人間のよう
に煙草を吸っている。

「先輩」

「最悪の場合、氷も一緒に買って入れておくべきだな」

「先輩っ！！」

遂に、リツカが声を荒げた。

堪忍袋がリミットオフである。

「それ新人への教育じゃないですよー！！」

「ばっかやる。アレだアレ」

「なんですかつ」

「憲法にもあるだろうが」

「なにがですか！」

「国民は全て、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有するってよ」

「だからなんですかっ」

「その能力に応じてだ。つまり、パシリの才能がある奴にはパシリの仕方を教えようって考え方だ」

「ええ！？」

思わず声を上げるリツカ。あんまりである。

しかも公務員だから、憲法関係においては反論し難かったりするのだ。

「なにをやっている」

だが、助け舟はやってきた。

振り下ろされる分厚いファイルと共に。

「それは曲解だぞセブン。別に日本国憲法二十六条はそのようなことを説いているわけではない」

「つてえええ……」

そのファイルを振り下ろしたのは、銀髪の伶俐な美人。

腰まであるその長い髪を靡かせて、颯爽と現れた彼女は、冷ややかな紅い瞳でセブンを見下ろしている。

「部下を苛めるな」

「苛めてねえよ。俺のあ愛の鞭だ」

「お前の愛は変化球過ぎる。鞭以外にしてやれ」

「愛のモーニングスターだ」

「棘付き鉄球ですかっ!？」

真面目な顔して続く二人のやり取りに、叫ぶりツカ。
そんな彼女を尻目に、特殊機甲課課長、赤井橙は、言った。

「さて、仕事だセブン。行くぞ」

「ああ？ おう？ おう」

あっさりと、セブンは拉致されて行ったのだった。

「被害者は午前九時、付近を通りかかる住民によって発見された」

「む……」

真面目そうな話に、思わずセブンは身構える。

いま、橙と向かっている町の一角で、一体何が起きたと言っのか。

「被害者は、まるで解体工事用の鉄球でも叩きつけられたかのように、ぐちゃぐちゃな、見るも無残な姿で発見された」

「おいおい……、かなりイっちゃまってるじゃねえかよ」

町は、長閑そのものだ。そのものはずだが、その裏では、罪のない人間が、見るも無残に殺されていると言っのか。

「そして、現場はそのままにしてあつてな。これが被害者だ」

「……花壇じゃねえか」

「そうだ」

「花壇じゃねえか」

「ああ」

「鉄球みてエなもん叩きつけられた花壇じゃねえか」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「ガイシヤは？」

「それだ」

形のいい指が、無残な姿の花壇を指す。

「仕事つて？」

「その苗を花壇に植えなおすことだ」

「帰る」

「職務放棄か」

「サツの仕事じゃねえだろ、こいつは」

「頼まれて、引き受けたなら立派な仕事だ」

「お人よしめ」

真顔で話す橙に、セブンは左目を半眼にして視線を送る。
しかし、そんなことを気にする風もなく、彼女はセブんに小さなスコップを渡す。

「さて、やるぞ」

突っ立っているセブンを置き去りに、橙はその場に屈みこんだ。
そして、一人で作業を始めだす。

セブンは、置いてけぼりでやる気もなく立ってその背中を見ていたが、ふと、あることに気が付いた。

「なんでスコップ一つしかねえんだよ」

スコップは、セブンの右手に一つしかない。
では橙はどうしているのか。
手で掘っているのだ。

「手違いで用意できなかったただけだ。しかし、然程問題もない」

気にすることもなく、橙は手で土を掘り返している。

「おいおい、手が汚れんだろうが」
「洗えばいいだろう」

にべもなく、返される。

あまりにも男らしい答えに、セブンは一瞬固まった後、がりがり
と、後頭部を掻いた。

そして、スコップを橙に放って渡す。

「使えよ」

「しかし、お前の使う分が……」

そして、彼は橙の隣に屈み込み。

「俺にや土の入る爪の間って奴もねえんだよ」

そのまま鉄の指を土へと突き入れた。

「ガワ取っ払って磨きゃいいんだ、俺は」

「……そうか。じゃあ、それを私も手伝おう」

そうして、二人黙って土を掘り返す。

大体一辺三メートルほどの長方形の花壇のうち、三分之一が被害にあっているから、作業面積は1平方メートルほど。

その上、まともな道具もないためゆっくりと時間をかけて、やっと全ての作業は完了した。

「終わったな」

「ケツ、無駄に疲れたぜ」

悪態を吐きながら、セブンは煙草を啜ってそれに火を点けた。

煙がゆらゆらと青空へと吸い込まれて消える。

「しかし、誰がんな真似したんだ、こいつあよ」

「車で乗り込んだのではないか、と言われている」

「車で、ねえ？ まあいいか。これで帰れるんだろ？」

「ああ」

橙が頷き、二人は課のオフィスへと歩き出す。

「しかし、煙草は感心せんな」

「あ？ 歩き煙草は駄目ですってか？ 俺にや関係ないぜ」

橙は、隣を歩くセブンの煙草を指差した。

対するセブンは、肩を竦めてそれを受け流す。

それを見た彼女は、セブンの口元から煙草を奪い取った。

「体に毒だ」

その言葉に、セブンは左目を丸くする。

しかし、すぐに半眼となり、ぶっきらぼうに音を鳴らした。

「へっ。癌になる細胞なんて一片もねえよ」

セブンの体には、生きている部分など何も無い。

鋼鉄の体に、一人の男の精神をインストールしただけだ。

しかし、橙は口端を吊り上げて、薄く笑って言った。

「知らん。私は機械に詳しくないんだ」

「はっ、そうかい。遅れてんな、時代によ」

どことなく、セブンの顔は笑っているかのようだった。

特殊機甲課、そのオフィス。

「帰ったぞ、新人。茶」

「新人じゃないです、リツカですっ」

「立花二乗、早く茶持って来い」

「……」

リツカが黙った所に、橙が声を掛ける。

「すまないが立花、お茶を入れてくれないか？ 喉が渴いてしまっ
てな」

「あ、はい。すぐに持ってきますね」

「おい、新人。なんだその態度の差は」

「人徳の差ですよお！」

悲鳴のような声に動じもせず、セブンは椅子に座った。

そして、椅子に座り、待つこと数分で、些か乱暴に机にお茶が置
かれる。

「お茶ですっ」

「お茶だな」

「……そうですね」

暇にそうにしているセブンは、気にすることもなくお茶を啜る。

「ところで、仕事って何してたんですか？」

「あん？ 仕事お？」

「さつき課長に連れて行かれて、何したんですか？ また、何か事件とか」

不安げな顔でリツカは口にした。

今までの仕打ちがトラウマになっているものと思われる。

そんなリツカの言葉に、セブンはぼつりと漏らした。

「花植えてきた」

「……はい？」

「花壇に花植えてきた」

「……それ、警察の仕事ですか？」

「……オレンジに聞け」

一旦、会話が途切れる。

二人の間に微妙な空気が漂い始めた。

そんな中、誤魔化すようにリツカが声をあげる。

「あ、つと、そういえば先輩って！」

「なんだよ」

「幽霊とか信じてるんですか？」

「あ？」

唐突な質問に聞き返すセブン。リツカは顎に人差し指を当てて、思い出すようにしながら言う。

「なんか、来たばかりの時言つてたじゃないですか。ちよーによりよくしゃ……、おほん、超能力者とか、課長がお被いとか」
「誤魔化せてねえぞ。ちよーによりよくしゃ。録音流すか？」
「ちよーによりよくしゃ……、おほん、超能力者とか」
「や、やめてください！！ 消してくださいっ」
「んで、幽霊だったか。信じてる信じてないで言えば、馬鹿じゃねえの？ いい大人だろおめえ」
「えっ！？ べ、別に私が信じてるってわけじゃ……」
「脈拍上昇、発汗確認。嘘だな」
「うっ！ 先輩だつてレーダーに映るって言つてたじゃないですか！！」

と、そこでセブンはお茶を流し込み、リツカの方を見る。

「俺は証明されたものしか信じねえ」
「レーダーが証明してるじゃないですかっ」
「機器の不調でない証明もねえ」
「じゃあ、映つたものは一体なんなんですか！？」
「んなモン」

面倒くさそうにセブンは手を振る。

「保留だ保留」
「ほ、りゅっ？」
「保ちとどめておくこと、だ」
「そんなこと聞いてませんっ！」
「へっ。うるせえぞ、新人。肩肘張って、これはこれ、あれはそっち、みたいに分けてツと疲れんだろっが」

そして、またセブンはデスクの方へと視線を戻す。

「昨今幽霊の存在は証明されてねエし、幽霊がいねえことも証明されてねエ」

「じゃあ、先輩はなんだと思ってるんですか？ それを」

「謎の物体X」

「……」

「だが、問題なのはそれが何するかどうかだろうが。なにもできねえ、しねえなら、いねえのと変わりねエ」

「それが先輩のそんなモン、って奴ですか？」

「そんなモンだ」

そうして、セブンはぼんやりとデスクの上を眺め続けた。

「ところで先輩、暇そうですね」

「あ？ じゃあボードゲームでもするか？」

「やですよ。先輩弱いもん。凄い頭いいはずなのに」

「うるせえ」

「というか、先輩仕事しないんですか？ 一度も仕事してるどころ見たことないんですけど」

「してるだろうが」

姿勢を変え、背もたれに上半身を預け、セブンは腕を組む。

「どこがですか……」

「書類整理中だ」

「パソコンも点けないで？」

「ああ」

「どうやってですか？」

「馬鹿かデメエ。また再生してやるつか」ちよーによりよく

「やめてくださいっ」

「つつこった」

「どういう意味ですか……」

「まだわかんねえのかよ」

仕方ないな、と肩を竦めるセブンに、リツカは嫌そうな目を向けた。

「俺の脳内コンピューターで報告書を作って繋いで送りゃいいんだよ」

「はあ……、略してノウコンですね」

「その略し方はやめろ。それとテメエ、話についてけないとすぐ話半分になる癖やめろよ」

「だってわかんないんですもん」

「それと、報告書紙に書いて俺に入力任すのもいい加減やめろ」

「いいじゃないですか。今の聞いたら、見てぱっと終わるんですよ？」

「殴るぞ」

「たんこぶじゃ済みません!!」

特殊機甲課のオフィスは、小さな町工場を買い取って作られたものであり、事務所だった二階がそのオフィスである。

一階である、工場部分は、今はセブン専用のガレージとなっていた。

「おいおい、セブンよお。なんでこんな土塗れなんだ？」

リツカとの会話を終え、セブンは一階の整備員達に迎え入れられた。

手元に泥が付着しているのが見て取れるセブンに一番声をかけたのは、作業服を着た中年の男だ。

細身の、神経質そうな顔つきで、眼鏡をかけている。

「土いじり。花の苗植えだよ」

投げやりにセブンが言うと、不意に、中年の男は笑った。

「そりゃあ傑作だ。いいじゃねーの。土いじり。これからア、そういうロボットが出てくるといいな」

「へっ、悪かったな、戦闘用で」

「別に、そんなこと言っただけ。おめーさんはよう、アレだろうが。市民を守るお巡りさんだ」

「柄じゃねえよ」

そして、唐突に、セブンは中年の男に向かって腕を向けた。

「とつととおっぱじめてくれや。巖夫」

「ちよっと待ってな。工具取ってくらあ」

言つと、巖夫と呼ばれた中年は手早く工具を取り、てきぱきとセブンの手首回りの装甲を取り外していく。

そして、取り外し終わった頃、突如、他の整備員たちがにわかには浮き足立った。

そわそわとして、落ち着かない。

「ええい、そわそわしてんじゃねえボンクラ共オ！ 税金盗んでんじゃねえぞお！」

巖夫の一喝で、それは沈静化したか、程なくして、その原因が現れる。

「なにか用ですかい？ 赤井課長」

そう、橙だ。

橙が来ると、整備員たちはいつもこうなのだ。

女日照りの男たちの中に美人がやってくればそうなるのかもしれないが。

「ああ、セブンの手元を磨きに、な。その布で拭けばいいのか？」

「まあ、そうですが。手が汚れますぜ。オイルの汚れはしつこいんだア」

美人の手え煩わすまでもあるめえ、と巖夫は言うが、橙は取り合わなかった。

「構わん。私の手ぐらいなら、安いものだ」

そう言つて、彼女は布を取り、取り外した装甲を磨き始める。

「まったく、任せときゃいいのによ。整備が仕事なんだからよ、こいつら。人がせつかく手え汚さなくてもいいようにスコップ譲ってやったのによ」

「残念だが、私の方が先約だ」

「へ、そうかい。物好きだな。しかし、ちよつと手汚したくらいで油まで付け直すのかよ」

「馬鹿いつてんじゃねえよ。こういうのはな、まめにメンテしねえとすぐ腐れてくんだ。いくら最新素材と言ってもよ、耐用年数はかなり変わるぜ」

巖夫の言葉に、セブンは生返事で返す。

「ふーん、そうかい」

「つかよお、旦那、なんで土いじりなんてしてきたんだい」

「ああん？ どっかに花壇荒らした不届きモンがいるらしいぜ」

「花壇を？」

「おうよ。鉄球ぶん投げたようなすげえ痕だったぜ」

「ほお？ 工事用の鉄球でも落つことしやがったのか？」

「いんや、その周辺で工事はやってなかったはずだぜ？」

「ああ、そうだ。他に説明も付かないので、暫定的に車の仕業となつているが」

最後の言葉に、橙が補足する。

「さよけ。じゃあ、アレかもな。超能力だの、霊的な何かだの言うあれじゃあ、ねえのかい？ この界限にや結構いるんだろ？ そういう手合いがよ」

「整備員の言うことたあ、思えねえなおっさんよお。科学はどうした」

「っは、科学なんて大概オカルトだぜ七公。科学のはしりは錬金術

だし、テメエの生活を支えてるものは五百年も遡れば夢物語のオカルトだ。ダイナマイトなんて、魔法みてえなもんだろう？ 動く鉄の箱や、空飛ぶ筒だ。正気じゃねエ」

「へえ、そんなもんかよ」

「原理なんて分からなくても、正しく設計されたものを正しくつなぎゃ機械は動くんだ。魔法と何が変わるんでい」

己も、装甲を磨きながら巖夫は言う。

「それに、おめーさんのほうがよっぽどオカルティックだろうがよ。機械工学収めた奴にしたらな。おめーさんが動いて喋ってるのは、不明な部分が多すぎる」

「なんじゃそりゃ。そいつは俺スゲエって言えばいいのか？」

首を傾げるセブンに、にべもなく巖夫は言い返した。

「俺が知るかい、てめえで考えな」

利用規約 / スティール日常（後書き）

遅くなりました。すいません。

二話、プロローグです。

世界観上は、現代と大差ありません。

ただし、局所的に近未来的になっています。

ついでに、裏向きには超能力者とか結構います。

Section 1 ソリッド静寂

翌日。

「すまないがセブン、昨日植えた苗に、水をやりに行ってくれないか？」

「だから一体そいつは何の仕事だよ、オレンジ」

「植えた花に水をやるのも我々の責務だ」

「どんな責務だよ」

オフィスには、何故かじょうろが置いてあった。

橙の机の前。セブンはこれ見よがしにじょうろへと嫌そうな視線を送る。

「頼んだ」

「つたく、これだから基本的に窓際な部署は……」

「我々は暇であるべきだろう」

「まあ、ドンパチャってるよか数段マシかもしれねエがよ」

そうして、セブンは乱暴にじょうろを引っ掴むと、ふらりと扉へと向かった。

「あれ？先輩どうしたんですか？」

リツカの声に、片手を上げて答える。

「花の水遣り」

「……はい？」

技術の粋を集めて作られたはずの戦闘用機動人形の背中とは、何故か煤けて見えたという。

「帰りにコンビニでも寄ってくか……」

じょうろ片手に、道を行くセブン。

「あ、セブンだー」

「さんを付けるよ年下め」

道行く、セーラー服の女子高生に声をかけられる。
ほんわかとした空気の、にこにここと笑う少女だった。

「おつとめごころーさまです、せぶんさん」

「おおっと心が籠ってねえな。拳骨食らわすぞ」

「セブンこそ、私の名前覚えてるー？」

「はっ、誰にモノを言ってるやがる。全身機械人間だぞ。そのぐらい俺のメモリーに入ってる。……モブ子さん？」

「宝の持ち腐れっすねー！」

「ぶっ殺すぞ」

「で、セブンは何してるの？ 暇なの？ 税金泥棒？ それとも犯罪者をぶっ殺すの？」

のほほんと剣呑なことを喋る女子高生に、セブンは面倒くさそうに答えた。

「ぶっ殺さねえよ、ぶっ殺すぞ」

「どっちなんだい」

「二度目のぶっ殺すぞは俺を何だと思ってるんだぶっ殺すぞって意味だ、ぶっ殺すぞ」

「うへえー」

「で、これが人を殺りに行くように見えるかよ。流石にじょうろは武器にしねえ」

セブンが手に持ち、振るのは水色のじょうろだ。

それを見て、女子高生は感嘆の声を上げる。

「おー！ 今度私のぞうさんじょうろ貸してあげるね」

「要らねえ」

「で、それで敵を殺るの？」

「やらねえつつたろうがボケが。お前と話していると疲れるんだよ」

「じゃあなににするの？」

「んなもん、花に水をやるに決まってんだろ馬鹿野郎」

なにを馬鹿なことを、とばかりに呟くセブンに、女子高生は一つ

満面の笑みを向けた。

「似合わないね」

「遺言はそれでいいか」

「んー、でも、可愛いよ」

「それで喜ぶ男がいてたまるか」

「セブン、男なの？」

「これで女だったらどうするんだよ」

「気持ち悪いね」

「割と本気で殴るぞ」

「死んじゃう」

「おう」

と、そうしてそこで一旦会話が途切れ、女子高生はのんびりと微笑むと、手を振った。

「じゃあ、水遣り頑張ってるねー」

「おー……」

気のない返事を返して、セブンは再び歩き出す。

「まったく、相変わらず読めねえ奴だ」

そして、セブンは一人、首を傾げた。

「……しかし、名前なんだったか」

首をかしげながらぶつぶつと呟いたその時。
一人の中年の男とすれ違ったのだが。

「その顔に……」

まるで、脳裏に電流が走るかのよう。
あらかじめ知っていた顔と、今すれ違った男の顔が一致する。

「ピンと来たので110番!!」

「反転、即座に拳を放つ。」

「うわああああ!!」

「お巡りさんはこの俺だ!!」

その男、小太りの愛嬌のある中年は、勘がいいのか運がいいのか、バランスを崩したようにして、セブンの拳を避けている。

その顔は、そう、セブンのデータベースに情報があった。
少し前に戦った、宗教組織赤主天衆教の構成員。つまり、残党。

「なあ、テメエよ。俺あよ。今から水遣りに行かないと行けねえんだ。だからよ、あっさり捕まってくれと嬉しいんだが」

男は、腰を抜かした風であった。高圧的に見下ろしてくるセブンを、尻餅をついて、怯えた瞳で見上げる。

セブンは、先端部分を取り外し、尖ったじょうろを、ぐりぐりと男に押し付ける。

「ひ、ひいいいい……」

「はい公務執行妨害追加ア!!」

実際の公務執行妨害とは、狭義において、脅迫や暴行によって公務を妨害することなのだが、セブンはお構いなしに男を掴み上げた。

「『同行願うぜエ。』はい』か『はい、死にます』で答える」
「は……、はひ……」

つつがなく、男はセブンの暴君ぶりに屈した。
しかし、その瞬間であった。

「……ああ？ 高速接近する熱源あり……？ このタイミングなら
っ、敵だよなあ……！」

背後から迫り来る何かを感じて、とっさにセブンは後ろへと中年
の男を投げる。

「ひいひいあああああ……！」

悲鳴を上げながら飛んでいく男を、走って接近する人影が受け止
める。

「むっ！」

人影の声は、低い男の声である。

（人影……、いや、本当に人間か？ 時速四十キロで迫ってきた熱
源が？）

一瞬考えるが、そんな思考は次の一瞬で捨てる。
まっすぐに人影が突っ込んできたからだ。
速度を緩めるどころか、更に速度は上がる。
中年の男は、後ろに放りだしていた。

「お前は先に逃げていろつ。自分は殿を務めるつ」

叫んだ男の姿を、セブンは今一度確認する。

筋骨隆々の巨漢だ。まるで戦うためにあつらえたかのような、筋肉の塊。

短く切った髪、その下に、鋭い双眸を宿している。

「そつちが来るなら仕方ねえ!!」

距離は、すぐに一メートルにも満たなくなった。

即座に、セブンは拳を放つ。

しかし、それは男が屈むことによって避けられた。

「ちつ、うぜえ……」

相手が残党であるため、セブンは彼らを連れて行かねばならない。

話の出来る状態で、だ。

「ふっ!」

鋭い呼吸音と共に、男が拳を放つ。

それをセブンは、避けずに真っ向から受け止めた。

硬質な金属の反響音が響く。

「貰った!」

瞬間、セブンの怒声が空気を裂いた。

あえて受け、そのまま拳を放ち、カウンター気味に頬に当てる。

相手は大きく仰け反り、踏鞴を踏む。

「顎が逝かねえよう手加減してやったが……」

しかし、すぐに後ろへ大きく跳び、男は体勢を持ち直す。

「タフいな、おい!!」

対するセブンは、更に大きく踏み込もうとして
違和感。

停止。

走査。

「シックスセンサーに反応……？ 力場検知……!!？」

今度はセブンが大きく後ろに跳ぶ。

ブーストを吹かせて調節しながら着地。

「類すると、斥力場……!!」

セブンに搭載されたセンサーが、何らかの力場を捉えている。

それは、見えない何かを押し出すような力。

それはまるで。

「超能力者か ……!!？」

がりがりと、地面を引っかきながら停止するセブンが、今一度その男を見たとき、彼は既に背を向け走り出していた。

「あつ、ため、こら待て」

また、来たときと同じように、いや、それ以上の速度で男は走り

去る。

這うようにして逃げようとしていた中年の男を担いで。

「ちっ、追うにや骨が折れるか……？」

全力で走ればまだ間に合うだろうが、しかし、戦闘中既に通信で報告はした。

帰ってきたのは、深追い厳禁の命令だ。

これに対する理由は、二つ程ある。

まず最初に、敵の戦力が不明であること。謎の力場を発生させられるような人間、もしくは兵器を保有しているとなれば、一人ならともかく、想定外に数が多いと危険である。

そして次に、こちらが最も大きな理由だが、ここで残党を一人二人捕まえるより、泳がせて、拠点を探り、一網打尽に仕留めたいのだ。お上の大局的見地からすれば。

「さて、俺はどうするか……」

必要なデータは一通り既に送っている。カメラで取られた映像まであるので、セブンが証言するべきようなことは既にある。

そして、捜査はすでにセブン管轄外だ。セブンの仕事は実行部隊であって、それまでの準備はその内ではない。

更に、既に追跡は始まっているらしく、途中までセブンが追いかけて、後続の部隊に仕事を引き継ぐ、なんて真似も必要ない。

当事者のはずが、一気に蚊帳の外に放り出された気がして、セブンは所在無げに天を仰いだ。

「水遣りでもしに行くか……」

うだる炎天下の中、水遣りを終えたセブンは、買い物袋片手に特殊機甲課のオフィスへと戻った。

「お帰りなさい、先輩」

「おう」

オフィスへ戻り、椅子に座り込んだセブんにリツカが声をかけ、席についていた橙がセブンの元へと向かった。

「セブン。報告は聞いた。相手は異能だと思っつか？」

異能。表向きにはいないことになっている、常人ではありえない力の持ち主。

「装置のようなモンは見られなかった。ついでに、能力発生までのラグ、使用の自由度、敵さんの様子からして、機械で補ってるっつうのはねえと判断したが」

「そうか。強かったか？」

「いんや、やりあつた感覚じゃ、負けねえよ。隠し玉がなけりやあな」

「そうか。ならいいが」

眩きながら、橙は窓の方を見る。

「上は、化学兵器を恐れている」

そして、唐突に橙は言った。

「化学兵器だ？」

「ああ。あの宗教に中国系のバックがあったことは言ったな？　そこから流れたものと考えられる。どうやら独自の改良を加えたものらしく、名前は不明、神経系の毒ガスということだけ分かっている」

「おいおい、流出したらまずいんじゃないやねえの？　やっぱ追いかけてくべきだったか？」

「現状、上は流出しても被害は大きくならないと思っている。彼らには、起爆装置がない」

セブンの問いに、すまし顔で橙は返す。

毒ガスなどの化学兵器で広範囲に効果を及ぼすには、クラスター弾等の中に詰めて空中で子弹をばら撒く、などの散布する手段が必要だ。

それがなければ、必ずしも大惨事に繋がるとは限らない。

「故に、上はリスクを犯してノーダメージよりも、準備を完全に整えて被害を最小限に抑えることを選んだ。たとえ流出したとて、それがそうなることを知った上で準備を怠らなければ被害最小限で片が付く。何もさせないのがベストだが、確実にやらねばならん。暴発されるのが一番困る」

「まあな。敵のヤサさえ割れりゃ、後は簡単か。それに、俺が適当に追っかけたせいで焦って変なところで出されちゃ困るな」

「そういうことだ。最悪でも肉を切らせて骨を断ちたい。そのため

には上手く相手をコントロールせねばならん。故に、我々にしばらく仕事は来ないだろう」

ただ、と橙は付け足した。

「いざとなれば私達に回ってくる。そして最前線に立つのはお前だ」
「分かってる」

「覚悟だけは決めておいてくれ」

そう言って、橙はセブンの前を去った。

セブンは、目の前の机に頬杖を突く。

「なんの覚悟決めりゃいいんだか」

呟いた言葉はどこにも届かず。

「先輩」

代わりに、別の言葉がセブンの集音マイクをノックした。

「ああ？」

振り向いたセブンが見たのは、まるで興味津々の子供のような、リツカだった。

「超能力者を見たって本当ですかっ!？」

「ああ？ ああ。別にそうと決まったわけじゃないけどな」

「へえ、本当に超能力者っているんですねえ……」

「まあな。そこそこ見るぞ。ここにいりゃな」

「でも、それなりにいるならもつと有名になるんじゃないですか？

今まで、実在するなんて聞いたことありませんけど」

顎に人差し指を当てて質問するリツカに、セブンは面倒くさそうに返した。

確かに、超能力者は一般的ではない。ないのだが、実際には水面下に潜む形で存在する。

それには、確かな理由があった。

「半端じゃねえ力の、本物ってやつあ、知ってるんだよ。自分の力のことをな」

「はい？」

「自分の力は見世物じゃねえってことを分かってやがる」

「……え」

「テレビに出るより、ずっといい稼ぎ方があんのさ。普通じゃねえ奴らにはな」

セブンの言葉に、あまり明るい話題ではないことを、リツカも察した。

「それって、夢がないですね……」

セブンは、それに対し、笑うことも悲しむこともせず、ただ頷いた。

「おおよ。あいつ等だって人間だからな。生きるのにゃ、誰も必死だ」

郊外の廃工場。それが彼らの拠点だった。

「助かったぜ……、湊のダンナ」

「いや、構わん。これよりは、外出時には俺も付いていこう」

「いや、しかし旦那は目立つ。できるだけ出歩かず、俺と、秀介で気をつけるようにすれば」

赤主天衆教の残党。そのメンバーは三人しかいない。

セブンと戦った湊と呼ばれた巨漢と、秀介と呼ばれた、愛嬌のある小太りの中年。

そして、もう一人、細身の神経質な男。

もしかしたら散り散りになっただけで、まだ残党はいるのかもしれないが、現状集まることができたのは三人しかいない。

「しかし、ダンナ。何で逃げたんで？ あの機械野郎をぶちのめし

ても良かったんじゃ」

秀介が、湊へ問う。湊を完全に信頼しての言葉だった。

「いや、あの人形、私の力に気が付いていた。屋外の戦いでは、想定より数段不利」

「は？ え？」

秀介が、信じられないといった顔をする。彼にとって、湊の力は絶対だった。

しかし、淡々と湊は事実だけを告げる。

「発動と動じに後ろに飛び退かれた。危険だ」

そう呟いて、思い出すかのように湊は天を見上げた。

「計画の露払いができればなどと考えていたが……、露だなどともんでもない」

「旦那がそこまで言うということは、それほど強いということだな。無視して計画を強行するのか？」

今度の問いは、細身の男からだ。

「ああ。まあ、心配するな、恭二。足止めに徹すれば問題ない。それに、室内なら千日手に持ち込める」

「そうか。旦那がそう言うなら問題ねえんだろう。頼むぞ旦那。アంతだけが頼りだ」

恭二と呼ばれた、細身の男は、湊に全幅の信頼を置いていた。

何故なら彼は、組織が全力で作り上げた最強の超能力者なのだか

ら。

能力開発を旨として勢力を強めた赤主天衆教がここまで拡大したのは、湊が居てこそ、とも言えるだろう。

本物の能力者として、組織の神秘性を保ってきたのは彼だ。

彼の力を見れば、超能力を信じない者でさえ、彼を讃え、ひいてはそれを世に生み出した教主を崇める。

「あれ？ ダンナ、それなんすか？ なんかのキャラクターのストラップみたいだけど」

それだけの力が、彼にはあった。

「これは、道で拾ったものだ」

湊は、手に持ったピンク色のストラップを見せる。
長らく続く、猫のキャラクターのものだ。

「ダンナ、そういうの好きだったっけ？」

秀介の言葉に、湊は呟くようにして答えた。

「妹が好きだった。なんとなく、捨てられん」

「あれ、妹さんって……」

「既にこの世に居ない。故に尚の事だ」

「さいで。すまんっす。変なこと聞いて」

「いや」

ぐっと、湊はストラップを握り締めた。

Section 2 アイアン疾走

「先輩……、せんぱーい……」

「あ？」

「いいんですかね……、私たち」

とあるデパート。

「なにがだよ」

「だって、もしかすると街が危ないかもしれないのに……」

「だから？」

「なんでデパートで試食荒らししてるんですかぁ！」

その食品売り場。

「知るかアホ」

「なんですかソレ」

「知るかタコ」

「タコじゃないです」

「おい、ちよっとこっち向け」

言われて、リツカはセブンを見る。

眼前に手が見えた、と思ったら、インパクト。

セブンの指が弾かれ、リツカの額に直撃。

「いったぁあああ！！　なにするんですかぁ、先輩……」

非難の視線を向けるリツカに、セブンはぶっきらぼうな声を投げかけた。

「テメエが焦って一体どうするってんだスポンジ野郎」

「す、スポンジ野郎って……」

「いいか、テメエが焦っても何も解決しねえどころか、目障りで世界人口の二割が発狂する」

「ひ、酷くないですかそれ」

「だから、黙って試食でもしとけ。俺達に許されてんのは、仕事が回ってきたときに全力を出すことだけだ」

それだけ言って、セブンは爪楊枝に刺さったウィンナーを口の中に放り込んだ。

「セブンさん、どうっすか？ こっちにハムがありますぜ」

しかし、どうやらセブンの試食荒らしは有名ならしい。

皆手馴れた様子でセブンを呼ぶ。

「いいか馬鹿新人。何でもねえ顔しろ。テメエが他人を不安にしないでっすんだ」

「先輩……」

リツカは歩くセブンの横顔を見上げた。

（もしかして先輩、人に不安を与えないようにパトロールを……）

そして、心中、呑気に見えるセブンを好意的に受けとろうとして
。

「開ける開けるお、次のパックに行っちゃええ！」

「ああ、お止めになってお代官様、店長に怒られてしまいますう！」

「躊躇ったらそこで負けだぜ」

(あはは、もうどうでもいーやー)

リツカは考えるのをやめた。

陽気に、セブンは試食のチキンナゲットを食べている。

「ほほう、このナゲット、よほど俺に食べられたいと見える」

「そ、そんなっ、ご無体な……！ 彼女はまだ生焼けでっ」

と、男の店員とコントを繰り広げるセブンを放って、リツカは商品を見た。

(あ、今日安い……)

浪費癖があるわけでもないが、根っからの節約思考なリツカはそれらの値段に目を向ける。

(買おうかな……、うう、でもここで買ったら先輩に負けた気がする。後でまた来て……、うう、それはちょっと面倒くさいし)

そして、微妙な葛藤を経て、ふと、リツカはセブンの方を見た。

「……先輩？」

思わずリツカは首を傾げる。

先ほどまで談笑していたはずのセブンが静かになっていた。

しっかりと目で追えば、その姿は試食売り場から少し離れ、どこかを見ている。

リツカには、なんとなく、何かを睨みつけているように、見えた。表情に乏しく、全く読めないセブンからの空気を、なんとなくリ

ツカは察した。

「……どうかしたんですか、先輩」

セブンが睨み付けているのは、外。ガラスの向こうだ。

そして、そのガラスの向こうにも、こちらを睨み付けている人物がいた。

「奇遇……、って言うにゃあ、ちよいと不自然すぎるんじゃないのか!?」

瞬間、ガラスが割れる。

「全員速攻こつから逃げろ！ さもなきや命は保障しねえ!!」

そして、その場にいた全員が固まり、セブンの言葉に騒然とする。我先にと店員と客が逃げ出す中、幸いだったのは今日が平日の昼間だったことだろう。

さほど混み合っていないため、比較的簡単に、避難は完了する。そして、割れた窓、そこから入ってくるのは、Yシャツにスラックスの大男。

「千載一遇か」

拳を握り、男はセブンとリツカを睨み付けた。リツカは思わず男を指差した。

「ちよ、ちよ、ちよ、先輩、なんですかアレ!!」

「噂の超能力者だよっ!!」

「ええええええ!? もっと超能力者って細身なもんじゃないんで

すか!？」

「うるせえ、アレが現実だ! 今の時代はムキムキマッチョのサイキックだ!！」

セブンが叫び、そのままリツカを抱え上げ、後ろへ飛ぶ。次の瞬間、背後にあった食品売り場の棚が大きく揺れた。

「どうすつかメンドクセエ……」

「ちよつと先輩っ、何言ってるんですか!」

「いや、だつてよ。俺にはやる気ねえんだぜ。戦っても旨みがねエ……、っーか」

しばらく後ろ向きに走って、セブンはリツカを降ろす。

男はすぐに追いついてきた。

そして、セブンは男を見、そしてリツカをじっと見つめ。

「不利だな」

「なんでこつち見て言っんですかあ!！」

「不利だろ」

「言い返せないのが辛い!」

「足手まとい邪魔臭エ」

「酷い!」

リツカは叫ぶが、セブンは無視。

「っーかよ」

敵と睨み合いながら、セブンは言った。

「なんですか?」

「前はしばらくして逃げてった。今回は向こうから攻めてきた、
どっつことだと思っ？」

「……え？」

リツカにはよく分からない。

首をかしげていると、数秒で答えが返って来た。

「足手まとい付きなら倒せるかな？　って思われてんだよ!!」

「ごめんなさいっ!」

「おいおいおい畜生め。男なら、女子供は狙わないとか言ってみるよ」

と、セブンが言った瞬間、すぐにリツカを持ち上げる。

すると、リツカの足元で硬質な音が響き渡った。何か床を打ったのだ。

「足元からって、えげつねエ」

「悪名でも構わん」

「何がだよ」

「歴史に名が残るならな」

男は言う。

そして、異常な勢いで走りこんできた。

セブンは、男とは逆方向に走り出す。

「どーすっかな」

「どーすっかなって……、どうなんですか、実際」

「ぶっちゃけると、敵さんはテメエを狙ってくるようだがタチバナ
あ。そして、そこを守りに行った俺をズドン、だ」

「ほ、ほら、先輩頑丈ですし」

「多分俺をバラバラに引きちぎるような力はねえだろうが、決め付けは早計って奴だぜ。リスク管理は計画的にだ」

そして、しばらく走って、セブンはまたリツカを下ろす。下ろしてからセブンは、リツカを真正面から見つめ、真面目な声を上げる。

「よって、導き出される策は一つだ」
「……はい」

覚悟を決めた瞳でリツカはセブンを見る。
そして。

「頑張れ新人」

ふっと、セブンの姿を消した。
電磁迷彩、という話らしい。

あまり激しい動きをすると隠し切れず見えてしまっが、歩きくら
いなら人の目から完全に姿を消せる便利な品だ。
あまりの便利さに、思わずリツカは叫んだ。

「せんばああああああい!？」

凄い勢いで、敵は迫ってきていた。

まるで四トントラックのような空気を纏い、迫ってきている。

それは、デパートの床を陥没させながらリツカに迫り、拳を振り
上げ。

見捨てられた、死ぬ、と思ったその瞬間。

「つまるどころテメエが新人を殺る前に、俺がテメエを殺れば問題

ねエよなあ!!」

男の背後。動きに耐え切れず、電磁迷彩が排除される際の煙を纏って、セブンは現れた。

そして、背後から思い切り拳を放つ。
しかし。

「……ああん？」

少し、男が首を横に動かしただけでセブンの拳は空を切った。そして、当たり所を失った拳がリツカに直撃する、寸前、数ミリの所でぴたりと拳は止まった。風圧が、リツカの前髪を撫でる。

「あはは……」

乾いた笑いしか出なかった。

そんな中、リツカを無視し、男はすぐに反転しセブんに拳を向ける。

「超能力で格闘アシストってか……、確かにそれなら俺もへこむかもしれないねえな。面白え！」

拳を受け止め、捌き、殴り返す。

どちらも有効打を放ってはいないが、そんな中、リツカはセブンがこちらを見つめていることに気が付いた。

何かを要求されている、と気付くのに数秒。

(もしかして……)

そして、その内容に思い当たるのに数秒。それだけかけて、リツカは銃を抜いた。

(注意を引いている間に、って奴だよな……?)

男は、セブンの方を向いており、リツカにはその背中が見えている。

(ばれないようにこっそり近づいて、銃を突きつければ……)

リツカは、音を立てずに、注意深く相手に銃を向けながら歩く。その瞬間。

「撃てえ！ 新人！！」

「え！ あ！」

叫ぶセブンに驚いて、リツカはうっかりと引き金を引いてしまった。

訓練を受けたものならあるまじきミスだが、ミスだとか、本意だとかとは関係なく、無慈悲に銃は動き、撃鉄が雷管を叩き、弾丸が放たれる。

偶然にも狙いはぴったりで、その射撃は的を外したものではなかったが。

「……え？」

男が屈むと同時、セブンが指で弾丸を掴み取っていた。

リツカでは、男が避け、それをセブンが掴み取ったのだということに気が付くのに数秒掛かった。

そして結局、リツカは当たらなかったことに胸を撫で下ろしたの

だった。

「テメエ、背中に目でも付いてんのか？」

リツカに撃たせてみることで、セブンの疑問は確信に変わった。

この手品には、タネが仕込まれている、と。

セブンの拳の有効打の当たり難さは、相手が武術の達人であることで一応の説明は付くのだが、他の二つ。

背後からの奇襲、リツカの弾丸、その両方を避けれたのは奇妙と言っ外にない。

避けたこと自体は問題ない。セブンはその動作の際に超能力の力場と思しきものを感じた。つまり、動作のアシストとして、強制的に体を避けさせているのだ。

そんな中で一番の違和感は、男が振り向きもしなかったことだ。

その二度の間に。

二度の奇襲が読まれていた、と言うのは仕方のないことだが、だからと言って後ろを見ずに上手く避けれるものだろうか。

だから、そこにタネが仕込まれている、とセブンは踏んだ。

「……感度を上げるか」

ノイズが大きくなることを承知で、セブンはセンサー類の感度を上げた。

（予知能力とか付いてたら厄介だぜ……？ 早々いねえ筈だが）

予知能力者。それがしかも戦闘の達人だと途端に危険度は増す。

現在の装備で倒しきるのは難しい。予知されてもどうしようもないレベルの攻撃で倒す必要があるからだ。

「だが、早々予知能力者なんて居てたまるかよ」と

そうしてセブンは拳を放つ。

しかし、男によっていなされた。

生半可なガードならそれごと突き崩す威力の拳だが、しかし、体の動きを念動力の類でアシストし、さらに拳の勢いを逸らそうとしてくるのだから、性質が悪い。

これでは消耗戦だ。地力の違いで負ける気はしないが、些か時間が掛かりそうだった。

それなら、攻略法を探した方が早い。

と、そこでセブンの目が輝いた。形容でも比喻でもなく、ただ、単純に尋常じゃない光を放つ。それによって、視界を奪う算段だ。

「ぬ……！」

男はまともに喰らい、目を瞑った。

これによって、セブンは男が予知能力者ではない確信を得る。

「つまり、目が光るつつ予知はできなかったわけだ」

そして、そこで蹴り。視界のない男にどうこうできるか怪しいものだが、それでも男は止めた。

盾にした腕とセブンの足の間に力場が発生し、衝撃を和らげたらしい。

「つまり、目に頼ってねえ、と」

「……解析されている!？」

男の顔が驚愕に歪む。

(……ん?)

するとそのとき、動揺が超能力に影響したのか、センサーが非常に微弱な力場を発見した。

男を中心とした半径数メートルにだ。

「なるほど、これが」

予想は付いた。センサーから得られた情報。それを得て、セブンは一つの仮説を立てた。

その予想を確信に変えるため、セブンは走る。

食品売り場を離れ、別の棚へ。

「おっと、あつたあつた。俺の煙幕は数に限りがあるからな。どこ

まで細かいものに効くかも知らねえし。節約と行かせて貰うぜ」

そう言って、セブンが取ったのは小麦粉。

そして、男が突っ込んできた瞬間、その小麦粉を。

「捜査にご協力願います、っとおー！」

地面に叩きつけた。

「なにっ!?!」

巻き上がる小麦粉が、白い空間を作り出す。

驚いて止まる男。

そこに放つ拳。

しかし止められる。

「はっはあ、なるほど、分かったぜ。テメエの能力は念動力、これ

一本つてえわけか」

読めた、とセブンはちらりと周囲を見た。

これで、手品のタネが明かされた。

男を中心に離れていく小麦粉によって。

そう、巻き上げられた粉は見えない力に押されるように男から離れていく。

それは、微弱な念動力が発生しているからに他ならない。

「ソナー代わりか？ 随分高性能なセンサーじゃねえか」

それが全て。

そう、彼は周囲に常に微弱な念動力を発生させることで、その念

動力への抵抗で物の動きを察知できるのだ。

「初動から見切って、念動力でアシストして受ける。そして、不意打ちその他はお前のフィールドに入ってきた時点でバレ、超能力のアシストで避ける。本当に超能力者かダメエ。武闘派すぎだろ」

超能力者の戦い方としては随分ぶれている、とセブンは相手を睨み付けた。

「まあ、いいぜ、そっちがやるならとことん付き合っぜオイ。そして死ぬ」

そして、拳を握り締め。

「今度はこちらが不利か……」

男は呟くと、唐突に踵を返した。

「あ、オイ」

場には、静寂だけが残った。

「逃げられたな」

「……逃げられましたね」

店内は、少し煙たい。小麦粉の仕業だ。

リツカは、割られたガラスを見てポツリと呟いた。

「悪名でも歴史を残したい……、ってどういうことなんでしょね？」

「そのまんまの意味だろ」

「そんなに、歴史に名を残したいんですか？」

そこまでして、名を残したい理由が分からず、リツカは聞いた。
セブンは、隣り合ったリツカの方を見もせずにご答える。

「意外というぜ。そういう奴あな。ああいう人間は、なかったことにされやすい。だからだ」

「……先輩も、名を残したいですか？」

特異性は、セブンも変わらない。

「どうでもいい。それより子を残してえ。つまりエロいこととしてえ、ってこった」

「セクハラですそれ」

「安心しろよ。誰もお前の貧乳なんて揉まねえ」

それはそれで釈然としない、と微妙な表情をするリックに、唐突にセブンは言った。

「さて、じゃあテメエにやここを任す。俺は速攻で帰る、いいな？」
「え？　ちよ、全部私に押し付けて帰る気ですかっ？」

セブンならやりかねない、と上げた講義の声だが、返ってきたのは、苛立った声だった。

「そうじゃねエ」

「え？」

「もう報告は済んだ。後はオレンジんとこで俺は待機する。いつ出動命令が来るかわかんねえ」

「えっと、どういうことですか……？」

意味が分からない、と言った顔をするリックに、セブンは淡々と返した。

「俺らが毒ガスに対して安心して理由はなんだ」

「噴霧器がないせいで、毒ガスの効果範囲を広げるために風向きの良い所、もしくは密閉された場所で行うから、ですか？」

「そうだ。場所が限られてりゃ、先回りして無傷で取り押さえられる。拙速よりも、今回は準備を整え確実に、無傷で確保することを目標にしてる」

「他にも、もしも噴霧器や、クラスター弾頭の類を手に入れたら絶対分かるから、その線から、噴霧器を手に入れる寸前に逮捕が容易だとか」

基本的にリックの根本は勤勉だ。

まるで教科書のように朗々と語る。
しかし。

「ああ、そうだ。だがな。あいつの能力は空中に舞った小麦粉すら押し出した。つまり」

答えは違った。

「あの野郎は超能力で毒ガスを撒き放題だった!!」

思わず、息が詰まる。

そして、リツカは己が不明を呪った。

本当に、あの男ができるかどうかは分からない。

しかし、どうしてできないなどと樂觀していられようか。

「おかえり、ダンナ」

「ああ」

廃工場。その日も、そこには三人の男が居た。

「どうだった？ あの機械人間は」

「やはり手練だ。その上、手加減までされているようだ」

「ええ！？」

小太りの、秀介が驚いた声を挙げ、そんな秀介の大音量に、細身の恭二という男はしかめっ面をした。
だが、湊には気にした様子もなく。

「刺激しないよう努められている。火器は使用せず、死なないうつ、また、喋れるように拳も手加減されていた」

「そんなにか……」

「足手まとい付きならどうにかなると思ったんだがな。ただの偵察で止めておくべきだった」

今回の件に関しては、彼らの狙った思惑通りではない。

セブンの動向を見守っていた恭二が、セブンが不穩に外出した旨を連絡し、偵察に湊が出てきただけだったのだ。

しかし、そこで足手まといが居ればどうにかなると思って仕掛けたのが失敗だった。

「しかし、計画は予定通り行くんだらう？」

恭二の質問に、湊は頷いた。

「ああ。俺たちの目的は奴を打倒することではない」

「しかし、この計画が成れば……」

「教祖は解放されるんだな！」

果たして、毒ガスを効果的に撒いたとしても、教祖が解放される保証はない。

だが、追い詰められた心境からすれば根拠がなくても信じていたかった。

それ故、二人は士気を高め、喜色に顔を染める。

しかし、湊だけは、その表情に明るいものはない。

「あれ？ 湊のダンナ、嬉しくないんですかい？」

そんな中、ふと気が付いた秀介が問う。

それに対する湊の答えは、無情なものであった。

「教祖などどうでもいい」

「え！？」

「……初耳ですぜ、旦那」

「自分の目的は歴史に悪名を残すことだ」

なんでもないことのように、湊は言う。

秀介は、面食らった。

「そ、そんなの聞いてないぜダンナあ！ そんなあ……」

まるで、信じていたものに裏切られたかのような。

そんな秀介に、恭二は声を掛ける。

「騒ぐなみつともねえ。もうどうしようもねえんだよ、秀介。俺た

ちはもう旦那に賭けちまった。今更降りられん」

煙草に火をつけながら、恭二は天井を見上げた。
空は見えない。まるで、暗雲のように天井が立ち込めている。

「で、でもよお」

「やめろ。もう、突っ走るしかねーんだよ」

「うう……、ちくしょう。でも、そうだ、そうなんだよ……。もう、娘も女房もいないんだ」

そう言って、秀介は顔を歪める。

「いいか。予定は明日。ただし、サツが動いたらすぐに始める。いいな」

恭二の放った言葉は、廃工場に響いて残り、やがて消えた。

廃工場付近。

セブンと、超能力者の男が戦ってから二時間後のことだ。

「セブンはそのまま、数名の警官を引き連れて突入。他は一ミリの隙間もなくこの付近を封鎖する」

「おう」

事情が変わった。事態は一刻を争うのだ。

準備の方は完全とは言いがたいが、しかし、超能力者の男が毒ガスを放ちながら街中を走るだけで、大惨事がおこる。

心情的には準備を完全に終えてから取り押さえたいところであったが。

「勝手な願いだとわかっているが……、頼む。周囲の警官全員には対BC兵器の装備が行き渡らなかった」

つまり、セブンが取り逃すようなことがあれば、周囲の警官の命が危険に晒されるのだ、と橙は言う。

「わかってらあ」

セブンは軽く言って、廃工場を見た。

橙もそれを追う様にしてそちらを見る。

「……射殺許可も出た。上は絶対にここで、一般人への被害を出さずに決めるつもりらしい」

「さよけ。まあ、俺のやるこたいつも通りだ」

そして、悠然と立つ、そんなセブンの横顔を、橙は見つめた。

「……死ぬなよ？」

「もう死んでら」

「うるさい、死ぬな」

ぴしゃりと、橙は言う。

「へいへい、うちの課長は横暴だねえ」

呟きながら、セブンは自らのチェックを行った。
あらゆる状態は、異常なしで返^{オルグリーン}って来る。

「じゃあ、行くぜ」

「ああ。気をつけて」

「旦那！ 警察だ！！ こんなに早く動くなんて、この場所がばれてたらしい！！」

「く、そうか。警察の動きくらい察知できると思っていたが、ここまで迅速だったとは想定外」

「え？ え？ ちょっとどういことだよ恭二、もうサツが来るって？」

誤算は、もっと警察の腰が重いつていたことだ。

故に、動き出すのはもう少し後で、なにか動けば察知できると思っていた。警察がぴりぴりすれば、住民も気付く。街の全体の空気が変わるからだ。

が、しかし、既に動き出していたせいで、それを察知することはできない。既に変わっていたのだ。

この動きの迅速さは、毒ガスの搬入がばれていたから、というのもあるのだが、それに気づくことはできなかった。

「ああ！ 動き出したら分かると思ってたが、とっくの昔に既に動いてやがったんだ！」

「ど、どうするんだいダンナあ！」

慌てた声を上げる秀介に、湊は動じることなく返した。

「強行する。もう今更、止まったところでどうしようもない」

冷たい声が、廃工場に反響する。

「山ほどの警官だろうと構わない。己を、刻み付けに行く」

それは、しばし響いて止まり、奇妙な静寂を作り出した。

その静寂を打ち破ったのは、恭二である。

「八方手詰まり、か。こうなったらやるしかないな」

秀介、やれるな？ と確認した恭二に、秀介は戸惑いながらも頷いた。

「あ、ああ！」

戦闘開始まで、後二分。

Section 2 アイアン疾走（後書き）

毒ガスは、空気より重いもの以外はしばらくすると拡散してしまつて、濃度が下がると使い物になりません。

しかし、湊の能力を使えば外だろうが密閉空間を作り出せ、残留せず、移動できる毒ガスが使用可能になる。

そうすると、一個の毒ガス兵器だけでいくらでも場所を選ばず大惨事を起こせるという話です。

ただし、毒ガスに関しては、リサーチしきれてるか自信なくてときどきです。

さて、鋼のリバーブレイションは次回でクライマックス。

次回で終わりか、次々回でエピソードになって、終わりです。

感想や、意見、いつでもお待ちしております。

Section 3 鋼の残響音

夕方に差し掛かった廃工場。

それを、警官が取り囲んでいる。

鼠一匹漏らさぬ構えだ。

そして、膠着した現場の中、数人の、動く影があった。

「いいかテメエら。お前等は毒ガスで死ぬかも知れねえ。俺も、一歩間違えりゃスクラップだろうよ」

セブんと、数名の警官だ。

警官は、対BC兵器用の水色のツナギに、まるでランドセルでも背負ったような防護服を着込んでいる。顔は周辺は、体部分と繋がっており、前面だけが透明な素材で前が見えるようになっていた。

さらには、ガスマスクが装備されている嚴重さ。

「だが、これが俺等のお仕事だ。へっ、死んだら出世できるぞ、良かったな」

NBCテロ対応専門部隊も、通常の警官も、一丸となってこの事件に臨んでいる。

「できれば普通に出世したいっすね」

「……まったくだ。だが、まあ、俺等が失敗しても、後ろにゃ自衛隊も控えてる。一般人にツケが行くことはねえだろ。心おきなくや

れっつーこった」

そう言って、セブンは廃工場を睨みつける。

法律上自衛隊は、毒ガステロが実際に発生するまで、攻勢に移ることができない。

有事法も、専制的自衛権の発動も、すぐさま発動できると言うことではない。

つまり、現状では警察で対応するしかない、ということだ。

「行くぞ！」

「了解！！」

一同が、迅速に駆け出し、廃工場内へと入り込んだのだった。

工場の内部は、中々広く、元が大きな工場だったことが予測されるが、機械類が全て撤去され、鉄板などの一部資材だけが取り残されただけのそこは、何の工場だったのが判然としない。

『セブン、送られた間取り図には目を通してあるな？』

「一応な」

『大きな作業場が二つ。今向かう中に二人の人間の反応、奥の作業場に一人だ』

セブンの方でも、それは感じ取っていた。

「奥が怪しいな。手前の奴らは露払いか足止めってところか」

『気を付ける。ただでさえ少ない戦力を分けるということは、片方あるいは両方に意味があるということだ』

無策であれば、全員で襲い掛かればいいのだ。わざわざ分かれて戦う必要はない。

明らかに、なにかがあるのは確かだった。

「オレンジ、気い付けるよ。テメエのオペレート無しってのあ、ちよいと面倒だ。そっちになんか行ったら一目散に逃げろ」

ぼつりと、遠く後方にいる橙へ、セブンは呟く。

『後方は気楽で良い。憎たらしいくらいにな……』

苛立ったような声が聞こえる。自らに腹を立てている声だ。

セブンは、いつも通りの声を出した。

「テメエはそれでいいんだよ。課長様はよ」

『……心配は有り難く受け取っておく』

「してねえよ」

それきり黙って、セブンは歩く。

そのまま、注意深く、セブンは二つの生体反応に近づいていった。

それは、ぼつりと残った作業台の向こうに隠れている。
そして、それを目に収めようとした瞬間、セブンは叫んだ。

「止まれ！！」

一同がぴたりと止まる。

セブンのカメラは、ピンと張ったピアノ線を捉えていた。

「トラップだ。ピアノ線が左右と前方に、だ。絶対に引っかかるなよ」

手榴弾のピンにピアノ線を結び、誰かが引っかかることでピンが抜け、爆発する。

そういうトラップである、とセブンは見抜き、辺りを今一度走査してから、彼はピアノ線を乗り越えた。

そして、他の隊員たちもそれに続こうとした、次の瞬間だった。

「っ！ やめる、動くな！！」

からん、ころん、と。濃緑色の、掌大の球体。

手榴弾が、床を転がってきた。

すぐさまセブンは叫んだが、隊員の一人が面食らって声を上げ踏鞴を踏んだ。

「う、うわぁ！」

ブービートラップとは。b o o b y、つまり間抜けが触れると死ぬトラップという意味だ。

セブんと、二人の敵の距離は目と鼻の先である。そこで、下手に手榴弾など投げればどうなるか。

相手諸共吹き飛ば、だ。

故に、転がってきた手榴弾は明らかにダミー。その手榴弾は偽物。しかし。

そうと見抜けなかった間抜けが、ブービートラップに引っかかるのだ。

「あ……」

「全員伏せる!!」

いくら訓練していたといえども、突如転がってきた手榴弾に冷静に対応できるかと言われれば、微妙なところだろう。

少なくとも、慌てて足を動かし、ピアノ線を引きぬいた一人は、できなかった。

爆発、轟音。

「くっそ！ 各員損害報告!!」

横合いからの爆風に耐えて立ち、セブンは叫んだ。

「損傷軽微！ 怪我もありません!!」

「同じく！ 少々防護服が破けましたが、ガスマスクは生きています！」

「同じくです！」

「軽症を負いましたが、問題ありません！」

他にも、各方面から怒声が響く。

果たして、敵は近場にいる自分たちに気を使ったのか。

仕掛けられた爆弾に、さほどの殺傷力はなかった。

軽症が数名。無傷の人間もいる。

内圧を高めて、空気の流入を防ぐ、防護服が破れたものは多いが、

ガスマスクがあるため、すぐさま問題が出る、と言うわけでもない。皮膚を冒すガスに備え、撤退しなければならぬだろうが、大きな問題ではない。

そうして、一度体勢を立て直す、とセブンが声を張り上げようとした、次の瞬間、作業台の向こうでガスマスクをつけた敵が立ち上がると同時に、唐突に室内に霧が立ち込めた。

「……！ 神経ガス！！」

セブンが、解析した結果を口に出すと同時に、作業台の向こうの、小太りの男が叫んだ。

「はーっはっはっはっは！！ 喰らえ新型の毒ガスを！！ 一網打尽だ！！」

「テンション上げすぎだ、馬鹿」

その隣の男が嗜めても、彼のテンションは高いままだった。対するセブンたちは、たじろぐこともなく、冷静に相手を見守る。

「だが、こちらにはガスマスクが……」

そして、そんな中、部隊の中の誰かが呟いた。

次の、瞬間だった。

「ごぼっ！？ がっ、げぼっ、かあっ、はっ！ く、くるし……、立ってられなっ」

ばたりばたりとセブンの背後の男たちが崩れるように膝を突いたり、倒れたりする。。

(こりやまさか……!!)

ガスマスクを付けているのに、男たちは苦しみ、もがくように、そのガスマスクを擦っていた。

その症状に、セブンは心当たりがあった。故に叫ぶ。

「全員、マスクを取るな!! 絶対にだ! さもなきや死ぬ!!」
「新型の催涙ガスだ。専用のガスマスクじゃなきや防ぎきれん、苦しいだろう?」

細身の男の言葉に、セブンは悪態を吐いた。

「くそつ、やられた」

昔にも、毒ガスに混ぜて、催涙ガスを使用する例はあった。

ガスマスクを透過しやすい催涙ガスで呼吸困難を誘い、マスクを思わず外したら毒ガスが作用すると言う寸法だ。

先ほどのブービートラップは、防護服の内圧で有害な空気の流入を防ぐという機能を阻害するためのものだったのだ。

(こんな高性能な毒ガス、どっから持ち出してきやがった……。バツクがそんなデケエのかよ!)

誤算は唯一つ。彼等がここまで高性能なガスを手に入れていたとは思わなかったこと。

型落ちの下げ渡しどころか、新兵器のテストではあるまいか、これでは。

「撤退だ! 撤退しろ!! 防護服が生きてる奴あ、駄目な奴担い

で走れ、駄目な奴は這ってでも帰りやがれ!!」

だが、なにをするにせよ、だ。一度撤退し、体勢を立て直す必要があった。

故に、全員が後ろ向きに前進しようと動き始める。

「聞いてたな、オレンジ。入り口付近に救援を配置してくれ。ただし中にや入んな。トラップがある。ガスで煙てえから、最悪ミイラ取りがミイラだ」

『了解』

こんなときの、橙の冷静な声はなんとも頼もしかった。

「撤退準備が完了しました!」

「おう、じゃあ順次戻れ」

そして、一人がセブンに報告し、セブンは頷いて返す。

「は、しかし、それではセブン警部補は?」

セブンはその質問に、顎で奥を示した。

「ちよいと行ってくるよ」とするさ

対する無事な警官たちは困惑した表情をセブンに向けた。

「お一人ですか……!?!?」

「残るとか言つなよ? そこに転がってるテメエの仲間を良く見やがれ」

言われて、警官達は苦しむ仲間と、セブンを見比べ。
敬礼をセブンへ向けた。

「撤退します！」

「おう、帰れ！」

去っていく警官。

それを見送り、セブンは一人となった。

セブンは、奥へと歩みを進める。

相手の男は高笑いを続けていた。

「はははっはは！ 税金泥棒共め！！！」

霧が濃くて、果たしてセブンのことが見えているのかどうか。

セブンは、各種センサーがあるため容易に見えるのだが。

「誰が税金泥棒だって？ テロリストめ」

そのため。大きく近づいて、ぬっと、セブンは男達の見える範囲に姿を晒すこととなった。

「うわあああああ！？ な、なな！」

「落ち着け秀介。敵のロボットだ」

あまりの驚かれように、逆にセブンが少し驚く。

「な、ななな、なんで無事なんだ！！！」

「……つつかよ」

秀介と呼ばれた小太りの男は、ひたすらにたじろいでいる。

セブンは、そんな彼に一言、叫んで応えた。

「メカに毒ガスが効くかよっ!!!」

「なんだとーッ!!!」

「落ち着け、秀介、当然だ」

冷静だった細身の男が、徐に銃を構える。

「ほう、やる気か？」

「やる気だ」

セブンの質問に、そんな言葉が返ってくる。

どことなく陽気で、ユーモアすら漂うような声色だった。

「ところでだな、お前ら。俺ア突然瓦割りがしたくなったんだがよ
お」

そして、対するセブンもまた、白々しいほどにわざとらしく、手を差し出した。

「瓦の代わりにガスマスク貸せ」

「それ死ぬ!!!」

秀介の叫びと同時に、戦闘は始まった。

「はっはあ！ じゃあ直接割るぜ、頭蓋ごとお!!! テメエら縦に
並べ！」

放たれる弾丸を、セブンは避けもせず。

放たれた弾が弾かれ、あらぬ方を傷つける。

「鳩が豆鉄砲食らったような面してやるうか？」

まるで、笑うような声でセブンは言った。

「やってみる」

瞬間、セブンの目が輝く。

一条の光線が、男二人の間を通り抜けていった。

流石の細身の男も、これには口元を引きつらせる。

「以上、鳩が豆鉄砲食らったような面でした」

「どこにレーザーを放つ鳩がいるっ！」

そう、男が叫んだ瞬間、セブンは一気に距離を詰めた。

「分の悪い賭けだったんじゃないか!?」

「どうなるうが構わない。もう他に何も残っていないのだからな！」

「あるじゃねえか、立派な命って奴がよ！　ただし俺のせいで風前の灯火だな!!!」

拳が唸り、男を弾き飛ばす。

そして、更に小太りの男の方の胸倉を掴み上げ。

「ちなみに俺は今にも倒れそうなランプタワーを、容赦なく崩してやるのが大好きだ」

「何で今それを!？」

言って、放り投げる。細身の男と同じ方へ、だ。

そして、二人の男が、地面に身を打ち付け、立ち上がるうともが

く。

その二人の下にセブンは歩いていき。銃口のある両手の平を突き付けた。わざとらしく、ジャキリ、と何かを装填する音が響く。

「残念、ここから先は人生の行き止まりだ」

とつくの昔に、射殺許可が出ている。

そんな、無慈悲な銃口に、小太りの男が泣き言を漏らした。

「な、何でこんなことに……」

「ああん？」

鬱陶しそうに、セブンが声を上げた。

「仕事も、家庭も上手くいかなくて、救われるって言われてここに入信して……」

心底、参ったように、苦しげに、男は呟く。射殺すべきである。

現状に置いて、彼らを逮捕する余裕はない。人手が足りないからだ。

人手があれば、彼ら二人を誰かに任せて先に進むことも可能だった。

しかし、この状況では、まともに逮捕もしてられない。最悪、背後から襲われる可能性すらある。

「救われるって言われたのに……、どうして……っ！」

また、こういう状況で、引き金を引けるのが、セブンの強みなの

だ。

故に、撃つべきだった。
撃つべきだったのだが。

「決まってる」

セブンが撃ち抜いたのは、二人の銃であった。
そして、彼らを見殺し、奥へと向かう。
その道中、セブンは一度だけ振り向いた。

「教祖様は信じたくせに、テメエは自分を信じられなかった。そう
いうこった」

後には、男のすすり泣く声が残った。

「よお」

二つ目の作業場には、予測に違わず、大男が立っていた。

「来たか」

セブンが来たことに気が付いて、男は向けていた背を返す。

「止めに来たぞ」

「既に始まっている」

「ああん？」

「本物の、広範囲用毒ガスは今頃空の上だ」

「超能力で浮かしてるってか？」

「そうだ。細かな操作は十メートルほどまでしかできんが、半ばオートメイションと化した単純な操作なら数キロ先まで浮かせることができる」

一歩、セブンは前に踏み出した。

つまり、噴霧器の類がなく、大して毒ガスが広がるまいと思っていたところに、空中にへりでガスを撒くのと同等の範囲を攻撃できる、と言われたわけだ。

「らしいぜ、オレンジ」

『了解、空を探る。しかし、それでどうにかするのは難しいかもしれんな。撃ち落すこともできなければ、下手な扱いをして容器を破壊する恐れもある』

「つまり、俺がこいつをぶん殴った方が早いつて訳だ」

『そして、こちらでキャッチと行かせてもらおう』

男もまた、踏み出す。

「ここから南の数キロ先で、容器を破裂させる。結果は当然お分かりだろう?。」

ここから南にいけば市街地だ。当然、人がいる。

「んなことまで喋っちまってるのかね?。」

方向が知れて、毒ガスを探すのが楽になるぜ、とセブンは笑っているような声を上げた。

男は、動じない。

「貴様には、生き証人になってもらうからな。事件の内容を知ってもらわねばならん」

「悪名でも歴史に名を残すってか? こだわるな、テメエもよ」

「当然だ。そのために生きてきたのだから」

そして、次の瞬間、拳が交差した。

「六年前、自分には妹がいた」

お互いの拳が、擦れあって、途中で止まる。

「おうおう、いきなり何か始まった。興味ねえんだが」
「そう言うな。聞いていけ」

男は、セブンの拳を受け流しながら、口を開く。

「妹もまた、超能力者だった。しかし、後から発現した俺よりもずっと微量で、ほとんど何もできなかった」

セブンは、黙って拳を振るった。

後ろに下がる男に、銃撃もおまけする。

だが、避けられる。

「その結果、妹は無理な実験につき合わされ、死んだ。十歳になっただけの頃だ。まるで、拷問だった。痛みが能力を活性化させるのではないかと言われ。五感の一つを殺せば能力が上がると言われ。しかし、妹の能力は小さなままだった。自分はずっとそれを見ていた。檻の中でだ。あの頃の俺はなにもできない、妹の、予備のスペアだった」

赤主天衆教の根本は、超能力にあった。

超能力を開発することで、一段階上の階梯の人間となり、救われるというのが教義。

そして、その客寄せこそが、目の前の男のような超能力者だったのである。

「妹は何も残せなかったぞ。何もできなかった。そして誰も覚えていない。誰も彼女がいた事を証明できない」

「で？ 代わりにお前が残すって？」

「そうだ。超能力を使って、世間に傷跡を残す。俺を調べれば、俺に妹がいたことに行き着く。そして、それは記録に残る」

その時、男が今一步、セブンに踏み込む。
そして、次の瞬間、セブンは大きく後ろに吹き飛ばされた。

「いてえじゃねえか」

「今ので無傷……、正気の沙汰ではないな」

壁にぶつかり、しかしセブンはあっさりと立った。

「超能力付き寸剄ってどういうこつたよ」

剄とは即ち運動量であり、中国拳法の発剄とは、踏み込みや体の捻りなどの全ての運動量を打撃に注ぎ込むことに極意がある。

そして、密着して放つ寸剄に、更に超能力の運動量を込めることで、飛躍的に威力は上がる。

「頭おかしいんじゃないの？ RPGで本でモンスターを叩き殺す魔法使いくらい頭おかしいぜ」

ブースト、の声と共に、セブンが迫る。
半身になる形で男が受け流す。

「んで？ 妹が可哀想だからガスでテロ起こすつて？」

「……そうだ。自分はなかったことにされたくない。妹をいかなかったことにされたくない。何も残せず、何もできず、誰からの記憶も残らないなど……！」

「妹がそう言ったのかよ」

セブンはぽつりと、呟くようにして投げかけた。

「テメエに悪名残してくれ、って妹が頼んだのか？」

拳を振るいながら、ぼつり、ぼつりと。

「テメエに人を殺してくれ、って妹が頼んだのか？」

責めるような拳を、男は超能力を使って受け止める。

「テメエに頼んだのかよ」

男の顔が、苦悶に歪んだ。

「そんなことしても妹はよろこばねエ！」

「だが……、それでも、なかったことになどされ
「 と言つても思ってたかバカめツ！！ 死ね！」

拳が、男の頬に突き刺さる。

体を逸らして避けようとはしたが、避けきれず、男は大きく仰け反った。

「死んでテメエは俺に詫びろ。ついでに妹にも詫びてきやがれ」

「まだだ！ まだ、まだ負けない！ あの子は確かに生きていた！
！ なかったものなんかじゃない！！」

そして、仰け反った男が元に戻ろうとしたその瞬間、セブンの腕から、煙が勢い良く噴出した。

煙幕だ。それに乗じて、セブンは後ろに大きく跳ぶ。

『セブン、聞こえるか。毒ガスのカプセルを発見した。そろそろ市街地に入る、危険だ。早めに決着を！』

時間がなかった。

男の超能力による初動の見切りは厄介で、相手が倒れるまで殴るのは、時間が掛かる。その間に、毒ガスはばら撒かれることだろう。

「確かに俺達はここにいるんだ!!」

拳句、腕を折ろうが、足を折ろうが、この男は超能力で体を動かし戦うことだろう。

意識を刈り取るほどの打撃以外、有効打にならない。

ならば、どうにかして見切りを掻い潜り、一撃で勝負を決めなければならぬ。

さもなければ、死ぬのは、そう。

何も関係のない、ただ日々を平穩に過ごす人々なのだ。

下手を打てば死んでしまう。事は、一刻を争う。

そして、それを争うことができるのは、今、セブンだけだった。

「オレンジ、聞こえるか？　これから決める。ま、あとで迎えに来てくれや」

煙幕。

その煙幕は少しずつ湊の周囲から押し出されていく。

「これで決めるつもりか……！」

相手は湊の周囲から離れ、動きを察知する空間の外にいる。

できるだけ、感知の外に出させないための室内戦なのだが、いつの間にか、端に押し込まれていたようだった。

そして、その状況は、湊にも読めていた。

相手は、一撃で勝負を決めに来る、と。

範囲の外に出て、最速で飛び込み、攻撃を掛けるのだ。

幾ら、範囲の中に入れば即座に分かるとは言えど、その範囲に入ってから速度が湊の反応速度を上回れば、打撃を与えることができる。

つまり、煙幕でどこから突っ込んでくるかわからなくし、そして、ガードの間もなく一瞬で叩き込む。

ならば、湊は全力で迎え撃つまでだった。

「もう、目に意味はない……！」

目を瞑り、他の感覚を鋭敏化させる。

相手が、感知の範囲内に入った瞬間、全力の拳を叩き込むのだ。

湊の感知が正確に働くのは5〜8メートルほど。

そこから湊が対応するのが速いか、相手が殴るのが速いかだ。

湊には、例え弾丸であろうと避ける自信があった。

超能力で受け取る感覚は、何よりも速い。そして、超能力により身体アシストは、人の身の限界を超えて速い。

銃口の位置が正確にわかる近距離はもちろん、狙撃されたとて察知からすぐに超能力で無理やり体を動かして避ける自信があった。だから、例えどこから飛び込んでこようと、迎え撃つ自信があった。

「何も考えるな。力を信じろ……」

ひたすらに感覚を鋭敏化していく。生涯最高の集中力だったと自負できるほどに。

(全力で、迎撃する)

地面を蹴る、硬質な音がした。

反響して、どこから来るか分からない。

(セオリーなら後ろ……、だが、あの男なら)

感知が働く。

即座に、湊は動いた。

「前から来ると思っていた ……!!」

打撃音。

確かな手ごたえ。

勝ったという確信。

過去最大の一撃。

鉄を砕いた感触。

為した事の重み。

砕いた。

「機械如きが、自分の邪魔をするな」

そう思った。

目を開く。

目を、見開いた。

「……下半身だけ!？」

そこにあつたのは、走ってきたのは。

千切れた痕のある、機械の下半身。

声は、背後から響いた。

「機械なめんな、人間のくせによ」

眩しい青い炎は、相手の背から発されていた。

下半身を強引にもぎ取った、上半身だけでその男は飛んで。

容赦なく、拳を振るった。

「つつかよ。妹の存在があつて、その影響を受けてお前がそこに居るってんなら」

衝撃は、いつそ清々しく、湊の頭を貫いた。

「それはそいつが確かにそこに『いた』ってことなんじゃねえの?」

Section 3 鋼の残響音（後書き）

多分、二度目ですが、本作でいう、警察や自衛隊などは、過剰に脚色されている場合があります。

一応ある程度調べて作ってはいますが、物語にするに辺り必要であると思つた部分は改変して描かれます。ご了承ください。

まあ、砕けた話をする、一応現代でもなければ近未来でもない、ちよつと変わった日本のお話なので、色々と設定していく部分も出てきます、と。

さて、では次回で鋼のリバーブレイションはエピソードと相成りませう。

赤井橙は、走っていた。

「くっ……」

セブンからの言葉、

『ま、あとで迎えに来てくれや』

その言葉が意味するのは、セブンが動けなくなることを想定していたと言うことだ。

それほどまでに、その戦いが危険だったということでもある。

「無事でいてくれ……!!」

毒ガスが、無事に確保された報を聞き、防護服を着込むと、すぐさま橙は駆け出した。

周囲の制止も振り切り、通信することも忘れて、だ。トラップの位置は既に、セブンのカメラから送られたデータで知れており、そして、奥の作業場へと続く前方へのトラップは既に発動済み。

既に、二人の男はセブンが戦闘している間に確保されているため、橙が走る以外は何の音もしない。

そして、すぐさま橙は奥の作業場への扉を開け放った。

「セブンっ！」

最悪の事態が、橙の頭に過ぎる。
そんな中、橙が目にしたのは。

上半身と下半身が分断され、無残な姿で、

「よお、オレンジ」

手を振るセブンの姿だった。

彼は、仰向けの状態からなんとか首だけを起こして、手を振っている。

橙は思わず、

大きく溜息を吐いた。

「な、なんだよいきなり」

「……いや、なんでもない」

無事で良かった。良かったのだが、釈然としない。

「つか、オレンジ、お前なんでこんな所まで」

「お前が迎えに来い、と言ったんだろっ？」

少々驚いた様子のセブンに皮肉っぽく、橙は言った。

「そうは言ったけどよ。俺は来いとは」

そして、橙はセブンの言葉を遮る。

「うるさい、帰るぞ」

「まあ、帰るのは同意だけどよ。そこのはいいのかよ」

そう言ってセブンが指差したのはうつ伏せに倒れている男だ。

「別の者がすぐに回収に来る。手錠だけは掛けておくが」

自分の仕事ではない、と橙は断じて、手錠を掛けた後再びセブンの元に近寄った。

そして、まるで抱きしめるように、リツカはセブンの首に手を回した。

「……おい？ 何してんだ」

「迎えが欲しかったのではないのか？」

「いや、重えだろ」

確かに重い。鉄の塊だから当然である。

「最悪、引きずって帰るとしよう」

「無理すんな。別に、這って帰ればいいだろ」

そう言って、セブンは橙の肩を押した。

橙は、セブンから腕を放し、首を傾げる。

「いいのか？」

セブンは、橙の方を見ることもなく、腕だけで器用に上体を起こし、言った。

「いいんだよ。迎えに来いってのは、ここまでやっといて這って帰るじゃ割りに合わねえだけだ」

そして、器用にも腕だけで軽快に動き出す。

「天下の課長様が慌てて飛んできたってんじゃ、十分すぎるぜ。疲れも吹っ飛ばせ、なあ？」

橙も、その後を追った。

「そうか。それは……、よかった」

「つかあー、自由に体が動くつつのはいいな、やっぱりよ」

あれから、一週間が経過した。

そうしてやっと、セブンは娑婆の空気を鉄の肌で味わうこととなっていた。

一週間もどこにいたのか。とある研究者の開発室とでも言うべきか。

流石に下半身分断状態は大事を取って、現場修理ではなく、調整も含め、開発者本人によるオーバーホールを行った方が良いと判断された。

オーバーホールとは、部品単位で分解され、清掃、再組み立てを行うことだ。

当然、不自由が強いられる。

ただし、代わりに清掃、劣化部品の交換が行われ、彼の体は新品同様となっていた。

そして、そんな彼は、今、刑務所にいる。

当然中にいるほうではなく、外から来たほうだ。

彼は、担当官に連れられ、面会室の中へと入った。

透明な板で仕切られた、圧迫感のある、その部屋。

「よう、湊つつたか、オメエ」

「セブン、と呼ばれているらしいな」

セブンは湊との隔たりの前にある椅子に座ろうともせず、立って湊を見下ろした。

「随分嚴重だな」

「これでも優秀な超能力者なものでね。下手な真似をすれば狙撃まですされるらしい。次は殺す、ともな」

「俺が駆り出されそうで面倒だからやめろよ」

今の時代に、超能力を抑制するような部屋や手錠、そんなようなSF的都合のいいものは存在しない。

反抗すれば即射殺、で脅しつけて、逃げないようにするだけなのだ。

左目部分に映し出される、目のようなものを器用に細め、半眼で見つめるセブんに、湊は曖昧に笑って返した。

「どうだろうな、まだ諦めていないやもな。貴様が帰った後全力で脱出を試みたらどうする？」

「俺が呼ばれてテメエをぶっ潰すことになるんだろうよ」

今回は急ぐべき毒ガスも何もない。長期戦で余裕を持って倒すことも可能だし、いつそ装備を変えて戦ってもいい。

見切つていても避けられない装備に、だ。

「ま、どうでもいいぜテメエの心中はよ。俺が聞きてエのは一つだけだ」

セブンが真面目な声を上げると、湊もまた表情を変えた。

セブンは、言う。

「テメエの妹のこと、教える」

「……なぜ？」

港が面食らった顔をして、セブンはどうしても良さそうに声を上げた。

「いたんだろうが、妹がよ。話せ」

明後日の方向を向いて、わざとらしく。

「俺は忘れないぜ。なんせこの頭は素晴らしいコンピューター様……、だそうだ。詳しくはしらねえがな」

「宝の持ち腐れだな……」

そう言って、湊はふっと笑った。

「さ、言えよ。俺のデータは、裁判の時に証拠品としても使えるんだぜ?」

セブンは、今一度、湊の目を見る。

多分、もう彼とやりあうことはない。なんとなく、そう感じた。

「ま、言つなれば」

そして、セブンは呟いた。

「公式記録ってやつだ」

「ご苦労様でした」

「ま、これも仕事ってことで。一応事件に関わった異能者の記録、
つてな」

(需要、ねえけどな)

最後の言葉は心中だけで呟く。

瀬田、湊は。

彼は一筋の涙を流し、終始笑って、まるで肩の荷が下りたように、そのまま死んでしまいかもしれないと思うほど安らかに、全てを語った。

彼の妹は、惨たらしい死を迎えたらしい。

どうやったら能力が上がるのか。カルト的な方法を実行されたという。

詳しく語るべきではないが、自らの力では満足に生活もできないほどの状況ではすまなかったということだ。

視力も味覚も聴覚も失い、五体満足ですらいられなかった。しかも、視力などを失ったのだって、生易しいものではない。最も原始的で、野蛮な方法で、彼女はそれを失ったのだ。

大の大人ですら、シヨック死しかねない方法だった。

どのような方法かは、湊はぼつりぼつりと語った。まるで、耳を塞ぎたくなるようなおぞましい行為が言葉の上で行われたが、セブンは全て聞き届けた。

「ま、んなことになったら、ああもスれるか」

果たして、それを檻の中で見続けるのはどのような気分だったろ

うか。

少し気になったが、無粋な想像をすることもなく。
そして。

彼は帰りついた。

特殊機甲課。

その、オフィス。

「おかえり」

ドアを開ければ、橙が待っていた。

窓から差し込む光が逆光となって眩しかったが、すぐにセブンのカメラが明度を調節し、快適な視界が戻る。

「そついやテメエ、花壇の水遣り行ってるのか？」

何故だか、おかえりの言葉が照れくさくて、露骨にセブンは話を変えた。

橙は生真面目に答えを返す。いつものように。

「ここ一週間、お前がいない間はな。だが、今日はまだだ。お前が帰ってくるというのに、誰もいないでは格好が付かないだろう？」
「いいから、じょうろ寄越せよ。行ってくる」

ぶつきらぼうにそう言うと、橙はすぐにじょうろを渡してきた。
そして、渡し際に彼女は言う。

「病み上がりなんだ、無理はするなよ？」

彼女は、真顔だった。

セブンは適当に返す。

「おいおい、オーバーホールの済んだ機械に病み上がりもなにもあるかよ」

そうしたら。

橙は笑っていた。

笑って、返した。

本当に、珍しい、完璧な笑みで。

「知らん。私は機械に詳しくないんだ」

セブンも、笑ったような声を響かせる。

「はっ、そうかい。遅れてんな、時代によ」

そして、彼はすぐに踵を返して歩き出した。

扉を開ける。

いい天気だ。

そして、ドアから出て行く一瞬前。

彼はポツリとだけ呟いた。

「……ただいま」

そして、レアな、橙の優しげな声が響く。

「おかえり」

「先輩つ、おかえりなさい！　じょうろ似合ってますね！」

黙って、セブンは花に水をやっていたじょうろをリックカのほうへ向けた。

「い、いきなりなにするんですか！！」

一房、重力に逆らって立っていたアホ毛が萎びる。

「テメエのアホ面がむかついた。むしゃくしゃしてやった。反省はしてない」

「警察が言っちゃだめですそれ！」

叫ぶリツカを、セブンは見下ろす。

「ったくよ。テメエ仕事はどうした？」

「え？ あ、いや、ちよつと」

「サボってんじゃねえ、スポンジタコ野郎」

「え、そんな奇妙な生物はちよつと……」

「とつとと帰るぞ。そんでラーメン食いに行くぞ。五店くらい」

「そんなに食べるんですか？」

少し驚いた顔のリツカに、セブンは苛立ち気味に返した。

「うるせえ、食事制限されてたんだよ。修理中はよっ。何も食わしてもらえなかったからな！」

「そうなんですか……。頑張ってくださいね」

リツカも、セブンのことをだいぶ学習済みだ。
触らぬ神に祟りなし。
が。

「テメエも橙も道連れだつつの。快気祝いってことにしといてもら
うぜ？」

全力で逃げるべきだった。

「やですよ！ 絶対食べれません！！」

首根っこ捕まれて、じょうろを肩に担いだセブんに、リツカは引き摺られていったのだった。

Complete リライト日常（後書き）

これで、鋼のリバーブレイションは終わりです。

次回は、また1〜2週間構想の時間を頂いて次の事件か、もしくは四日五日で日常編のどちらかで行かせて貰いたいと思います。

立花立花が、ぎらぎらとしていた。

(なんだありゃ)

見るからに、不機嫌そうで、イライラとした顔である。

「んだよ。新人、どうした？ あの日か？」

「……ぶちころしますよ、先輩」

低い声で、リツカは言った。

迫力はゼロに等しかったが。

「ああん？ 一体どうしやがった新人。変なもんでも食ったか？」

しかし、こんなリツカは珍しい。

どちらかというと、怒っている、というよりは荒んだような顔だ。どういふことだとセブンが問えば、リツカは口を開く。

「……っただですよ……」

「ああ？」

最初はぼそりと。

「太ったんですよッ！！ 3キロも！！」

二度目は大きく。
それは。

「おう、そうか」

「ご愁傷様である。」

「ですからっ、今後っ、私の前で、お菓子食べたりとか、しないで
くださいねっ?」

「……ああん? もう一回言ってみる」

「ひぁ……、と、とにかく! 私の前で今後不用意に物を食べない
でくださいっ」

「俺の唯一の楽しみを奪う気がこの野郎」

「先輩の楽しみなんて色々あるじゃないですかっ! え、えっちな
本とか……」

オフィスの机の前、椅子に座るセブンに、もじもじと言うリック。
しかし、セブンは知らん顔をする。

「それはそれ、これはこれだ。それよりテメエに、手っ取り早く重量を減らす方法を教えてやるよ」

「え？」

少し期待した目で見てくるリックに、セブンはその掌を向けた。

「削ぐんだよ」

「な、なにをですか……？」

青ざめる彼女に、セブンは無情に告げる。

「肉に決まってるんだろ」

「死にます！」

「おう、俺のために死ね！」

「嫌です！」

「我俣だな、しかたねえ……、積載加重を軽減しろよ」

「どういうことですか」

「腕部積載加重、つまり腕の弾薬を排除、装甲パージ、ついでにスラストーとか、いらんモンは捨てちまえ」

「それ先輩しかできませんよねえ！」

「いや、もういつそ服脱ぐとかどうよ」

「ナチュラルセクハラ反対！」

「ついでに髪も剃って、爪も切って、あと、片肺取って、腎臓も削って、腸を短縮すりゃそこそこだよ」

「どこに売るんですか！　というかそれ根本の解決になってませんよね？」

「おう」

瞬間、親指を中に握りこんだ、リツカのへろへろなパンチがセブンの顔を弾く。

「テメエ、職場の先輩にグーパンはねえだろおい」

「痛いです……」

「しかも自滅か」

「先輩は痛くないんですか……？」

「お前のしょっぺえパンチが効くかよ。やるならオレンジくらいじやねーとな」

「ああ、あれは……、痛そうですね……」

振り下ろされる分厚いファイルの打撃は、一番セブンにダメージを与えているのではないかと噂である。

「って、それはともかく、というか、そもそも勤務中にお菓子ばかり食べないでください！」

至極最もな台詞だった。

まあ、セブンにその条件を鵜呑みにする気はないのだが。

だが、だがしかし。

助け舟は意外なところからやってきた。

「気持ちは分かる。セブンも少し、考慮してやったらどうだ？」

このオフィスで、最も偉い人間の座る席から、だ。

「んだよ、課長様まで」

「別に食うなと言っているんじゃない、ただ、そうやって人が話しているのに甘味を口に運ぶ態度を改めたらどうだ、と言っているん

だ
」

そう、確かにまあ、セブンは今まさにポテトチップスを口へと運んでいる。

「……しゃあねえな。わあっただよ」

彼は袋に残った欠片を、さらさらと流し込んで、言った。

「ほごほごにしようとやらあ」

そうして、リツカの減量生活は、始まることとなったのだった。

「おい新人。メシは？」

「リツカです。食べません」

書類で机を叩いて、紙束の端を揃えながら、リツカは答えた。

「全く、よくやるな、テメエもよ」

「いいですよー、太らない人はー」

「うるせエ。俺を太らせたきゃ追加装甲でも担いできやがれ」

クーラーの効いたオフィスを歩いて、リツカは腕を組んで椅子に座るセブンに近づいた。

「というか、課長はどうなんですか？ こないだ、先輩に付き合つてラーメン同じだけ食べてましたよね」

リツカは途中リタイアとなったが、橙は涼しい顔でセブンに付いて行っていた。ラーメンを、七杯だ。

あんな細い体のどこにそれが入るのか気になるが、今はそれより入った食べ物がどうなったのか、である。

「ああ、アイツな。ここだけの話だが」

リツカの問いに、セブンは意味もなく声を潜めた。

別にオフィスに橙はいない。よくいなくなるのが、特殊機甲課、課長だ。

それでも、声を低く、潜めなくなるのは人情。

「どんだけ食つても太らねえんだよ、アイツ」

「え……、なんですかそれ。都市伝説？」

「マジだぜマジ。食ったラーメンのカロリー平均が855Kcal。女の平均カロリー摂取量は1700だから、実に3.5倍だな。到底簡単に消費しきれぬ量じゃねエ」

「あーあー、聞きたくないです、それ」

「それに、結構俺に付き合つてアイツ食うからな。だが、俺の計測

結果じゃ、ここ一年のアイツの体重の変動はねえ。誤差プラマイ3
87gだ」

「なにそれうらやましいです。っていうか、分かるんですか先輩！」
「最新機器なめんなよ」

「ひゃああ、見ないでくださいっ、あっち向いてください！」

「たく、メンドクセエな。それに、ちょっと見た位じゃわかんねえ
よっ」と

慌てて身を隠そうとするリックから、セブンは投げやりに目を逸
らした。

「さて、行くか新人」

「どこにですか」

「パトロールだよ」

「やですよもう、なんでなんですか」

「痩せるぞ」

「行きます」

その言葉に合わせて、立ち上がるセブン。

鉄の擦れる音を響かせて、悠々と歩き、扉を開く。

冷房の効いた部屋から一歩、外へ。

「うあ、あつついですねー」

「そんなセンサーは切った」

「便利ですな先輩」

扉を一枚抜ければ、すぐさま外気に晒される。

だが、格納庫の上にある特殊機甲課のオフィスから、本当に外に
出るには、動くとカンカンとうるさい階段を下りなければならぬ。

階段を鳴らして、二人はアスファルトに足をつける。

アスファルトに近づけば、熱が吐き出されていて、更に温度は上がる。

「おう、お二人さん、お出かけかい？」

そんな中、町工場を改造しただけのセブン専用格納庫から、巖夫が顔を出した。

「いつものパトロールだ」

「さよけ、しかし今日は暑いな。ウチの整備員共も軒並みへばってやがる」

「老骨には堪えるってか？」

「うるせえ、こちとらまだ現役だい」

初老の域に入りかけた中年。眼鏡をかけた神経質そうな男が、白髪交じりの頭を掻く。

「へえ、今日はリツカちゃんも一緒なのか」

「あ、はいっ」

視線を向けられて、思わずリツカは敬礼した。

別に必要でもないのだが、なんとなく敬礼してしまう、そんな貫禄を、彼女は巖夫から感じ取っていた。

「ま、頑張んな。セブン、リツカちゃんも慣れてきたしそろそろガチだろっ？」

そして、巖夫はリツカの肩をぽんと叩き、意味深な目線でセブンをみる。

「ああ、まあな。ま、だから減量に効果があるってもんだが」

「ああん？ リッカちゃんダイエツトしてるってかい。女ってのあ、多少ふくよかな方がいいもんだぜ？」

「あ、はい、でも……」

「そんなモンはテメエの好みだろうがよ、巖夫。ま、ガリガリな女は俺も御免だけどな。女は柔らかいに限る」

そうやって、手をわきわきとさせるセブンから、露骨にリッカは目を逸らした。

「行きましようっ、先輩」

そして、若干苛立ち気味にセブンの手を引く。

無論、びくともしないが、一応セブンの目的も、リッカと同じだ。セブンもまた、向きを変え、歩き出す。

「じゃあな、巖夫」

「また壊して来んなよーっ」

そんな声を背に、二人は歩く。

「しかし先輩、先輩って赤井課長と仲いいんですか？ 結構食べに行ったりとかしてるそうですけど」

そして首を傾げるリッカ。

セブンはリッカの方を見ずに答える。

「どうだかな。ま、付き合いはそこそこだ」

「そうなんですか？ 仲いいですよね？」

「んなモン、基本的にオフィスに二人しかいねえんだ。険悪になん

かなってられるか」

そんな風に、投げやりに言うセブンだが、リツカの印象は違った。

「先輩って、課長に妙に優しいですよね」

「んだよいきなり」

「甘いつて言うか、素直つて言うか……。さっきだって、課長の言葉は素直に聞いてましたし」

「るせえな。テメエが生意気なだけじゃねえのか？ つうか、アイ

ツに逆らうとファイルが飛んでくるんだよ」

「課長への優しさを少しくらい私にも分けてくださいよお！」

喚くりツカを、セブンは黙殺した。

数分の間があつた後、リツカとセブンは二人、花壇に向かって水を遣っている。

「ねえ先輩、こんなんで痩せるんですか？」

「あ？ 良いか脳みそスポンジ。歩くことにより、一分間に約3・

3のカロリー消費が見込める。一時間で198消費だ」

「一時間で198 Kcal……、道、長いですね」

疲れたような声に、セブンはなにを言ってるんだ、とスピーカーを響かせた。

「必要なカロリーにちょっと届かねえ位でいいんだよ。そしたら徐々に減っていくからな」

「そんなもんですか」

「そんなもんだ。俺の有り難いコンピューター様のはじき出した結果だ」

そう言って、セブンは花壇から背を向けた。

「じゃ、次行くぞ」

「おらおらおら、行け新人！ とっ捕まえる！！」

「なんで、私！ 猫！ 追っかけてるんですか！！」

「ごめんなさい、ウチの猫、外に出るとテンション上がっちゃって

……」

「気にすんな、今にうちの新人が捕まえるからよ」

「うん、いつもありがとね、センちゃん」

「センちゃんはやめろよ」

走り回るリツカと猫。

それを見守る、二十代女性と、セブン。

「先輩も手伝ってくださいよお！」

「獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす。愛ゆえにだ。テメエは我が子じゃねエけど」

「獅子は他人の子はどうするんですか！」

「適当に千尋の谷に放り投げるんじゃないの？」

「愛がないっ！」

リツカの手が猫を掠め、しかしするりと逃げられる。

それを追って走ると、軽やかに後ろに回られた。

そして、振り向こうと思ったら、背中に衝撃。

「にゃうっ…！」

とんとん、とんと、と、猫に背を駆け上られ、頭を踏み台に高くジャンプされる始末。

「舐められてんぞー新人。根性見せろ」

全力でリツカは追い掛け回すが、結果は電柱に顔面強打。

最終的に、捕まえようとヘッドスライディングを掛けてかわされて、待っていたセブンにキャッチされる。

「ほらよ」

「ありがと、また、よろしくね。センちゃん、リツカちゃん」

「おらおらー、行け新人、ぶっ殺せ」

食い逃げ犯を追う。昼食を食べていないのに、昼食を食べて走る人間を追うのは、精神的に来るものがあった。
が、これも警官の務めならば、と、リツカは走る。

「ぜっ、は！ と、とま、はっ……、は、とまってっ、ぜえ、ぜえ……、くだ、くださっ、ふっ、い、はあっ！」
「こ、この嬢ちゃん可愛いくせに怖い！！」

息も絶え絶え、顔面蒼白のリツカに、若干食い逃げ犯も引き気味だった。

そして、そんなリツカを見た後、食い逃げ犯がまた逃走を始めようとしたとき、硬い壁のようなごっごっした何かにぶつかる。

「残念、行き止まりだ。デッドエンドだ。さあやれ新人、ぶっちぎれ」
「おとっ、と、おとなしくっ、ツかまって、くれればっ、なにも、しませんっ」

変なところで声が裏返ったりもしたが、なんとか言えた。

「ほほう、ならやってみるがいいわこの子豚さんがあ、だってよ」「俺そんなこと言ってるネーッ!!」

リツカの瞳が危険な光を宿す。

そして、握り拳が。」「

ぺちんと、男の顔に繰り出された。

「こちとらねえ、お昼ごはん抜いてるんですよおお!!」

その他、室内で色々極まったストーカーと乱闘を繰り広げたり。

「今だ新人、右ストレート！ 効果は今ひとつか……」

「私は彼を愛しているのよっ、邪魔しないで！」

床で、もつれ合うように、リツカとストーカーの女が戦っている。

「今日も彼のパンツを拾って、ゴミ出しされた割り箸を回収して、作っておいた合鍵で仕事中に部屋に入ってベッドでハアハアしてただけのの！」

「怖っ」

流石に美人でもそりやねえや、と、セブンすらも一歩引く。

「せ、せせせ先輩っ、怖いですこの人！」

「俺も怖い、安心しろ！」

「どうすればいいんですかあ！」

「その電話のコードを使って首を絞める！」

「ワイヤレスフォンですそれ！！！」

「チャック・ノリスならやれる！」

「リツカです！！！」

そうして、めまぐるしく日は暮れた。

「ねえ先輩、これって警察のお仕事ですか……？」

「ストーカー退治に食い逃げ確保。立派な警察官だろ」

疲労困憊、いつもしゃんと伸ばした背を丸めて、リツカは歩く。

「私が聞いているのは、猫探しとか、倉庫掃除とか、花の水遣りとか、屋根の修理とかですっ」

「じゃあねえだろ」

不満げなリツカに、セブンは投げやりな声を返した。

「世間一般じゃ、サツなんて役に立たねえと思われてんだからよ」「
「どういうことですか？ それ」

「そもそも、そのイメージがどこから来てると思ってる？」

「え……、上の汚職とか、変なミスとかですか？」

「ちげえ、ストーリーだの、娘の行方不明だの、そういう生活レベルに密着した犯罪に無頓着だからだよ」

ストーリーカーは自意識過剰、娘の行方不明はただの家出。そう見えることもあるし、実際にそうであることもある。

ただ、本人達にとってはそれ所ではない。そんな彼らが欲しいのは、親身な対応であって、決してお役所仕事でも、日和った対応でもない。

「これでも、俺ア警視庁のマスコットの存在だからな」

「まあ、ご当地ヒーローみたいですね……」

「イメージアップに努めるってこった。どうせ平時は暇だしな」

そう言って、セブンは特殊機甲課のオフィスの扉を開く。

「ま、テメエは今日のところあ荷物持って帰んな。慣れるまでハートだぜ？」

「まあ、なんか痩せそうですし……。明日からも付き合いますよ」

室内は暗く、橙は今戻ってきていないのか、既にもう仕事を終え帰ったのか。

定かでは無いが、それを調べる体力はリツカに残されていなかった。

ふらふらと靴を取り、リツカはオフィスを後にしようと扉に手を

掛ける。

「では先輩、失礼します」

「じゃあな」

セブンを残して、リツカは家へと向かうのだった。

そして、次の日も。

「お嬢ちゃん、幸薄そうな顔してるネ。この壺二万円でどうよっ」
「ほっといてくださいっ」

その次の日も。

「あ、あの子！ あの子が噂の家出少女じゃないですか!？」
「よし、新人走れ」

更に次の日も。

「今日は、今日こそは勇気を出して、寝てる間に彼の足をぺろぺろするのよ！ 邪魔しないでっ」

「また貴方ですか！」

そして、ある日。

「新人、昼飯は？」

「リツカです、食べません」

いつものようにセブンが立ち上がる。

「じゃ、行くか」

「はい」

二人立ち上がり、外へと歩き出す。

「オレンジ、行ってくる」

「ああ、気をつけて」

そう言って、また、いつものように外へと。

「おい新人。顔色悪いぞ、大丈夫か？」

ふと、階段を下りながらセブンが問うと、リツカは平気そうな顔をして答えた。

「大丈夫ですよ？ 私も、特殊機甲課の一員ですからっ」
「そうか」

にっこりと、彼女は笑う。

「へ、新人の癖に生意気だな」

「先輩こそ、先輩らしくしてくださいよ」

「お？ 俺のどこが先輩らしくないって？」

「どの辺が先輩らしいんですか？」

「……鎖骨ら辺？」

「どこですか！」

全身機械で、装甲に覆われたセブンの鎖骨が一体どこだか知れたものではないが、結局先輩らしさなど発見できず。

「さって、今日も張り切って人助けしちゃいましょうっ」

リツカは肩で風を切って、歩き出した。

兵隊は走るのが仕事。ただし、お巡りさんも似たようなもんだ、とリツカは思う。

「逮捕です!!」

「いや、猫を逮捕すんなよ」

「最近こんなばつかですから気分だけでも！」

走り回るリツカ。

走り回る猫。

「キャッチですっ」

「オマエ猫捕まえんの上手くなつたな」

「そういう仕事じゃないんですけどね！」

猫を捕まえて飼い主に返し。

「食い逃げ！ ダメ、ゼツタイ！！」

「うわあ、また嬢ちゃんか！」

「テメエも食い逃げしすぎだろ」

「いや、もう足が勝手に……」

食い逃げ犯を走って捕まえ。

「次は朝起きたら突如隣で寝てるのよ！」

「いい加減その愛の形から角を取ってください……！」

ストーカーと今日も揉み合う。

そして、日が暮れる。

「いいですか？ 愛は素敵ですけど、相手の気持ちも考えてください。どんなに愛しても、受け入れてもらえなければ愛し合っていない。」

「んですよ？」

「まったくもう、おせっかいね、貴方」

無理やり、室内からストーカーを引きずり出して、リツカはストーカーに説教をしている。

「帰るぞ、新人」

そんな中、割り込むようにセブンが言った。
リツカが振り向き、頷く。

「あ、はい。それでは、もうストーカーはやめてくださいね」

ストーカーに挨拶。セブンのほうへ歩き出す。

そして、また笑った。

「どうですか？ 先輩。私も中々、いい感じじゃありません？ 特殊機甲課の一員として 特

「あー、どうだかな」

背を向けて、歩き出すセブン。それをリツカは追う。

そして、楽しげに口を開くのだ。

得意げに、楽しげに。

「ええ？ 平時の仕事、殆ど私が……」

が。

そのときだった。

リツカの体が、傾ぐ。

「……ほらな？」

「えっと……、ええ……、っと。あれ……？」

セブンの声に応えようとして、ふらり、ふらり、ふらり、と。三度傾いで、彼女はバランスを失った。

重力に逆らわず、倒れていこうという体を、予定調和のようにセブンが支える。

「帰るか」

「倒れちゃったけど、大丈夫なの？」

ストーカー女がセブンに聞く。

セブンは振り向くことすらせずに答えた。

「分かってたからな、俺もレンジもよ。飯もロクに食わねェで仕事三昧。そら倒れるわナ」

「気付いてたなら言っておけばよかったのに」

「教えたって無駄だろ。コイツ、ブレーキ付いてねえタイプだぜ」

そして、リツカを抱え上げ、彼は歩き出す。

「好きなようにやらせて、限界分かせてやるほうが早えだろ。こ
ういうのはよ」

「大事にならないように見守ってるのね」

「先輩としての俺の仕事は、つかえねえウジ虫を、使えるパシリに
仕立て上げることだ」

(あつたかい……、気がする)

なんとなく、ごっごつした感触の中で、リツカは目を覚ました。

「起きたかよ。半人前」

「私……」

「倒れた記憶はあつか？ 頭は大丈夫か？ 変わらずスポンジか？」

「……相変わらず酷いですね。多分、大丈夫です。心配、おかけしました」

セブんと会話し、前後の記憶をサルベージ。

倒れたのだ、というところまでは理解できた。

そして、状況把握。

同時に、頬が赤くなる。

「だ、大丈夫です、お、下ろしてください」

現在の状況。 姫抱っこ。

帰ってきたのは不機嫌な声。

「あ？ また倒れたらどうすんだテメエ。オレンジにどやされんのは俺だぜまったく」

「で、で、でも……」

「第一、たかが「わー！ わーっ！！」キログラム位で一喜一憂してんなよ。一応標準体重だぜ？ 一応」

喚くな、また倒れんぞ、と言いながら、カンカンと音を鳴らし、セブンは階段を上がっていく。

「ま、邪魔クセエから俺の菓子でも食って帰れよ」

そんな言葉に、羞恥に縮こまるような体勢でしばらく黙っていたリツカだが、やがて、ぼつりと、言葉を漏らした。

「先輩って……、課長に優しいですよね」

「ああ？」

不機嫌そうな声を返すセブン。

しかし、そんな彼に、リツカは笑って返した。

「訂正デス。先輩って、優しいですよね」

ふんわりとしたその笑みに、セブンは目を逸らした。逸らして、たった一言返した。

「うるせH」

後日。

「新人、昼飯は？」

「リツカです。ラーメンの出前で」

「お？ やめたのか？ ダイエットとやらはよオ？」

いやらしく聞いてくるセブンに、つんとした態度で、リツカは答えたのだった。

「ちゃんと食べないと体が持ちませんからねっ！」

こうして、ダイエット終了。

更に後日。

「……馬鹿食いしたらまた太りました」

「もう知るかバカ。仕事してりゃ勝手に減るだろ」

Interrupt / A タチバナアップデートダウン（後書き）

日常的閑話として後二本入れた後、事件発生の方向で行きます。
次回橙編と、次々回セブン編で。

Interrupt / B アカイストリート

「おはよう」

「ああ」

立花リツカ、非番。

勤務を終えた彼女は、橙と入れ替わるように、眠い目を擦りながら帰っていった。

先ほどまで、セブンは眠そうにする夜中の小学生のような相手をずっと見つめていたため、嫌にしゃっきりとした赤井橙の姿は妙に眩しかった。

(俺が居るから当直なんていらねえんだけどな)

「書類上は備品なのだ。体面上、人を置いておかねばなるまい」

「……口に出てたか？」

「顔に書いてあつたぞ」

「顔のどこにだよ」

実質、セブンの顔の中で表情を変えられるとすれば、左目だけ、と言ってもいいのだが。

果たして付き合いの長さか、それとも優秀な課長の眼力か。

(まあ、どっちでもいいか)

そう考え、セブンは思考を放り捨てる。

そんな中、橙は椅子に座るセブンの元にまでやってきて、口を開いた。

「ところでセブン」

ところで、と呼びかけられ、セブンは面倒くさそうに椅子を左へ回転させる。

「んだよ」

「立花は、どうだ？」

その言葉に対する返答に、セブンは迷った。
抽象的過ぎる。なんと返したものが。

「どう、って、どういうことだよ」

「別に何でも構わない。新人を迎えてみてどうだ？ 良かれ悪しかれ、思うことはあるだろう？」

「あー……」

そして、セブンは顎に手を当て考えたあと、思いついたように指差してスピーカーを響かせた。

「便利なパシリが手に入ってラッキー？」

「……」

橙は、非常に微妙な笑顔で返してくる。

苦笑にも、呆れにも似た、そんな顔。困り顔と言ってもいい。

「オレンジはどうなんだよ。新人の印象はよ」

セブンの問いに、今度は橙はやさしく微笑んだ。

そういう本物の微笑みは、余り見ない、珍しいものだ。

橙はよく、笑いはする。人の上に立つならば、笑みは必須と言え

るだろう。苦境であろうとなんだろうと、出すのは泣き顔ではなく自信に溢れた笑顔でなければならぬ。

だから、橙はよく笑う。部下の指揮を下げないためであったり、何か企んだような笑みであったり、まるで仮面のような笑みが得意だ。

「よくやっていると思うよ」

だからこそ、素で出る、慈しむような笑みは、珍しい。

「アレがか？」

「アクの強い面子相手にな」

「俺か」

「私もだ」

「お前が？」

「とっつきにくいのは理解しているんだ」

「かもな」

そして、そんな優しげな笑みは姿を消し、今度は無表情。

「性分だからな。どうしようもないんだ」

「そりゃな。その気になって正確変わりゃ、今頃誰でも友達百人だ」

「だが、まあ。そんな中、立花は良くやっているよ。こんな課だから、すぐに逃げ出すかと思ったんだが」

「そら、常識超えした奴等と戦わされるような部署はな。俺なら逃げる」

「私も御免だ」

「じゃあ何でここにいるんだよ」

「さて、ね」

言つと、橙はセブンの隣の机に書類を下ろした。

誰も使う者のいない空きの机は、現在都合のいい物置と化している。比較的使用頻度の高い書類などは全てこちらだ。

「しかし、今日は暑いな」

そして、彼女は当然のことを当然のように呟いた。

セブンは、その言葉に呆れたように壁を見上げる。

「いい加減クーラー直せよ」

「しばらくは予算が下りそうにないな」

そう言つて、橙は胸元を摘んでぱたぱたと内に空気を送り込む。と、その時。

ふとセブンはあることに気が付いた。

橙の胸元にある異変があることに、だ。

そう、それは言うなればクールビズで。

つまるところ、胸元のボタンが大胆にも、開けられていたのだ。

「おおぅ……」

セブンの視線はそちらへ釘付けに。

(見える……、見えるか？ いや、見えない……？)

自らに積まれたあらゆる機能を使って、夢の門を覗き込む。

セブンの頭の片隅では、数個の動画がコマ送りになったり、超スローになったりして再生されていた。

普段使わない機能を総動員。素晴らしくもあり、用途が情けなくもあり。

そんな中、橙もまた、セブンが妙なことに気が付いた。

「どうした？」

別に視線を気取ったわけでもなく、ただ単純に尋ねる。が、しかし、セブンは中々言葉を搾り出せずにいた。

「お、おう。ん、いや」

流石に、胸元をガン見していました、とは言っわけにもいかず。しどろもどろでセブンは誤魔化そうとした。のだが、果たして彼女は如何な勘違いをしたのか。

「妙だな？ 調子でも悪いのか？」

ぺたり。と。

自分とセブンの額をくっつけ合わせ、彼女は所謂、熱を測る、という行為に出た。

面食らっていたセブンが再起動するのに掛かった時間は数秒。しかも、その数秒間は無防備な胸元に釘付けだ。

「お、おい？ オレンジ？」

「……ひんやりしているな。別に熱はないようだが」

「高性能なラジエーターが効いてるからな」

平静を装って、セブンは返す。

(こいつ、狙ってやってんじゃねえだろうな……)

それとも、男として見られていないのか。

確かに、セブンの体はコトに及ぼうとしても及べない体ではあるが。

「別に、調子悪くもなんともねえよ。つつか機械に熱もなにもあるか。あるとしたら過剰な機動による熱暴走つつやつだ」

「そうか、ならよかった」

そう言って、彼女は笑う。

(マジで狙ってやってんじゃねえのかコイツ……)

無論、そんなことないのは分かっているのだが。

(ちくしょう。この課にや天然ばかり集まってきやがる。生殺しだぜ……)

リックもそうだが、橙も重度の天然だ。なんというか、防御が甘いのだ。

長い付き合いゆえ、慣れたことでもあるのだが。

しかし、それでも動揺してしまうのは男の性というべきか。

(思春期か俺は……)

思わず頭を抱えるセブン。

「どうした？」

「いや、何でもねえ」

また似たような真似をされてはお手上げた、とセブンは抱えていた頭を上げた。

「そうか？ まあ、いい。とりあえず、行くんだろっ？ いつも通り」

「ああ。新人がいねえからな」

そう言って、セブンは椅子から立ち上がる。

「さ、行くっ」

「おう」

セブンは、いつもと変わらぬ調子で、外へと歩き出した。

基本的に閑職であり、閑職であるべき特殊機甲課の主な任務は、自主的なパトロールにある。

課のオフィスを抜け殻にするのは問題がありそうだが、しかし、

基本的に整備員は残っているし、なにかあればセブンに直接連絡が届く。

特殊機甲課はセブンを効率的に運用するための課であり、そこにセブンがいればそれで十分とも言える、

むしろ、セブンか橙を残してどちらかが外に出るよりも、一緒に出ているほうが即応性が高いというものだ。

「ふむ、今日も平和だな」

「そうだな、それがどうかしたかよ」

「いいことだ」

言いながらも、橙は走っていた食い逃げ犯を掴んで足を払うと、華麗にも投げ飛ばす。

この辺りが、リツカと橙の違いと言うべきか、慣れというべきか。

「またテメエか。食い逃げが趣味なのか」

「いや、あの……、はあはあしてる女の子に追いかけてられているうちになんか楽しくなって」

「新人が新たな性癖を目覚めさせちまったか……。しかし、これ平和か？」

「何も切羽詰まっていらないだろう？ 誰も取り返しのつかない事はなっていないし、ならなかった」

確かに、毒ガステロだのと向き合っていればそのような感覚になるかもしれないが。

「まあな」

「しかし、あなたは危ないぞ。一心不乱に走れば事故の可能性が高くなる。そうなれば、あなただけでなくあなたが食い逃げをした店の店主すら、悲しい気分になんてさせてしまいかもしれない。目の前で、

死なれてしまつては。私も、悲しい」

「え……、あ、は、はい」

(やっぱりわざとやってんじゃねえだろうな、夕チわりい)

セブンが半眼で橙の背を見つめていると、唐突に橙は振り返る。

「さて、では花の水遣りに行こうか、セブン」

「……ああ」

警視庁特殊機甲課所属、赤井橙。

二十四歳、警部。非常に優秀であり、未来を有望視されたキャリア組だったが、本人たつての希望により、彼女は異例の早さで特殊機甲課課長に就任。

彼女は同期の中で一人、出世への道を外れることとなる。

異常な若さでの課長就任、特殊機甲課という部署の特殊性と、当時上層部やセブンとどのような関係があつたのか、謎の多い人物でもある。

と、というのが赤井橙の警察としてのプロフィール。

(ただし、現実はずただの天然だ)

心で呟き、セブンは橙を見た。

「そついやリツカがこないだばやいてたぜ。こんなの警察の仕事じゃないつてよ」

「はは、そうか。だが、お前も最初はばやいていただけろっ？」

「もう慣れたつつの」

「彼女も慣れるさ」

「かもな。だが、とつとと田舎に逃げ帰るかもしれないぜ？」

「そしたら、また二人に戻るだけさ。整備員の面々はいるがね」

結局、整備員も特殊機甲課を支える一員なのだが、捜査にせよ、鎮圧にせよ、実働隊はセブンと橙が賄っていた。

「まあ、あの頃も嫌いではなかったよ。あんなめまぐるしい毎日は

昔。四年前から今に至るまで。セブンと橙だけで奔走を続けた日々だ。

パトロールの人員が一人増えただけで、大分変わった。

「あの頃のテメエはいつ休んでるんだかわかんねえ位だったからな」

「ふ、心配してくれてたのかい？」

「馬鹿言っなよ……、と？」

そうして、セブンが、眩きながらじょうろを傾けたその時。

「どうした？」

「ここから東に500メートル行った先のビルで火災が発生してるらしい」

「……どうやら、のんびり過去に想い馳せさせては貰えんらしいな」

セブンの聴覚に届いた火事との怒号。付近の現場情報にアクセスして確認を取れば、すぐに場所も知れた。

「行くぞセブン。抱えていってくれ」

「あいよっと」

状況は、一刻を争う。

ビルにタンクローリーが衝突、いつ爆発するか分からない状況。ビル内には飲食店も存在し、ガス爆発の危険性アリ。

「さて、行くぜ」

橙をお姫様抱っこにし、柔らかな感触を感じつつ、セブンは走り出したのだった。

状況は最悪である。

「状況が危険すぎて、突入するわけにも……」

若い消防士が呟いた。

取り残された人がいるのに、この状況で突入しては犬死だ。遠巻

きから放水するしかない自分が無力で憎い。

そうして、消防士が強く手を握り締めた時。
唐突にそれは現れた。

「中々の救助テクを持つてるみたいだが……」

がしゃんがしゃんと音を鳴らし、腕の中に美人を抱え。

「この街じゃあ、二番目だ」

「じゃ、じゃあ、一番目はもしや……」

「知らねえ。俺消防士じゃねえし」

「……あ、そうっすか」

いまいちしまらなかった。

「頼んだ、セブン」

「おう」

「オペレーターを開始する」

「任した」

そう言って、機械の男は、燃え盛るビル内に飛び込んでいったのだった。

「うおあつちい！ センサー切り忘れた！！」

急速に、感じる熱さは勢いを失い、セブンの感じる熱さはぬるま湯よりもぬるくなる。

「センサー類調整完了……、ふう」

『こちら橙。感度良好、行けるな？』

「こちらセブン。問題なし。ズバツと解決といきたいもんだな！」

『よし、行け！』

「Yes!!」

矢のようにセブンは駆ける。

それをサポートするのが、赤井橙だ。

『センサーで確認されたのは三名。ばらばらに分布しているため、急がねばならない』

今頃、橙は外でノートパソコンと対峙していることだろう。

『二階から四階まで一名ずつだ。まずは右手の階段から二階へ』

その言葉に従い、セブンは右側の階段を目指す。

救助は、時間が命だ。

海難だろうと火事だろうと変わりはない。危険なのは酸素が足りなくなること。

火事では、煙で一酸化炭素中毒になる前に救助しなければなら

い。

一酸化炭素はヘモグロビンと酸素よりも結合しやすく、そして乖離し難い。

つまり、酸素を運ぶべきヘモグロビンが一酸化炭素に占有され、酸素があっても酸素不足になってしまうのだ。

わずか三呼吸で意識を失う例もあるらしく、可能な限り急がねばならない。

「オレンジい！ 二階に着いた！！」

燃え盛る炎の幕を越え、セブンは二階に立つ。

彼の脳裏に響くのは凜とした橙の声だ。

『まっすぐ走れ』

廊下をまっすぐに駆ける。

脇目も振らず、他に何も気にせずに、だ。

『そこで右だっ』

ただ橙の声だけに従い、セブンは走った。

『次の左の部屋、左端！』

「そこかつ！」

引きちぎるように、セブンは扉を開く。

ちぎれた扉は後方に投げる。

そのまま部屋の中へ押し入れれば、身を低くしている女性がそこにはいた。

「一人目発見！」

「あ、貴方は……！？」

「救助だ！」

叫び、そのままセブンは女性を抱え上げる。

「次はどっちだオレンジ！」

『真上だ！ 最短ルートは窓から侵入！』

瞬間、背後で爆発を感知。

迷わずにセブンは窓を蹴破った。

「娑婆の空気味わつとけよ！？」

女性に向かって叫び、セブンは背から炎を吹き出しながら壁を駆け上がる。

それに刹那遅れて爆発が窓から吹き出た。

それを振り返ることもなく、セブンは上へ。

女性を外においてくる暇はない。今更また降りるにも、時間が掛かる。

「まったく。最初っから飛んで入るべきだったかね！」

一度ちゃんと入ることによって、センサー類の精度を高め、見落としの生存者がいるかを確かめることができるため、ちゃんと意味はあるのだが、そんな事実はさておき、セブンはぼやきながら部屋の窓を今一度蹴破った。

「二人目確保オ！」

二人目は、若い男。それを小脇に抱え、セブンはドアを蹴破る。

『左だ。近くに階段がある。登ったら右へ走れ』

言われるがまま、セブンは階段を登った。

『右へ』

「了解！」

燃え盛るビルの中、橙が安全な最短ルートを示しているとはいえ、それでも煙はあり、視界は悪い。

そんなときのためのセンサー類がセブンには大量に積まれているのだが。

『前方には床が欠落しているっ、跳べ！』

センサーを全て落として目を瞑っていたって、橙がいればセブンは目的の場所に辿り着けることだろう。

斜め前へジャンプ。壁を蹴って向こう岸へ。

『左っ』

「見つけた！」

もう一人は、廊下に倒れている少女だった。意識がない。

「テメエ、男だろ？ 気合で掴まってる。振り落とされんなよ」

「あ、ああっ」

抱えていた男を首のほうに押しやり、首元に腕を回させる。

空いた腕は少女を抱え。

「ラスト確保つ、脱出は」

『下はもう危険だ。上から行けっ！ 窓よりも屋上のほうが近い！』

「了解」

セブンは階段へと引き返そうとするが、それを橙は止めた。

『待てっ！ 先ほども一度爆発が起きた、そちらは危険だつ。まずは左に！』

「おうっ」

踵を返し、走る。

確かに、先ほどから、セブンの聴覚は散発的な爆音を聞き取っている。

（オレンジがそう判断したなら……、大概の場合当たりってことだっ）

指示に従い、セブンは別の階段の前に立つ。

そして、駆け上がるのすらもどかしく、跳んだ。

背から炎を吹かし、段を飛ばして一気に上へ。

そして。

「屋上っ！！」

屋上への扉を蹴破り、空を拝んで。

一際大きい爆発と共に、ビルは崩れ去った。

半壊したビル。

間に合わなかったのか、とくずおれる消防士の前。
轟音と共に、鉄の塊は降り立った。

「おかえり、セブン」

「おう、帰ったぞ」

生きていた。三人の要救助者もだ。

数人が駆け寄って状態を確認するが、命に関わることはないらしい。

若い消防士は驚きの状態から立ち直り、二人に声を掛けようとした。

のだが。

「さて、帰るか」

「ああ」

「ま、新人が来てもやることなんざ変わらねえってこったな」

「そうだな」

「まったく……、いつも通りだ」

呼び止める間もなく、二人は去っていった。

「……なんだったんだあの人たち」

日は暮れ始め、所変わって、オフィス。
何事も無かったかのように救助を終えた二人は、普通に歩いてこ

の場に戻ってきた。

「まったく暑い夏に火事って、最悪だなオイ」

暑さもなにも、センサーを切れば感じもしないくせにセブンは呆れたように言い放つ。

「そうだな。この猛暑はどうにかならないものか」

対して、無表情に橙は言った。

「オマエはもう少し暑そうな顔しろよ」

「暑そうに見えないか？」

「涼しげな顔しやがって」

特殊機甲課のオフィスは、西日が差し込んで、暑い。その暑いオフィスを橙は歩き、窓の外を見る。

「四年にして、新人か」

そして、感慨深げに言う橙に、思わずセブンは視線を向けた。

「んだよ」

「あの子は残ってくれるといいな？」

「さあな。根性はあるみてえだけどな」

「騒がしい方がいいだろう？ お前も。毎日こんな根暗女の相手ではな」

見透かしてくるような瞳で、橙は言う。

セブンは、ぞんざいな声で返した。

「別に。十分だろ？」

上を向き、続ける。

「俺と、お前と。ついでに巖夫のジジイも入れといてやらあ。これだけいりゃ、特殊機甲課としちゃ、十分だろ？」

まあ、新人も、巖夫の子分も居りゃあ、悪くねえけどな。と最後はぼそりと呟いて。

セブンはデスクに頬杖を突き、右側の壁を見る。

「……そうか」

そして。

橙の音がオフィスに響いた、と思っただら。

「……おいしい？」

「ふふ、ひんやりとしているな」

何故か、セブンの膝の上に橙が乗っていた。

「なにしてんだオマエ」

「さて、な」

面喰らって、セブンは橙を見る。

橙は、セブんに座ったまま、後ろを向いて、セブンを見上げた。

「暑いんだ。少しは我慢しろ」

頭を抱えるセブン。

(マジで狙ってんじゃないかねえだろうな……)

これもまた、いつも通りの特殊機甲課だ。

I n t e r r u p t / B アカイストレート（後書き）

些か遅くなってしまいました。

次回、セブンメインの閑話で、その次回から通常通りとさせていただきます。

Interrupt 〇 セブンライトレフト

格納庫。

備品であるセブンといえども、休みはある。

適度な休暇は、健全な精神を保つために重要だからだ。

そして、そんな休暇中に暇になれば、セブンは格納庫に行くことが多い。

たとえオフィスに誰もいなくても、格納庫になら整備員の一人や二人いるのが普通だからだ。

「セブンさん……、俺、好きな子いるんすよ」

なのだが、何故か、セブンは年若い整備員に恋愛相談をされる羽目となっていた。

「そオかい」

興味無さ気に、セブンは明後日の方向を見ながら、返事を返す。
コンテナを背に、座りながら。

「それで、今度告白しようと思って……。色々と考えてあって……」
「おいオマエそりゃ死亡フラグだ。自殺志願者か」

恋は盲目。

年若い整備員、名を章人と言うが、セブンの反応も、返答も半ば聞いている様子。

「それでっすね、セブンさんにアドバイスを貰いたいんす」

「あ？」

思わずセブンは顔を章人の方へと向けた。

「バカかテメエ、まさかバカか？ もしくはバカか？」

「え？ ちょっと、セブンさんいきなりなんなんすか」

「俺に恋のアドバイスを求める奴がいるか。俺が、恋の、アドバイスが、できるように、見えんのかよ」

「えー？ 刑事^{デカ}ってやつは取調べでのオトし術^{デカ}ってあるんじゃないっすか？」

「テメ……、取調べと色恋一緒にすんなよ」

「で、でも、俺、これが初恋っすから！！ 何でもいいから聞かせて欲しいんすけどっ！！」

「同僚はどうしたってんだ」

聞くと、章人は気まずそうに視線を逸らした。

「えっと、みんなこういう仕事っすから……、恋愛経験とか」

「そっぴや橙が来ただけで硬直するような奴等だったか……。巖夫の野郎は？ 結婚してなかったか？」

「そもそもジエネレーションギャップがありすぎて……」

「まあ、参考にはならねエだろうが」

「と、言うことで仕事で日常的に二人の女の子と接してるセブンさんにアドバイスをお願いしたいんすよ」

確かに、整備員という仕事は異性に魅力的に映り難い。

働く場所が場所だけに安定した給料だけはもらえるのだが、しかし、いかんせん作業が泥臭すぎるのだ。

清潔感とはかけ離れた汗と、潤滑油の香りは、女性に良いイメージを与えることは少ない。

それゆえに、目の前の男がもしも上手く行ったなら、それは僥倖と言えるし、相手の女も珍しい部類に入る逸材と言うことだ。

そもそもここに配属されなくとも、警察ではないどこかで機械をいじっていたのだろうが、現状セブンの整備により彼らがモテないのであって。

少し、責任も感じると言うものだ。

「要するに……、『吐け。吐いたら楽になれるぞ』……はい』を、『付き合ってくれ』……はい』の流れに置き換えてくれっていう話でいいんだな？」

協力する件に関しては、やぶさかではなかった。

「え、は、ハイ。それでいいっす！」

ただし、セブンはF・07としては恋愛などしたことはないし、生前も恋多き人間だったわけでもない。

だから、取調べのノウハウを流用する、殆ど酒の肴にしかならないようなソレだ。

「とりあえず、アテにすんなよ？」

「はいっ—」

青年は、楽しげに微笑んだ。

「えー、まずは、だ」

ところ変わって、特殊機甲課のオフィス。

セブンがホワイトボードを使って、整備員に講義を行っていた。

「昔のドラマにありがちな、強引な手法を例に挙げよう」

「はい」

「例えば、時間が半日近い上に、取調べの警官が非常に高圧的に出てる場合だ。『お前がやったんだろう！ 早く言え！』ってやつだ」

握った水性ペンが走り、強引な手法、と書かれて乱雑な丸で囲まれる。

「恋愛でいきや、あれか。イエスというまで拝み倒す方向だ。土下座連打で。効果のほどはと言えば、取調べにおいても、追い詰められていけば、相手もまあ、根負けする」

「なるほど」

「……で、これだが。こいつはダメだ。やるな」

「え、ダメなんすか？」

「おう、ダメだ。誰でもな、二時間も三時間も追い詰められりゃ、やってないのにやりましたって言うんだよ。それで後々になって裁判でだな。『実はやってません。取調べが高圧的でそう言っただけです』、と言い出すわけだ。途端にそいつは誤認逮捕。最悪人権問

題で首が飛ぶぜ」

「な、なるほど……、根負けして付き合うつて言っても本当に好きなわけじゃないから後々取り消されちゃうと言っわけですか……」
「そういうこつた。その後の好感度は最悪だろ。やってないのに裁判とか、不本意で付き合わされるとか」

そして、そんな誤認逮捕が増えればマスコミの良的である。
つまるところ、周囲からの評判が下がるのだ。
故に、いまどきの取調べと言っものは違つ。

「だから、最近は違え。真綿で首を絞めるようにしていくんだよ」

セブンの言葉に、章人がメモを取る。

「言わなきゃいけない、じゃなくて、言ったほうがいいかな、だ。
じわじわと事件の情報を小出しにしてだな。実はここまで分かつてるんだよ、と証拠をちらちら出し続ける」

「それでそれで？」

「そうするとだな。相手は思っわけだ」ここまで調べが付いてるなら、諦めて自白したほうがいいかな……』つてな」

「おお！」

「焦らず、優しくだな。辛抱強くゆつくりと相手の話を聞いたり、被害者がつかばれないとか、良心に訴えかけつた」

「セブンさんに似合わないっすね」

「うるせえ。とにかく、そうすつとどつか所作に見えてくる。急に押し黙つたり震えだしたりしたらその合図だ。後はとびきり優しい声で、『さ、仏さんを成仏させてやるんだ』ととどめの一言を話す。後は雪崩のように決壊だ」

「ほほう、なるほど……」

「つつても、話してて思ったが、これ相手がオマエのこと好きじゃ

ないと意味ねえな」

「……い、言われてみれば!!」

章人が驚愕の顔でメモから顔を上げた。

セブンは参ったなと腕を組んで考える素振り。

「いや、しかし、日頃から好きだってアピールをさりげなくして行けば相手のほうから、という可能性もある、んじゃないか？」

「いや、でも」

「つつてもな……、どっちかつつと取調べの落とし方は、人を素直にする方法だからな」

取調べは、隠してるものをつまびらかにするものであって、無い物を生み出すわけでもない。

警察は告白される方なのだ。

根本的に内容が違う。

「オマエはどっちかつつと白状するほうだから……」

「なんかないんすか？」

「つつかよ。もう告白の方法なんて簡潔に好きですって言っちまえばいいじゃねえかよ」

と、そこで、結局セブンは一般論に戻ることにした。

思考を投げ捨てた、とも言つ。

「ええ!?　なんか良い殺し文句とかないんすか!？」

「とりあえず長いよか短いほうがいいだろうが」

「そういうもん、なんすかね」

「いや、だつてよ。興味ねえだろ」

「俺につすか!？」

「長々とどこが好きです、ここに惚れました、って女々しいつつつか、お呼びじゃねえんだよって言われたらシマイだろうがよ」

「はあ」

「いいか、事件だってな。モノによって必要な情報が違うんだよ。死体を隠した場所とか、凶器の場所だとか。だが、必要なところはこつちできつちり確認するつ。問題は被害者と被疑者の関係であつて、友人であるテムエの身の上話なんて聞いてねえんだよ!! っつこつた」

「な、なるほど。たしかに必要ななら聞くつすよね」

「いやまあ結局、何気ない気が付いた一言が捜査の助けになることもあるし聞く女の性質になるんだろつけどよ。今の時代あんまり暑苦しいのも流行らないだろ」

言つて、セブンはペンを放り投げた。

そして、投げやりに椅子に座つて整備員に問う。

「つかオメエ、相手はどんなんよ。好かれてると思うか？」

結局講義は終わりを告げ、セブンはどうせ玉虫色なアドバイスに終始するだろう、と判断した。

「えつと多分……、そこそこ？」

「ハッキリしねエな。どんな奴だよ」

セブンが問えば、章人は嬉しげに、自分のことのように答えた。

「黒髪でショートボブの美人つすね！ それで、機械系の分野に詳しくて、俺等の仕事に理解があつて……」

「あー、大体分かつた。オマエと同種の機械オタで意気投合つて奴だな？」

みもふたも無い言い方だったが、遠からずということだろうか。明確に、章人は否定しなかった。

「え？ あの子はオタクって感じじゃないっすけどね」

「そうかよ。で、テメエはいつ告白するんだ？」

「……実は今日に」

思わず、セブンは突いていた頼杖が机からずり落ちることとなった。

「はあ!?!」

「今日の午後っす」

「テメエ……」

「あ、セブンさん後で格納庫来てくださいな。あの子にすげえメカ見せてあげるって言ってあるんすよ」

「人をダシにしゃがったなこの野郎。ぶっ殺すぞ」

「そいつは告白が終わった後にして欲しいっす」

「つか、俺ア一応機密の塊だろうがよ」

「いいじゃないっすか。分解するわけじゃないですし」

「あア、まあ、見るだけならな。それだけだぞ」

セブンは、落ちた肘を机に乗せなおし、呆れたように窓の外を見つめたのだった。

そうして、章人の想い人はやってきた。

午後二時。

暇そうな格納庫で。

「つか、巖夫にや怒られねえのかよ」

「普段は軟弱野郎、格納庫をなんだと思つてやがる！！　つて言うけど、章人の想い人のため、つったら『三十分だけだ。それ以上は承知しねえ』つてツンデレで了承してくれたんよ」

初々しく女を案内する章人から少し遠く、セブンは章人ではない別の整備員と喋っていた。

「そうかよ。まったくテメエらも暇だなオイ」

「つか、セブン氏がメンテ必要にならない限りはあんま仕事もねーからなあ。一応通常業務はあるけど、二年もすりゃ慣れてきてこうして空き時間ができるつて訳さ」

「ちよっとどっか行つて壊してくるか」

「やめてもらえねーかなーそういうの」

と、冗談を言う内に、章人たちが、セブンの前に現れた。

「……まあ！　これが!？」

「あ、ああ、うんいつ。そう！　この人が、警視庁の最先端、F・07さん」

章人の隣に立つ、噂の女は　。

(ほお、これはこれは……)

セブンのイメージ、分厚いレンズの眼鏡に三つ編みで地味、といった機械オタのイメージとはかけ離れた、柔らかな金髪の美人であった。

どこのお嬢様か、というレベルの上品さ。年はまだ十代だろうか。セブンからしてみれば少女と言ってもよいくらいだ。

(やるじゃねえか。ちよいと若い気もするが)

多分高校生か、その少し上くらい、章人との付き合いなら大学生だろう、とセブンは見て、それ以上は不躰か、と視線を外した。

「こ、これ、動くのですか？」

「これ、つつうのはちよいと酷いじゃねえのか？　お嬢ちゃんよ」

セブンは、少女の言葉に、些か大げさに指を差して見せる。

しかし、セブンを知らないと言うことは東京都、少なくともこの近辺の人間ではないようだ。

「あ、あつ、申し訳ありませんわ。……すごい」

「……つうこつて、俺が紹介にあずかった、噂に聞こえた凄いい奴だ」
「なんてお呼びすれば？」

「セブン。あとはさんでも様でも好きに付ける」

「では、セブン様、と。わたくしはアシユリー・ステリッツと申します」

「……マジで様付けされるたあ思わなかったぜ」

これがお嬢様か、と慄くセブン。
そんなセブンにアシユリーは言葉を紡ぐ。

「ところでセブン様。貴方の動力はなんですか？ 装甲の素材は？
最大出力は？ 最長稼働時間は？ 活動可能領域は？」

「……知らねエよ」

「……？ 知らないのですか？」

首を傾げるアシユリーに、つっけんどんに返すセブン。

「知らなくたって体は動くだろうがよ」

半ば投げやりだったが、納得したようにアシユリーは頷いてしまった。
「……」

「確かに、そうですね……。わたくし、目から鱗が落ちる思いですわ。人の大半は人体構造なんて詳しく知りませんものね。でも体は動きますわ」

と、そこで章人が割って入る。

「それに、その辺は機密に引っかけりそうだし……」

「まあ、そうだな」

「残念ですわ」

残念そうに頬に手を当てて呟くアシュリーだが、諦めず彼女は言葉が続けた。

「では、機密に引つかからない程度に色々教えていただけますか？」

「ああ」

頷くセブン。

「ええと、見た目から、歩いたり走ったり普通に人間にできることはできそうですけど、他には何ができるのですか？」

「撃つたり飛んだり、後あセンサー類がちよろつと。ネットにも繋げるぞ」

そのくらいなら構わないだろう、とセブンはスピーカーを響かせる。

それぐらいの情報なら、警視庁で発行した子供向けの雑誌に大雑把に乗せられている。

「飛んだり？」

「火い吹いて飛ぶ」

「どれくらいのスピードが出るのですか？」

「……基本的にマッハは出ねえ。詳しいスペックは言ったらやばい気がするな」

「あ、はい。では、撃つたりは？」

「掌からあれこれ弾を出せる。正直掌から出す意味わかんねえけど、開発者曰くロマンらしいぜ」

「はい、なるほど。では」

そして。後二十分ほど、質問に費やされることとなる。

セブンは、可能な限り親切に答えることにした。セブンの基準で
だが。

警視庁管轄内限定だが、ある程度メディアへの露出もあるのだ。
詳細、とまでは行かないが、ある程度は情報も開示されている訳
であり、そのくらいならば、とセブンは判断したのだ。

それに、セブンには警視庁のイメージアップという任務もあり、
客人を無礼に帰すのは好ましくない。

そうして、巖夫に許された刻限が少しずつ近づいてきた。

「アシユリー、そろそろ……」

腕時計を見た章人がアシユリーに声をかけた。

アシユリーも、はっと気が付いたかのように時計を見つめる。

「あっ、ごめんなさい。つい、わたくし夢中で……」

セブンはといえば、さりげなく、章人に近寄って、彼に耳打ちを
した。

「後あ頑張れよ。若いの」

「は、はいっす」

「では、お暇しますわね。今日は皆様ありがとうございました。本
当に楽しかったですわ」

優雅に一礼して、背を向けるアシユリー。

このままではいけない、と言わんばかりに。

それを、章人は意を決したように呼び止めた。

「あ、アシユリーっ」

「なんでしょう、章人さん？」

アシユリーが振り向く。

章人が遠目からにも、がちがちなのがよくわかる。

「そ、そそそ、その！」

そして、彼はその言葉を口にした。

「好きですっ！ 付き合っただけですっ！」

倉庫の全員が、固唾を飲んで、章人たちを見守る。
だが、アシユリーは。

「……ごめんなさい」

申し訳なさそうに首を振った。

「えっと……、どうしてか聞いていいかな」

「……そうですね。貴方はいいお友達だと思います。けれど」

彼女は、言いながらすつと手を持ち上げる。

「わたくしの好きなタイプは、この人なんですもの」

きゃ、言っちゃった、とアシユリー。

セブンは、その指先から、無言で一步横にずれた。

指先が、セブンを追う。

「……、……俺？」

「はいっ」

まさかの。

まさかの展開。

「重厚な駆動音……、鉄の擦れる甲高い音……、硬質なフォルム……、鈍い光沢……、堪りませんわ！！ ハアハア！！」

ずい、とセブンに詰め寄るアシュリー。

仰け反るセブン。

詰め寄るアシュリー。

仰け反るセブン。

「せ、セブンさん、酷いつすよ……」

「いや、待て、落ち着け、冷静になれ」

「もうわたくし自分を抑え切れませんわ！ 撫で摩ったり、ぺろぺろさせていただきますっ」

仰け反りに仰け反ったセブンが、ついに背後に倒れる。

アシュリーはその上に馬乗り。

力尽くでどうこうするのは簡単だが、しかし、怪我させてしまう恐れがあつて、強く出れなかった。

「ハアハア……、貴方と、合体したい」

「機械と人間じゃ合体できねえよ……」

「ぺろ……、ああ、つるつるしてますわ……」

「やめるオーツ！ はあなあせーツ！」

「話せ？ 言われなくともお話しますわ、明日の朝まで、おしゃべりしましょう？」

「セブンさん！ 俺の純情を裏切ったんすね……」

「……誰か助けるッ！！」

気が付いたら、周囲に誰もいなくなっていた。
巖夫がやってくるまで、その状況は続いたと言う。

翌日。

「えっと、セブンさん……、はは」

「よオ、章人。ぶっ殺すぞ」

「セブンさん、流石っすね。やっぱりモテるじゃないっすか」
「ぶっ殺すぞ。つうか、テメエはいいのかよそれでよお」

その日もセブンは格納庫に居た。

「えっと、鉄をペるペる嘗め回すような人はちよっと……」

「……俺もゴメンだな」

「はは、恋って難しいっすね……」

「そっだな……」

格納庫で二人体育座り。
こんなのもまた、特殊機甲課の日常である。

Interrupt の センライトソフト (後書き)

次のやつは設定紹介 + です。

とりあえず、これでまた一区切り。

ここまでで何か思うことでもあれば気軽にどうぞ。

次回からはシリアス編になります。

お暇でしたらまたお付き合ってください。

Reboot トッコウソウカツ

F-07 MetalGhost

警視庁で製造された戦闘人形。言うなればアンドロイド。

十二年前に創設された警視庁兵器開発部によるもの。
かなりの高スペックを誇る。便宜上階級は警部補。

一応のこと、形式上は備品扱い。

何故か、起動に健全な人の精神が必要らしく、人工でそれを再現するのは不可能なため、殉職した警官の魂をインストールされた。

健全な精神状態を保つために食事や痛覚など、色々な余計とも思える機能が搭載されている。

食事が可能で、基本的に全て吸収して多少のエネルギーに変えることは可能。

赤井橙

課長。二十四歳。

背は高め。百七十センチ強。

銀髪に赤い瞳。

非常に優秀だが、出世街道を外れる特殊機甲課に何故か本人の希望で配属される。

ただし、当時二十歳での警部への昇進、課長就任と不審な点が目立つため、その際に上層部と何かあったと見られる。

特殊機甲課とは四年の付き合い。

胸がでかい。

立花リツカ

小さい。身長百五十センチあるかないか。

肩までの黒髪が特徴。階級は巡查。

童顔。

弱い。警官として最低限の訓練は受けたはずだが弱い。

地方警官だったが、しかし何の因果か特殊機甲課に引き抜きされる。

本名立花立花。

貧乳。

色気がねエ。

……。

「先輩なに書いてるんですか？」

「あ？ なんでもねえよ」

「ちよつ、今貧乳って見えたんですけどっ」

「……自覚があんなら上出来じゃねえか」

「え、やっぱり私のことなんですね!?! 見せてくださいっ」
「断る。見た瞬間その紙目からレーザー出して燃やす」
「ええ!?! 私ごと焼けません?」
「オマエごと焼ける」
「ええええええ……?」

一枚の紙を取り合う二人。
そんな二人に、橙は呆れたように声をかけた。

「……まったく、なにをやっているんだお前たち」
「あ? どうしたオレンジ」
「仕事だ、行くぞ」
「ん、今度あなんだ?」
「また銀行で大暴れ、と言ったところか」
「またか。まあ、いいさ、行くか」

立ち上がるセブン。
その背にリツカは叫ぶ。

「あ! 先輩、後で覚えといてくださいよ!?!」
「へいへいっつと」
「行くぞ」
「おう」

特殊機甲課、本日も異常なし。

Reboot トッコウソウカツ（後書き）

所謂設定集という奴ですね。

メインキャラの内容です。

今回はメインキャラが一人増える予定です。

そして、余談ですが、あらすじの内容やらが二転三転しております。まだ書いてない内容をあらすじに入れるのは卑怯かなと思ったり。出てから追加しようかなとか考えてるので、話が安定するまでころころ変わりそうです。

利用規約 走るロットマン

「きゃんっ」

通常、警察署というものには道場が付属する。

柔剣道用であるほかに、刑事が徹夜で捜査を行い、終電が無くなつた時、捜査本部が置かれ、他所からの刑事が来たときになどに、布団を引いて広間として利用する用途もある。

特殊機甲課と言えば、人数も少なく、どちらかといえば派遣される側の課であるので、研鑽の場としての側面が強い。そして、そんな道場で、身長百五十センチ弱の警官、立花リツカが悲鳴を上げていた。

「クソ弱え……。むかつき通り越してアワレだぞ」

悲鳴をあげ、倒れたリツカの前に立つのが、セブんだ。

「ひ、酷いですよ……。先輩」

「まだ指一本も触れてねエだろうがよ。ひとりでに転んでんじゃねえ」

呆れたように、セブンはリツカを見下ろしている。

「うー……」

対して、のろのろと立ち上がるリツカ。

セブンは手を貸さず、それを見守っていた。

「たくよ、何もねえところで転ぶやつがあるか」

「むうー……、そんな日もありますって」

しかし、これでは稽古以前の問題ではあるまいか、とセブンは懸念する。

ただでさえ、圧倒的重量差、膂力差があるのにそれを覆す方がこの様では、というやつだ。

だから、セブンは投げやりにひらひらと手を振った。

「やめだやめ、話にならねえ」

「えっ、まだやれますよっ、私」

リツカは言うが、セブンはそれを取り合わなかった。

「そもそもお前と俺じゃ差がありすぎて稽古にならねえんだよ」

「そ、そこは手加減してもらえれば」

「体重は手加減できねえよ馬鹿野郎」

言っと、セブンは手招きした。

そして、リツカに向かって言葉を放つ。

「押してみる」

言われたとおりに、リツカはセブンの腹辺りに手を付いて、全力で押し始める。

「んーっ！」

ただし、びくともしない。

「無理だろうが」

「え、でも、ほら、あれじゃないですか。相手の動きを利用して重い相手も投げるとか……」

「まずは達人になってから出直しやがれ」

「……ですよねー」

いきなりセブンはどうにもハードルが高すぎた。

リツカもあきらめて、道場から出ようとするセブンに続く。

道場は、直接外か、もしくは格納庫に繋がっている。

今回は、直接外に出て、二階であるオフィスへの階段を二人上った。

「いつそ整備員で練習でも……、いや、あいつら女相手だっただけでふにやふにやに手加減しちまって結局稽古にならねえか」

「はあ、まあ、みんな優しいですもんね」

「違えよ。ありや、彼女なし童貞の集まりってんだ。そんな奴が女と対峙してみる。緊張とストレスで動けなくなるぜ」

言いながら、セブンはオフィスへの扉を開いた。

「ん、もう戻ってきたのか？」

中には、課長の椅子で橙が作業をしている。

「駄目だ。俺じゃ基礎の時点で違いすぎる」

「ああ、やはりな」

橙にとっては予測の範囲内だったらしい。

思わずリツカは苦笑いした。

「やはりなって……」

しかし、そんなリツカは無視して、橙は言う。

「それより、こちらに仕事の話が来ている」

「あ？」

仕事と聞いて橙の方を向いたセブンに、橙は紙束を差し出した。

「前回の事件に中国系の組織が噛んでいることは言ったな？」

「あ、武器を送ったり、あと、前回の毒ガスもそちらから流れてきたという話ですよ」

リツカの言葉に橙は頷く。

「そうだ。そして、その組織について、警視庁の捜査官が尻尾を掴んだ。輸入物の麻薬が近日中に日本で取引されるらしい」

「待つのか？」

「ああ、コントロールド・デリバリーだ」

「生か？」

「相手もそう隙を見せない、ライブで行く」

その会話に、いまひとつ付いていけなかったリツカが疑問符を浮かべた。

「こんとろーど・デリバリーって何でしたっけ……？　もしくは、なんですかそれ」

その質問に対し、セブンは呆れたように答えた。

「違法なモンを運んでる奴をその場で即捕まえずに、監視の下泳が

せて、取引先にそれを持っていったところで取引先ごと一斉検挙。それがコントロールド・デリバリーって奴だ」
「えっと、じゃあ、ライブとかって……」

今度答えたのは、橙だった。

「取引する物を、安全なものに摩り替えておくのがクリーン・コントロールド・デリバリー。摩り替えずそのまま追跡するのがライブ・コントロールド・デリバリーという奴だ」
「つまり、今回は、麻薬を運んでる人と一緒に、受取人も一網打尽にって話ですか？」
「そうだ」

橙が肯定する。

「危なくないんですか？ それって」

「ああ、危ない。最悪普通に取引が行われてしまう。だから、十全な監視を行う」

「ま、運ぶ役割の奴一人捕まえたくらいじゃ組織レベルじゃ打撃にもなんねえ。せめて、取引先ごと潰さねえとな」

平然と言うセブンに、リツカは質問で返した。

「それで、私たちですか？」

「つつか、主に俺だろうがよ。こういう捕り物にや大概参加しろってお触れが来る。ま、便利だからな。壊れにくいのも、戦力差見せて戦意挫くのも」

前線で派手に大暴れすれば、相手の士気は下がり、味方の士気は上がる。

容易ではないが、道理だ。

「いつ動きがあるか分からん。だから、警戒は怠らないでかけ」

「ああ」

「はい」

と、そこでその話が終わると、椅子を引いて橙は立ち上がった。

「と言った所で、パトロールに行くのでしょうか。今日の当番は私とセブんだ」

「ああ？ 今日には厳戒態勢ってことで」

面倒くさげに返すセブんに、真面目腐ったように橙は言う。

「少数精鋭である故に、どこに居ても連絡さえ取れば課として機能するのが特殊機甲課の長所だ」

「けっ、面倒臭エ」

特殊機甲課の実働メンバーは三人。

内、セブんとオペレーターが居れば、課としてはまったく問題ない。

故に、セブんと橙は立ち上がると、外へと歩き出した。

セブンの体が、太陽光を反射して鈍く光る。

「うちの課長は真面目なこって」

「真面目だけが取り柄だ」

「分かってらっしゃる」

おどけた声を上げて、セブンはアスファルトを鳴らした。

「パトロールつって、いざ本番に疲労困憊だったら目も当てられんねえぞ」

「大丈夫だ。体力には自信がある」

「その自信が問題なんだろうが。自信があるから無理して爆死すんだよ」

「覚えておこう」

真顔で橙は言う。

そのような会話を繰り返して、歩くこと数分。

二人は、ちょっとしたトラブルに巻き込まれることとなった。

それは、何の変哲もない道端を歩いていていた時のこと。

「む、なんだあれは」

そういつて橙が見たのは、謎の塊である。

道端に落ちていたその塊は百五十センチはあるつか。それを見たセブンは、すぐさま答えを返した。

「ありや、人間だな。倒れてる人間だ」

その返答を聞くなり橙は駆け出した。

それにセブンも続く。

「大丈夫か？ 意識はあるか？」

すぐさま、橙は倒れていた人物を助け起こす。
助け起こしたのは女だった。

「脈拍、呼吸、体温、異常無し。至って健康、貧血と見られるな」

セブンが、その女を見て言葉を漏らす。

そして、その言葉の通りに大事はなかったらしく、やがて、女は意識を取り戻した。

「ん……、ここは」

黒く長い髪をまっすぐに流した、暗い感じの女である。

背は高めで、スタイルも悪いものではないが、表情の暗さが目立つ。

「大丈夫か？ 君はここで倒れていた」

「そう言えば……、カラスの死体を見て、ふらっと」

言われて、セブンが辺りを見回すと、確かに、道路にカラスの死体が落ちていた。

内臓なんかはみ出して、確かに見るによろしくない状態となっている。

「ご心配を……。カラスの死体如きで失神し、お騒がせをしましたた……」

「いや、この警察という職業だとそういったものに慣れてしまいがちでな……。逆に新鮮な気分だ」

「リツカはカラスの死体でもキヤーキヤーうぜえぞ」
「……そうか」

橙が呟く中、女は立ち上がる。

「私は、こういうの、大好きで……」

「……それで、気絶するの？」

助けを乞うように、橙はセブンを見た。

意味がわからない、というような空気だ。

「好きだけど耐性ねえんだろ」

ぞんざいに、セブンは言い放つ。

必ずしも、好き嫌いと得意苦手は一致するものではない、と言っ
たところか。

「ま、とりあえず名前だけ聞かせろ」

「……どうしてです？」

「テメエが身元不明死体になったとき役に立つ」

「新田 史代（にいだ ふみよ）」

「へいへい、っと。それじゃ、気を付けてな」

「……はい」

ゆらりと歩き出す、史代。

それを見送って、二人はまた歩き出した。

「……ふむ、変わった人物だったな」

「まあ、な」

結局、それきり変わったこともなく、パトロールは終わりを告げ
。夜、麻薬取引開始の報が特殊機甲課に届いたのだった。

夜、取引が行われる倉庫にて。

「おいあんた。これから取引だ。邪魔が入ったら、仕事をしてくれ」
まだ若いスーツの男と、中折帽と茶色のコートの男が、薄明かり
の下会話を行っていた。

「ああ、わかった」

コートの男は、スーツの男が雇った用心棒のようなものだ。
帽子で、上手く顔を覗けない風貌だが、剣呑な空気を纏っている。

「では私は外を見てくるとしよう」
「ああ、頼む」

コートの男は、そう言うとふらりと倉庫を立ち去ったのだった。

埠頭。リツカはそこに居た。

果たして何に則ったのか、倉庫内でそれは行われるという。

「せんぱあーい……、怖いです」

『あ？　ざってえな、テメエは後方待機だろうが』

リツカが無線で会話をを行った相手からは、ぶっきらぼつな声が返ってきた。

まだ、状況は何も動き出していない。

張り込みを続け、実際に相手が取引を始めた時点で、一気に踏み込む。

その矢面に立つのがセブンで、今、遠巻きから双眼鏡で動向を見守っているのがリツカだ。

リツカは、窓を通して内部を覗いている。

「だって……、暗いんですよ……」

『夜はいつだって暗えよ！！』

セブンの大声に、思わずリツカは身を縮こまらせた。
未だに現場に動きは無い。

倉庫の中は電気も付いておらず、本当にここで取引が行われるのかどうかすら怪しいと思えるほど。

リツカの中では、緊張だけが募っていった。

「……まだ、かな？」

こんなときは、いつそ不謹慎でも早く始まってしまえと思う。
準備が出来てるなら早いほうがまだ。

が、しかし。

一向にことは起こらず、ただ只管リツカは待ち続ける。

「まだかな」

そんな折、リツカはふと肩を叩かれた。

「すみません……、お巡りさん、協力してあげたいんですけど、
とても大事なお仕事でして、手が離せません」

が、リツカは、肩を叩かれても振り向くことなく、申し訳なさそうに答えた。

しかし、再度肩を叩かれる。

「……困ってるんですか？ 少しもどれはその辺に別のお巡りさんがいますから、そっちに」

リツカとしては、責任重大な仕事に緊張でいっぱいだったのだ。
だから、どうしても応えることが出来なかった。

だが、肩は叩かれる。

「ええっと、そんなに困ってますか？　すみません、ちょっと待って」

リツカは、そこでやっと双眼鏡を下ろして振り向く。
そこで、気がついた。

「え……」

リツカの肩を叩いていたのは男である。
中折帽を被り、茶色の長いコートに身を包んだ男だった。
しかし。
それだけではない。

「貴方は……」

その顔。

その顔には異常なほど生氣というものが感じられなかった。
顔色は悪いなんてものじゃない。青白い、死人のような空気。
そして、その左の眼窩には何も嵌っていやしない。黒い空洞が覗くだけ。

最後に。

辺りに漂う吐き気を催す香り。

「いったい……」

これは、死臭だ。

それは、リツカに向かって、一度だけ口を開いた。

「ゾンビだ」

「いやあああああああ！！」

リツカは走って逃げた。一目散に逃げた。

「まだか？ もう少し引き付けろってか？」

セブンは、倉庫の近くで電磁迷彩を発動し、合図を待っていた。セブンのサーモグラフィでは、中では既に取引相手がやってきてあれこれ動いていることがわかる。

しかし、実際に室内を見ているリツカから合図がないということ。は、もう少し待てということだ。

人には、必ず油断する瞬間というものがある。

取引最中よりも、取引直後、だ。

無事に終わったという安心感が隙を生む。

そこに警官隊が踏み込めば、被害が少なめで済む。

「……まだか？」

ただし、いい加減まったく連絡が無いことに、セブンが痺れを切らし始めた。

引き付けるのはいいが、逃がしてしまつては意味が無い。

一体どうしたんだ、とセブンが無線でリツカに連絡しようと思つたその時。

「せんぱああああああい！！」

全力でリツカが走つてきた。

「ああ！？ テメなに持ち場離れてんだ！！」

「まま、待つてくださいよ！！ あれ！ あれ！！」

リツカが全力で背後を指差す。

セブンは、闇の向こうへ目を凝らした。

「ゾンビです！ あの人ゾンビなんです！！ 走るんです！！」

「は？ ゾンビってテメ……」

セブンが、言葉に詰まる。

こういったものには、逆にセブンの方が敏感なのだ。

まず感じ取つたのは。

サーモグラフィが、青いこと。

温度の高い場所は赤く、低ければ青い。そのサーモグラフィは、人影を前にしても赤を点さず。

体温が限りなく外気温に近いことを示している。

次に、臭い。類似するもの、それは死臭。

そして。

その男からは生きていれば起こりうる生体反応が読み取れなかった。

心臓の鼓動。血液の流れ。聞こえない。

(なんかヤベエ……!!)

そう感じたのはセブンの直感。

そして、その直感に逆らうべきではない、とセブンは迫る男に手のひらを向けた。

「威嚇はしねエ……!!」

瞬間、発砲。

こういった時に迷うことが命取りになる。故に迷わず弾丸は放たれた。

穿つ。

相手が仰け反る。

「せ、せ、せんぱい……」

「……」

だが。

仰け反った体勢が戻る。

歩みが、止まらない。

「おいおいおい……!! ……マジかよ」

瞬間。

ジャキリ、と男が銃を向けた。

「下がってる新人!!」

「は、はい!!」

リツカを背に隠し、セブンはその銃弾を受け止めた。

「こちらセブン！ 相手方の用心棒と見られるアンノウンと交戦中
!! こっちはこっちでやる！ とつとと突入しろ!!」
『了解』

状況を察した橙の声が響く。

程なくして、周囲が騒がしくなった。

橙の一声で倉庫への突入が始まったのだろう。

が、しかし、セブンはその中に入ることは出来そうもない。

「ゾンビ退治と行こうじゃねえか!!」

向き合って、銃撃。

ゾンビは、左右に走ってソレをよけるが、セブンは背後にリツカを隠しているため、足を止めての銃撃となった。

「せせせせ先輩、おかしいですよ、ゾンビなのに走ってるんですよ
!?!」

「………最近のゾンビはハイテクだな」

ゾンビは、迷いなく、握った二丁の拳銃でセブンを狙い打つ。
長大で、異常な大口径だが、セブンを穿つには至っていない。

「せせせせ先輩、おかしいですよ、ゾンビなのにスタイリッシュに
銃撃ってきます!!」

「……最近のゾンビはハイカラだな」

逆に、セブンの撃つ連射された銃弾は、ゾンビの移動によって避けられている。

当たり、貫通した弾があれども、しかし、何でもないかのようにゾンビは動いていた。

さすがに不可解で、セブンは注意深くゾンビを見る。

「……傷口がなくなってる？ どうなってんだ」

セブンのカメラがズームしてゾンビの服に開けられた穴を見るが、傷がなく、腐れたような表面が見えるだけだった。

と、その時。

「せせせせ先輩、おかしいですよ、ゾンビがロケットランチャー構えてます!!」

「最近のゾンビ凄すぎだろ!!」

セブンを仕留め切れないと判断したか。
爆発する弾頭が放たれていた。

「新人っ!!」

「きゃあ!!」

セブンが、リツカを突き飛ばす。

リツカの鼻先で爆発。

「先輩!!」

リツカが悲鳴のような声を上げた。

「うるせエー!!」

爆発の煙の向こうから、確かに声が響く。
程なくして、煙が晴れた。

「行くぜこの野郎……!!」

セブンが、ゾンビの腕を掴んでいる。

セブンもまた、銃撃戦では埒が明かないと感じていた。
それゆえの最接近。

が、そこから行動を起こそうとするセブンに通信。

『聞こえるか、状況が終了した!』

「どうした!」

『やられた、遅すぎたようだ。有耶無耶で、逃げられた』

「くそっ、やっちゃまったか」

失敗の報。

だが、切り替えは早い。

「なら、せめてテメエにあれこれ吐いてもらっぜ!？」

せめて、情報を得ねば、手がかりなし、八方手詰まり。

どうにか捕獲しようと詰め寄るセブンに、銃を持った片腕を動かすゾンビ。

「んな豆鉄砲!」

知ったことではない、と腕を引き絞るセブンだったが、弾丸が放

たれたのは、ゾンビの掴まれた腕に対してであった。

「は!?!」

驚いて一瞬止まるセブン、引きちぎれるゾンビの腕。握っていたゾンビの腕は、嘘のようにぶちゆりと音を立てて、あっさりとしてセブンの手に握りつぶされた。

「ここまでだな。機械の人。また会えたら、また会おう!」

そこからのゾンビの動きは速かった。

すぐさま踵を返すと駆け出す。人外のスピードであった。

そして、そのままゾンビは夜の闇へと消えていく。

「せせせせ先輩おかしいですよ、ゾンビなのにそういえば喋ってました!?!」

「……もうゾンビってなんだ」

呟いた言葉は夜空へと消えた。

利用規約 走るロットマン（後書き）

遅くなりました、三です。

そろそろメインキャラも増やしたいと思います。

あと、余談ですが、ユニークPVが千人越えました。

ありがとうございます。

この先も気張っていくのでよろしければお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3566u/>

メタルランページ

2011年10月5日13時42分発行